

佐渡日蓮研究

創刊号

佐渡日蓮研究会

佐 渡 日 蓮 研 究

創 刊 号

目 次

現代語対訳 開目抄(上)

佐渡の日蓮聖人(上)

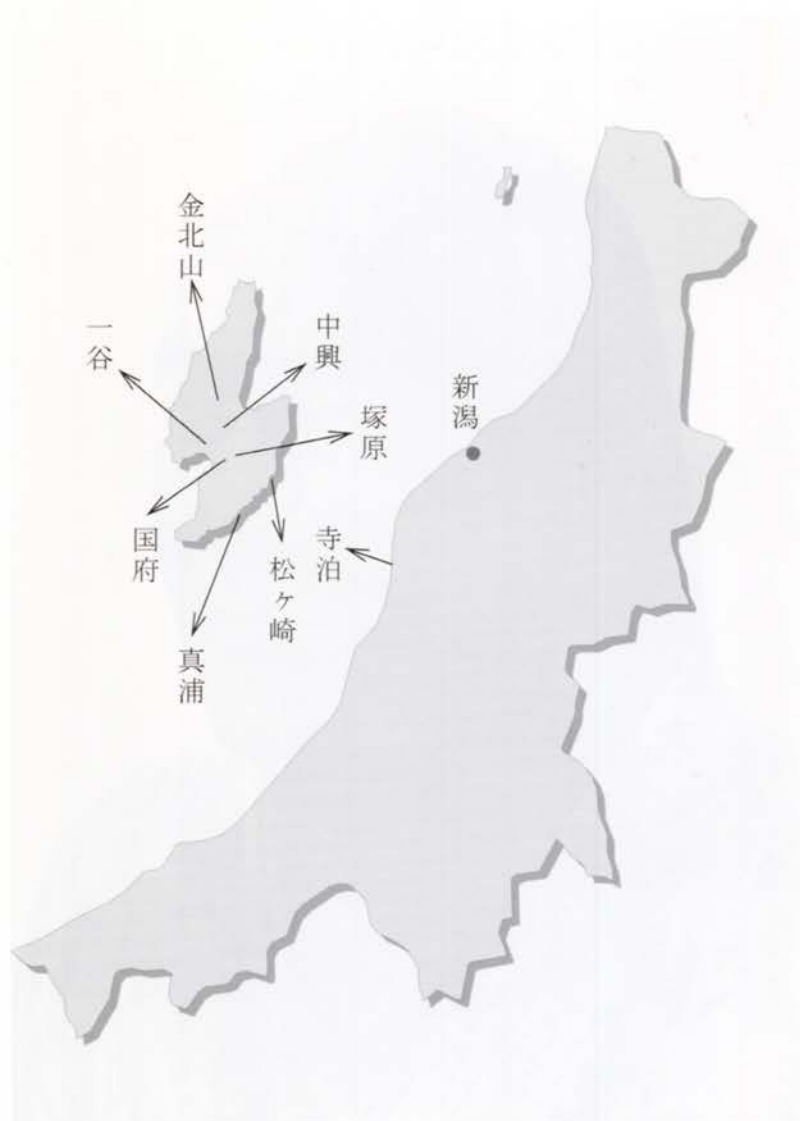
― 竜口でもたらされたこと ―

編集後記



日蓮聖人御影 池上本門寺蔵

(『図録 日蓮聖人の世界』より転載)



新潟県内各地の位置関係
(新潟県庁 地理情報課 提供)

現代語対訳 開目抄 (上)

目次

―(上)―

第一章 主師親と儒外内

頁数

① 儒教 (3)

② 儒教の役目 (3)

③ 外道 (6)

④ 外道の役割 (7)

⑤ 仏教 (10)

⑥ 法華經の眞実 (11)

第二章 一念三千と仏法の盗用 (12)

① 一念三千の法門 (13)

② 仏法の盗用と天台大師 (13)

第三章 諸宗の邪見と天台宗の衰退 (15)

① 諸宗の邪見と伝教大師 (17)

② 天台宗の衰退 (20)

第四章 二乗作仏 (21)

① 法華經と二乗作仏 (21)

② 爾前經での二乗不作仏 (23)

③ 法華眞実の証明 (31)

④ 法華經と諸經の相違 (34)

⑤ 仏滅後と二乗作仏 (36)

第五章 久遠実成 (39)

① 諸經不説の久遠実成 (39)

② 久遠実成の明文 (43)

③ 久遠実成と眞実の一念三千 (44)

④ 久遠実成の難信 (46)

⑤ 法相宗と二乗作仏 (48)

⑥ 華嚴・眞言兩宗と久遠実成 (50)

⑦ 仏滅後の宗教的混乱 (52)

第六章 自己認識と受難覚悟の発願 (57)

第七章 法華經の予言の色説 (57)

① 打ち続く法難
② 二十行偈の色説

(57)
(64)

―(中)―

第八章 諸天等不守護の疑問

① 一大事の疑問

② 報恩と行者守護

③ 二乗の受難

④ 法華の法恩

⑤ 守護の必定と未遂

第九章 迹門の師弟關係

① 弟子としての釈尊

② 具足道と十界互具

第十章 本門の師弟關係

① 分身の諸仏

② 地涌の菩薩の出現

③ 弥勒たちの疑い

④ 久遠実成の開頭

第十一章 本尊に迷う諸宗

① 諸經不説の一念三千の仏種

② 一念三千の盗用

③ 諸師の帰順

④ 守護の必定と再疑

第十三章 五箇の鳳詔と諸經の勝劣

① 三箇の勅宣

② 三箇の勅宣の意味

③ 六難九易と諸宗

④ 依法不依人

⑤ 已今当の三説超過

⑥ 諸經の類文

⑦ 類文と法華經との勝劣

⑧ 諸經の勝劣を知る

⑨ 二箇の諫曉

第十四章 未來記の明鏡

① 本書の撰述

② 三類の強敵の明文

③ 強敵の末法出現

④ 未來記の実現

⑤ 第一類の俗衆増上慢

⑥ 第二類の道門増上慢

⑦ 種々の善惡

⑧ 第三類の僭聖増上慢

⑨ 達磨禪師のこと

⑩ 念仏宗と禪宗

⑪ 法華經の行者と日蓮

⑫ 不守護の疑難と応答

第十五章 宿業による受難と立願

① 現罰がない三つの理由

② 三大誓願

第十六章 受難による滅罪と成仏

① 過去の謗罪と転重輕受

② 自然と梵天に至る貧女

③ 一念三千の仏種

④ 疑うことなかれ

第十七章 撰受と折伏

① 撰折二門の明文

② 撰折二門の選択

第十八章 三仏の慈悲と日蓮の三徳

① 三仏の慈悲

② 日蓮の三徳

夫れ一切衆生の尊敬すべき者三つあり。所謂主・師・親これなり。又習学すべき物三あり。所謂儒・外・内これなり。

儒家には三皇・五帝・三王、此等を天尊と号す。諸臣の頭目、万民の橋梁なり。

三皇已前は父をしらず。人、皆禽獸に同ず。五帝已後は父母を弁へて孝をいたす。

所謂重華はかたくなはしき父をうやまひ、沛公は帝となつて太公を拝す。武王は西伯を木像に造り、丁蘭は母の形をきざめり。此等は孝の手本なり。

第一章 主師親と儒外内

そもそも、生きとし生ける者がかならず尊重しなければならないものが三つある。それは主徳と師徳と親徳である。また、かならず学ばなければならない教えが三つある。それは儒教と外道と内道たる仏教である。

① 儒教

まず儒教では、古代中国で理想的な政治を行なつた伏羲・神農・黃帝の三皇、これにつぐ少昊・顓頊・帝嚳・堯・舜の五帝、さらに夏の禹王・殷の湯王・周の文王あるいは武王の三王、これらを天尊と呼ぶ。数多くの臣下の指導者であり、すべての人民に幸せをもたらす架け橋である。

三皇以前の人々は自分の父を知ることがなく、人間でありながら動物となんら変わることがなかった。五帝の時代以後になると人々は父母を尊敬し、孝の倫理が行なわれるようになった。

たとえば、後に舜王となつた重華は見苦しい所行のあつた父の瞽叟を敬い、漢の高祖となつた沛公は帝位についた後も父王に礼した。周の武王は父・西伯の木像をかかげて殷の紂王を討ち、後漢の丁蘭は、十五才の時に早世した母の

伏羲 中国古代伝説上の帝王で、八卦と文字を作つたとされ、東方の神・春の神として祭られる。
神農 中国古代伝説上の帝王で、人民に耕作の法を教え、交易や製薬の法なども授けたとされる。後世、火の神として崇拜された。
黃帝 中国地上最古の帝王とされ、すべての帝王および漢民族はその子孫と考えられた。舟車・衣服・家屋・弓矢・文字などを発明し、音律を定め医学を教えたという。
少昊 黃帝の子。秋を司る神。
顓頊 黃帝の孫。少昊の後を受けて高陽に都を造り、重黎に命じて天地を分ち、曆を作つたという。
帝嚳 堯王の父。「史記」等には理想的な帝王と記録されている。
堯 最初は陶、後に唐に封ぜられたので、陶唐氏と号した。日月・星辰を觀測して曆を作り、舜に二女を与えて帝位を譲つた。
舜 有虞氏と号したので虞舜と称される。堯王の禪讓を受けて帝位に就き、以後十八年よく善政を布いた。儒家では堯と舜の二王が理想的な帝王とされる。
夏の禹王 中国最初の王朝と伝えられる夏の始祖。舜王から帝位を譲られて天下を治め、相益に讓位しようとしたが、死後に子の啓が帝位に就き、世襲制が始まつた。
殷の湯王 中国・殷王朝(前1600頃〜1100頃)の創始者で、成湯ともいう。河南地方に都し、名臣伊尹を用いて諸部族を討伐し、夏の悪王・桀を滅ぼし、殷を開いた。
周の文王 号は西伯。前十一世紀頃に殷の紂王を破り、周王朝を創建して天下統一に成功し、中国の封建制度を創設した。武王の父で、古代の理想的な君子とされる。

木像を造り、生前同様に給仕した。これらはみな孝行の模範である。

比干は殷の世のほろぶべきを見て、しゐて帝をいさめ、頭をはねらる。公胤といふし者は懿公の肝をとて、我が腹をさき、肝を入れて死しぬ。此等は忠の手本なり。

尹伊は堯王の師、務成は舜王の師、太公望は文王の師、老子は孔子の師なり。此等を四聖とがうす。天尊、頭をかたづけ、万民、掌をあわす。

此等の聖人に三墳・五典・三史等の三千余巻の書あり。其の所詮は三玄をいず。

三玄とは、一には有の玄、周公等、此れを立つ。二には無の玄、老子等。三には亦有亦無等、莊子が玄これなり。玄とは黒なり。

比干は殷の国が滅ぶことを見過ごせず、自分の甥にあたる紂王を諫めたが容れられず、妃の姐己の讒言により首を切られた。他国への使いから帰った公胤(弘演)は、敵に惨殺され、捨てられた主君懿公の肝を見て、思わず自分の腹を切つてそれをおさめて、息を引き取った。これらは忠の鑑というべきである。

堯王は尹伊(尹寿)を師とし、舜王は務成に従い、文王は太公望に導かれ、孔子は老子に学んだ。これら尹伊などの人々は四聖と呼ばれる。国王さえも頭を下げ、すべての民は合掌して尊敬の心をあらわす。

そんな聖人たちにはそれぞれ、三皇には三墳、五帝には五典、三王には三史などというように、総計三千余巻の著作があり、その主張の要点は三玄にまとめられる。

三玄とは、第一には「有の玄」。すべてのものは太極という有から生じるといふ説で、周公旦や孔子の主張である。第二は「無の玄」。あらゆるものは無から生じるといふ義で、老子などの教えである。第三には「亦有亦無の玄」。自然を

沛公 前漢の創始者である高祖・劉邦のこと。沛郡の出生で、同地において始めて挙兵した時に沛公と呼ばれた。
丁蘭 中国漢代の代表的な孝子。幼時に母を失い、十五歳の時に母の木像を造つて生前と同様に仕えたが、これを憎んだ妻が像の顔を焼いたところ、丁蘭は妻を疎遠にしたといふ。

比干 殷の紂王の父方の伯父。殷の三仁の一人。

公胤 弘演のこと。中国春秋時代の衛の人で、懿公の忠臣。

尹伊 堯王の師・尹寿のこと。河陽(河南省孟県の西)に住んで道德経を説いたと伝えられる。

務成 姓は複、名は昭。務成子。務成昭とも称するが、その伝は未詳である。

太公望 呂尚のこと。本姓は姜氏で、字は子牙。渭水で釣りをしていた文王に見出され、文王の祖父・太公が周に必要な人材として待ち望んでいた人という意味で太公望と敬称された。文王・武王の二代に仕えて暴君・紂王を倒し、その功によって齊国に封ぜられた。

孔子 前551〜前479。中国・春秋時代の思想家で、儒教の開祖。名は丘、字は仲尼。成人して司寇として魯国に仕えたが、その政治改革が入れられずに官を辞し、弟子と共に衛・陳・宋・蔡・楚など七十余国を約十四年間遍歴して遊説した。六十九歳にして故国・魯に帰り、門弟の教育に尽力して、哀公十六年に七十四歳で没した。「論語」はその言行を収録したもの。

老子 中国・周代の思想家。姓は李、名は耳、字は聃(たん)あるいは

父母未生已前をたづぬれば、或るいは元氣よりして生ず。或るいは貴賤・

苦樂・是非・得失等は皆自然等云云。

かくのごとく巧みに立つといえども、いまだ過去・未来を一分もしらず。玄とは黒なり、幽なり。かるがゆへに玄という。

但現在計りしるににたり。現在にをひて仁義を制して身をまぼり、国を安んず。此れに相違すれば、族をほろぼし家を亡ぼす等いう。

此等の賢聖の人々は聖人なりといえども、過去をしらざること、凡夫の背を見ず、未来をかみざること、盲人の前をみざるがごとし。

但現在に家を治め、孝をいたし、堅く五常を行ずれば、傍輩もうやまい、

本として、一切が有にしてまた無であるという哲理で、莊子の所論である。この場合の玄とは黒という意味である。

我々の人間存在の根源について、孔子は天地混沌の元氣から成立すると説き、老子や莊子は貴賤・苦樂・是非・得失などはみな無為自然であり、天命であると主張した。

このように一見たくみに宇宙万象の起源は説くけれども、過去世や未来世のことには少しも通じてはいない。玄とは黒色であり、微かであるというのも、そのような明らかでないさまを玄と称しているだけである。

結局は、この現在の生だけを知っているに過ぎないといえる。彼らは現世において仁義の道を立て、これによつて各自の身を守り、国の安泰を図ろうとする。また、その仁義に相違すれば一族一家が亡びるなどと教えるのである。

周公旦や孔子などという人々はみな賢人であり聖人であるけれども、過去も知らないし、未来を洞察することもない。あたかも凡人が自分の背中を見ることがなく、目の不自由な人がみずからの前を見ないのと同様である。

ただ現在世において、一家を治めて父母に孝養を尽くし、ひたすらに仁・義・礼・智・信の五常を守り行なえば、隣人も

は伯陽ともいう。「史記」によると、母の胎内にあること八十一年にして生まれ、白髪の老人として誕生したところから老子と称したという。周の守藏室史(藏書室の管理者)となり、周末の混乱を避けて隠棲しようとして西方の閼所を通る時、閼守役人の尹喜(いんき)の請いにより「老子道德経」五千余言を説いて、のち行方知らずとなつたという。

周公旦 中国周代の政治家。姓は姬氏。文王(西伯)の子で、武王の弟。初め周(陝西省岐山県)に封ぜられたところから周公と称す。武王を助けて殷を滅ぼし、武王の死後はその子・成王を助けてよく執政し、周王室の基礎を築いた。

莊子 紀元前四世紀後半の中国、戦国時代の思想家で、道家思想の中心人物。名は周で、南華真人と呼ばれる。孟子と同じ頃の人で、儒教の人為的な礼教を否定して無為自然を重視した。老子と合わせて老荘と称される。

元氣 万物生成の根本となる精氣。または、活動の源となる氣力や身心の勢力などという。

仁義 仁と義。仁は、広く人を愛する義で、孔子の教えた人間らしさをいう。義は、人間としての正しい道の意で、孟子が仁と共に重視した徳目である。

礼・智・信 礼は、社会秩序を維持するための生活規範のことで、荀子が重んじた。智は、物事を識別する能力で、智恵のこと。信は、偽らない誠のことで、誠実の意。

名も国にきこえ、賢王もこれを召して或は臣となし、或は師とたのみ、或は位をゆづり、天も来たりて守りつかう。

所謂 周の武王には五老きたりつかえ、後漢の光武には二十八宿来たりて二十八将となりし、此れなり。

而りといえども、過去・未来をしらざれば父母・主君・師匠の後世をもたすけず、不知恩の者なり。まことの賢聖にあらず。

孔子が「此の土に賢聖なし、西方に仏陀という者あり、此れ聖人なり」といひて、外典を仏法の初門となせし、これなり。

礼楽等を教へて、内典わたらば戒定恵をしりやすからせんがため、王臣を教へて尊卑をさだめ、父母を教へて孝の高きをしらしめ、師匠を教へて帰依

尊敬し、名声も国中に高まる。すると、賢明な王に召されて臣下となり、師となり、また国王の位を譲られ、諸天も来下して守護すると教える。

かの周の武王には太公望・周公旦・召公奭・畢高公・蘇忿生の五老が集まり、後漢の光武帝には天の二十八宿が二十八人の將軍となつて仕えたというのは、この例である。

けれども、現在世ばかりで過去世も未来世も知ることがないために、父母や主君や師匠の未来世に安樂をもたらし、その恩に報いることはできない。したがって、本当の意味での賢人・聖人ではない。

② 儒教の役目

孔子が、「漢土には賢人や聖人の名に値する人はいない。西方のインドに仏陀という方がおられる。その人こそまことの聖人である」といって、みずから立てた儒教を仏教への入口としたのも、このような意味からである。

したがって、孔子が礼儀や音楽などを教えたのは、後に渡来する仏教の基本である戒・定・恵を受け入れやすくするためであつて、王と臣下との関係を教へて尊卑の違いを示し、父母の恩を教へて孝の大切さを知らせ、師匠の徳を教

武王 前1050頃。中国・周王朝初代。姓は姫、名は発。文王（西伯）の子。父の遺志を継ぎ、弟の周公旦や太公望呂尚などの助けを得て殷の紂王を滅ぼし、天下を統一した。この時に武王は父・文王の木像を奉持して出陣したといわれる。

光武帝 前65。中国・後漢の初代皇帝。在位は55年。姓名は劉秀、字は文叔。父は劉欽、母は樊氏で、前漢の高祖九代の孫にあたる。春陵に挙兵して王莽の大軍を破り、漢王室を再興して洛陽で即位した。中央集権化を進め、儒学を尊重して、後漢の基礎を築いた。

二十八宿 月・太陽・春分点・冬至点などの位置を示すために黄道付近の星座を二十八種に定め、それを宿と称した。中国では蒼竜・東、玄武・北、白虎・西、朱雀・南の四宮に分け、それをさらに七分して二十八とした。

戒・定・恵 仏道修行者が必ず修学しなければならない三部門で、三学という。戒は戒律で、身・口・意の三業の悪を止め非を防いで善を修すること。定は禪定で、身心を静かにして心を一所に定め、雑念を払い心を乱れないようにすること。恵は智慧で、定学によって静かになった心で煩惱を断じて真理を顕わすこと。戒によって定をたすけ、定によって恵をおこし、恵によって仏道を成就するという三学相互の関係となる。

孝 父母を大切にして、その言いつけをよく守ることで、子としての道を大切にする心がけをいう。孝行 儒家の道德思想の根本をなす徳目である。

をしらしむ。

妙楽大師云く「仏教の流化、実に茲に頼る。礼楽前に駆せて、真道後に啓らく」等云云。

天台云く「金光明經に云く、一切世間所有の善論、皆、此の經に因る。若し深く世法を識れば即ち是れ仏法なり」等云云。

止観に云く「我、三聖を遣はして彼の真丹を化す」等云云。弘決に云く「清浄法行經に云く、月光菩薩、彼しこに顔回と称し、光浄菩薩、彼しこに仲尼と称し、迦葉菩薩、彼しこに老子と称す。天竺より此の震旦を指して彼しこと為す」等云云。

二には月氏の外道、三目八臂の摩醯首羅天・毘紐天、此の二天をば一切衆生の慈父悲母、又天尊・主君と号す。

えて帰依の重要さを分からせた。

それゆえ、妙楽大師は「漢土に仏教が流布したのは、儒教の下地のおかげである。かの礼楽の思想が先駆けとなつたので、真の教えである仏教が後に弘まった」と述べ、

天台大師は「金光明經は『世間の人々を利益するあらゆる教えは、みなこの經に基づいている。だから、もし深く世間の道理を知れば、そのままにして仏の教えである』と説く」と示されている。

また、「摩訶止観」に引かれた「私は三人の聖者を遣わして、漢土を教化する」という仏の言葉について、妙楽大師は「清浄法行經によれば、月光菩薩は彼処に出現して顔回と名乗り、光浄菩薩は彼処で仲尼(孔子)と称し、迦葉菩薩は彼処では老子と現れた。ここではインドから漢土を指して彼処といっている」と解釈している。

③ 外道

第二はインドの外道である。外道の教えでは、三つの目と八本の臂をもつ摩醯首羅天(自在天)と四本の臂をもつ毘紐天の二天を、すべての人々に慈悲を与える父母とし、

妙楽大師 中国天台宗の第六祖・湛然(282)のこと。蘭陵の妙楽寺に住んだため妙楽大師と呼ばれる。二十歳で玄明に師事して天台教学を学び、天竺(748)に三十八歳で出家した。後に会稽に赴いて曇一に律を学び、吳郡の開元寺で天台の「摩訶止観」を講じた。師・玄明の没後は妙楽寺や国清寺に住し、華嚴・法相・禪に対して天台学を宣揚した。天台の玄義・文句止観の三大部に注釈を加えた。天台大師 582-651。中国天台宗の開祖・智顗。天台山に住したところから天台大師と称し、智者大師と号す。湖南省岳州府華容県の人で、姓は陳氏。字は德安。十八歳で湘州果願寺の法緒について出家し、天嘉元年(560)光州大蘇山を訪れて南岳大師惠思に師事した。惠思の下で法華三昧の行法に努めて豁然大悟した。光大二年(568)金陵(南京)に至り、八年間瓦官寺にあつて諸經論を講義して禅法を弘宣したが、太建七年(575)には仏道修行に専念するために天台山に隠棲した。同山にあること十一年、天台教学の基礎を構築したとされる。至徳三年(585)に陳主の命を受けて金陵の光宅寺で「仁王般若經」を講義し、禪明元年(587)には同寺で「法華文句」を講説した。その後、当陽県に玉泉寺を創建して開皇十三年(593)に「法華玄義」、翌年には「摩訶止観」を説いている。開皇十五年に晋王の請により金陵に赴いて「浄名義疏」を撰述し、次いで天台山に帰り、死期を知って「観心論」を口授して、同十七年十一月二十四日に天台西門の石城寺において入滅した。

迦毘羅・漚樓僧伽・勒婆、此の三人をば三仙となづく。此等は仏前八百年已前已後の仙人なり。此の三仙の所説を四韋陀と号す。六万蔵あり。

乃至、仏出世に当たりて、六師外道、此の外経を習伝して五天竺の王の師となる。支流九十五六等にもなれり。

一々に流々多くして、我慢の幢高きこと非想天にもすぎ、執心の心の堅きこと金石にも超えたり。

其の見るの深きこと巧みなるさま、儒家にはなるべくもなし。或るいは過去二生・三生・乃至七生・八万劫を照見し、又兼ねて未来八万劫をしる。

其の所説の法門の極理、或るいは因中有果、或るいは因中無果、或るいは因中亦有果亦無果等云云。此れ外道の

天尊・主君と称している。

また、数論派の祖・迦毘羅、勝論派の祖・漚樓僧伽、ジャイナ教の祖・勒婆の三人を三仙と崇める。三仙は釈尊が出世される以前、おおよそ八百年前後の仙人であるが、彼らの所説は四韋陀(ヴェーダ)と称し、その数は六万蔵あるとされる。

その教えは漸次流布し、釈尊が出世した頃には有名な六師外道がその聖典を習い伝えて、インド諸国の師となり、その分派は九十五、六にも及んだ。

諸流はさらに分派を続け、各自が慢心して高く挙げた旗は三界最高の非想天(有頂天)をも突き通す勢いであつたし、自説に執着する心は金や石よりも固かつた。

その思想は儒教に比べれば深く勝れている。彼らは、過去世の二生・三生から七生、さらには八万劫の過去を見通し、また未来世も八万劫の先まで知ることができると主張した。

教えの根本は三つに大分され、一つは原因の中に結果があるという数論派の説、次は原因の中には結果がないとする勝論派の説、三つ目は原因の中に結果があつたりなかつ

秋時代の儒者で、魯の人。字は子淵で、顔淵とも称する。孔子の第一の門弟で、貧困に負けることなく学・徳ともに勝れていたが、師よりも早く亡くなり、後に復聖と称された。

摩醯首羅天 大自在天のこと。インド婆羅門教のシバ神の異名で、万物創造と破壊をつかさどる外道の最高神。後に仏教の中に入り入れられ、仏法守護の神となる。その像は三目八臂で天冠を戴き、白牛にまたがり、三叉戟を所持する。毘紐天 太陽を神格化した神で、バラモン教では宇宙創造の最高神とされる。仏教では色界三禪天の第三天で、那羅延天・自在天・婆薐天などの別名とされる。

迦毘羅 インド六波哲学の中の数論外道の祖と伝えられる。祭式の功德を軽んじて人格神の存在を疑い、思弁的知見を通した解脱を主張したという。漚樓僧伽 インド六派哲学の一つのヴァイシエシカ(勝論)学派の祖とされる。「因の中に果なし」とする因中無果説を主張し、「勝論経」の作者と伝える。

勒婆 因中の果について亦有亦無の義を立て、現世に苦行を行なうことによって未来に楽果を受けることができると説いて、苦得外道・尼乾子外道の祖となつた。また、共生・共性の義を主張したところから、共生外道とも呼ばれる。非想天 非想非非想天の略。三界の最頂の天で、有頂天ともいう。また、極めてわずかな弱い心の想念があるだけで、ほとんど無想に近い禪定の境地の世界をいう。

極理なり。

所謂いわゆる善き外道は五戒ごかい・十善じゅうぜん戒等かいとうを
持ちて、有漏うろの禪定ぜんじようを修し、上しき、色しき
・無色むしきをきわめ、上界を涅槃と立て
くつづかぬ虫のごとくせめのぼれども、
屈歩虫のごとく返りて三惡道に墮つ。
非想天より返りて三惡道に墮つ。

一人として天に留まるものなし。而れども天を極むる者は永くかへらずとをえり。

各々自師じしの義をうけて堅く執するゆへに、或るいは冬寒ふゆさむに一日に三度恒河ごうがに浴し、或るいは髪をぬき、或るいはいわお巖に身をなげ、或るいは身を火にあぶり、或るいは五処ごしょをやく。

或るいは裸形、或るいは馬を多く殺らぎようせば福をう、或るいは草木をやき、或るいは一切の木を札す。此等の邪義、其の数をしらず。

たりするという尼乾子にけんしの説であり、これらが外道の説く極理ごくりである。

彼らの中でも、すぐれている者は五戒や十善戒などを守つて初門の禪定を修行し、天上の色界・無色界の最高にある非想天に涅槃^{ねはん}があると思ひ定め、尺取虫^{しゃくとりむし}のようにせめのぼるものの、その果報が尽きたとたんに、非想天から地獄・餓鬼・畜生の惡道に墮ちてしまう。

その結果、一人として涅槃を得て天に留まつた者はいないが、彼らは天に到つて涅槃を得た者は再び生死の世界に戻ることはないと考えている。

また、それぞれ師匠の教えを正しいものと信じ込み、冬の寒い頃に一日に三度もガンジス河の水を浴び、髪の毛を抜き、石に身体を打ちつけ、身体を火中に投じ、頭と手足を火で焼いたりした。

あるいは全裸で生活し、馬を数多く殺せばそれだけの福を得ると説き、草木を火で焼き、すべての木を礼拝したりした。このようなさまざまな邪惡な教えは数えることができない。

五戒 小乗教の戒で、在家の仏教信者が守るべき五つのいましめ。優婆塞戒・優婆夷戒・近事律儀・近事女律儀ともいう。①不殺生戒：生きものを殺さないこと。②不偷盜戒：盗みをしないこと。③不邪淫戒：性に關して乱れないこと。特に妻以外の女、夫以外の男と交わらないこと。④不妄語戒：嘘をつかないこと。⑤不飲酒戒：酒を飲まないこと。

十善戒　在家の人が守るべき十種の戒め、十戒ともいう。不殺生（生き物を殺すなかれ）・不偷盗（物を盗むなかれ）・不邪淫（男女の道を乱すなかれ）・不妄語（嘘をつくなかれ）・不綺語（飾つた言葉を言うなかれ）・不惡口（悪口を言うなかれ）・不兩舌（二枚舌を使うなかれ）・不貪欲（食ほふことなかれ）・不瞋（怒ることなかれ）・不邪見（間違つた見解を懷くなかれ）の十戒。

三界　三界（欲界・色界・無色界）の一つ。欲界の本能的欲望（食欲・淫欲・睡眠欲を離れて淨慮（禪定）を修行した者が生まれる天界で、物質的なものがすべて清浄である世界をいう。

無色界、三界の一つで、色身を離れた物質の束縛を離脱した心のはたきだけからなる世界。

涅槃 燃えさかる煩惱の火を滅尽して、悟りの智慧である菩提を完成した境地。迷いや悩みを離れた悟りの境地をいう。小乗仏教では煩惱を滅し尽くした状態を涅槃とし、これに煩惱は断つたが肉体はなお残存する有余涅槃と、すべてが滅無に帰した灰身滅智の無余涅槃を立てる。

ガンシス河 インド東北部を流れる大河。仏典などでは恒河といい、

師を恭敬する事、諸天の帝釈をうやまい、諸臣の皇帝を拝するがごとし。

しかれども外道の法九十五種、善惡につけて一人も生死をはなれず。善師につかへては二生・三生等に惡道に墮ち、惡師につかへては順次生に惡道に墮つ。

外道の所詮は内道に入る即ち最要なり。或る外道云く「千年已後、仏、出世す」等云云。或る外道云く「百年已後、仏、出世す」等云云。

大涅槃經に云く「一切世間の外道の經書は、皆、是れ仏說にして外道の說に非ず」等云云。

法華經に云く「衆に三毒有りと示し、又邪見の相を現す。我が弟子、是の如く、方便して衆生を度す」等云云。

彼らがみずからの師を敬うことは、あたかも諸天が帝釈天を尊敬し、数多くの臣下が皇帝を伏拝する姿と変わらぬ。

けれども、九十五種にも及ぶ外道の教えによつて、生死の苦しみを脱れた者は一人もない。善い師について修行しても、二度や三度の生を受けるうちには惡道に趣いてしまふし、悪い師についた日には、次の世で必ず惡道に墮ちてしまふ。

④ 外道の役割

そんな外道の最も大切な役割も、儒教と同じように、仏教に入る前段の方便たることにある。それゆえ、ある外道は「千年の後に仏陀が世に出現するであろう」といい、ある外道は「百年の後、仏陀が出現する」といっている。

涅槃經の如來性品にも「世間に流布するすべての外道の經典はみな仏の教えであつて、決して外道の考えによるものではない」などと説かれ、

法華經の五百弟子受記品にも「仏弟子は人々に對して、時には貪・瞋・痴の三毒を起こして見せ、時にはよこしまな見解をもっている姿を現わす。私の弟子たちはこのような

閻浮提の四大河の一つに数えられる。ヒンドウ教ではこの河の水は罪障や穢れを淨める力を持つと信じられ、沿岸の諸聖地には沐浴場(ガート)が設けられ、また死後荼毘に付されて、その灰がガンジス河に流されることが至福と考えられている。

帝釈天 インド神話の神々の中でもっとも尊崇を集めた神・インドラのこと。本来の起源は雷神で、武勇神・英雄神とされる。仏教には梵天とともに早期から摂取されて護法の善神とされ、仏説の會座にもしばしば列している。地居天の主で天帝ともいい、須弥山頂上の欲界第二・忉利天の善見城に住して四天王を配下とする。

涅槃經 大般涅槃經。釈尊の入涅槃とそれに先だつて説かれた教説を記した經典。多数の涅槃部經典があるが、大きくは小乘涅槃經と大乘涅槃經に分けられる。大乘涅槃經として漢訳が現存するものは次の三本を数える。①「大般泥洹經」六卷十八品。東晉の法顯と仏陀跋陀羅が義熙十四年(418)に訳出。②「大般涅槃經」四十卷十三品。北凉代の曇無讖が元始十年(401)に訳出。大本涅槃・北本と呼ばれる。③「大般涅槃經」三六卷二五品。劉宋代の恵観・恵嚴・謝靈運の共訳。真理そのものとしての仏は永遠であり、生きとし生けるものにはすべて仏の本性(仏性)が具わっていると説く。

貪・瞋・痴の三毒 善根を害する三つの毒の意で、慢・疑の二つを合わせて五鈍使とされる。貪とは食欲・貪愛で、むさぼり欲し愛すること。瞋とは瞋恚で、いかること。

三には大覺世尊、此れ一切衆生の大導師・大眼目・大橋梁・大船師・大福田等なり。

外典外道の四聖三仙、其の名は聖なりといえども実には三惑未断の凡夫、其の名は賢なりといえども実に因果を弁へざる事、嬰兒のごとし。

彼れを船として生死の大海をわたるべしや。彼れを橋として六道の巷こゑがたし。

我が大師は変易猶をわたり給へり。況や分段の生死をや。元品の無明の根本、猶をかたづけ給へり。況や見思枝葉の飢惑をや。

此の仏陀は三十成道より八十御入滅

方便を示して人々を教導する」と説かれている。

⑤ 仏教

第三は、仏教を説かれた釈尊である。釈尊はすべての衆生の大導師であり、迷いを開く大眼目、煩惱の河を渡す大橋梁、生死の海を運ぶ大船師、功德の種を植える大福田である。

儒教の四聖や外道の三仙も聖人と呼ばれているが、実際は見思・塵沙・無明という三つの根本的な煩惱をいまだ断ちきつていない凡夫であり、また名前だけは賢人というもの、因果の道理を知らないことはまるで赤子（あかご）のようである。

そんな人たちを船と頼んで、この生死流転の大海が渡れようか。そんな教えを橋として、六道の迷いの河を超えることは不可能である。

大いなる我が師の釈尊は、三界の外にある精神的な生死も超えられた。ましてや、三界の中の肉身の生死はいうまでもない。迷いの根本である無明惑さえ断ち切ってしまったのだから、どうして見惑や思惑という枝葉の煩惱などがあるうか。

この釈尊は三十歳で悟りを開き、八十歳で入滅（にゅうめつ）なされる

痴とは愚痴・無知で、おろかなこと。あらゆる煩惱の根本に位置づけられる。

煩惱 悪い心のはたらき。身心を悩ます一切の精神作用の総称。貪・瞋・痴の三毒はその最も根本的なもの。仏教ではこの煩惱を断尽することににより開悟して仏果を得ると説かれる。天台教学では一切の煩惱を見思惑（見惑・思惑・塵沙惑・無明惑の三惑）に分類する。

生死 梵語・サンサーラの訳で、輪廻とも訳す。衆生が業因によって三界六道の迷いの世界に、生まれかわり死にかわりして輪廻を繰り返すことで、輪廻の脱した解脱や涅槃に対する語。果てしない生死を底知れない海に喩えて生死海（しじうかい）という。苦悩の世界であるところから生死の苦海（くかい）という。

見思・塵沙・無明 天台宗で一切の煩惱を三種に分類したもので、三惑という。見思惑は見惑と思惑（修惑）の並称で、三界六道の苦果を招く惑をいう。見惑は仏教の真理である四諦の理に迷うことや邪教などに迷って起こす知的な煩惱で、思惑は現象的なものにとらわれる情的な迷いのこと。塵沙惑は大乗の菩薩が他人を教導する時の障害で、塵沙のごとき無数の現実の事象に対してそれぞれ確かな判断をして正確な対処ができないことをいう。無明惑は是非無の理に迷って中道法性の悟りを妨げる惑で、一切煩惱の根本となるもの。別教では十二品、円教では四十二品に分けて、最後の一品を元品の無明と称して、断ずれば成仏すると規定される。

因果の道理 原因があれば結果が

にいたるまで、五十年が間、一代の聖教を説き給へり。一字一句、皆真言なり。一文一偈、妄語にあらず。

外典外道の中の聖賢の言すら、いうことあやまりなし。事と心と相符へり。

況や仏陀は無量曠劫よりの不妄語の人。されば一代五十余年の説教は、外典外道に対すれば大乘なり。大人の実語なるべし。初成道の始めより泥洹の夕べにいたるまで、説くところの所説皆真実なり。

但し仏教に入りて五十余年の経々八万法蔵を勘へたるに、小乗あり大乘あり、権経あり実経あり、顕教密教、軟語僞語、実語妄語、正見邪見等の種々の差別あり。

但し法華經計り教主釈尊の正言

まで、五十年間に数多くの教えをお説きになった。その教えの一字一句のすべてが真実の言葉である。一文一偈、全く虚妄の言葉はない。

儒教や外道の聖人・賢人の言葉にすら誤りはなく、その中の事実と意味は一致している。

まして、釈尊は限りなく遠い昔から決して虚妄の言葉を語らない方であるから、その一代五十余年の間に説かれた教えは、儒教や外道に比べてあまりにも偉大である。まったく大いなる聖者の真実の言葉といわざるをえない。はじめて開悟されてから入滅に至るまで、説き示された教えはすべて真実である。

⑥法華經の真実

ただし、一步仏教の中に分け入って、五十余年に説かれた数多くの經典について考えてみると、小乗もあれば大乘もあり、方便の經典もあれば真実の經典もある。また、顕露に説かれた教えと秘密に説かれた教え、穏やかな言葉と荒々しい言葉、真実の言葉と虚妄の言葉、正しい見解と間違つた見解などの、さまざまな違いがある。

そんな中で、ただ法華經だけが教主釈尊の正しい言葉で

あり、結果があれば必ず原因があるという法則。また、良い因に対しては良い果、悪い因には悪い果がもたらされるという因果応報の道理をいう。

六道 一切の衆生が生前の業因によって生死を繰り返す六種の迷いの世界。十界の中の地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天の六界のことで、四聖に対する語。

小乗 自己の得脱を目的とする声聞・縁覺の教えで、阿含經や四分律・五分律などの律、婆沙論・俱舍論などの論による、消極的かつ形式的で狭小な教え。歴史的には、仏滅後の部派仏教の展開とともに、別に菩薩の道を説く教徒が起り、自ら大乘と称し、部派を小乗とけなしたことに始まる。

大乘 広く衆生の救済を目的とする菩薩の教えで、利他行を実践して仏になることに主眼を置いた。歴史的には、個人の解脱を重んじる小乗仏教に対する反省から、紀元一、二世紀頃のインドに興起了た仏教革新運動の中で説かれた。

多宝如来 過去世の東方宝淨世界の仏。「法華經」見宝塔品第十一の冒頭において七宝で莊嚴された宝塔に座して大地より涌出し、「法華經」における釈尊の所説がすべて真実たることを証明した仏。

分身の諸仏 久遠実成の釈尊が十方世界の衆生を教導するために、それらの世界に身を分ちて現わした諸仏のこと。「法華經」如来神力品第二十一では同經の真実を広長舌を出して証明している。

俱舍宗 天親の「俱舍論」を中心として説一切有部の教義を研究する

なり。三世十方の諸仏の真言なり。

大覚世尊は四十余年の年限を指して、其の内の恒河の諸経を未顕真実、八年の法華は要説真実と定め給ひしかば、多宝仏、大地より出現して皆是れ真実と証明す。分身の諸仏来集して長舌を梵天に付く。

此の言、赫々たり明々たり。晴天の日よりもあきらかに、夜中の満月のごとし。仰ぎて信ぜよ。伏して懷ふべし。

但し此の經に二箇の大事あり。俱舍宗・成実宗・律宗・法相宗・三論宗等は名をもらさず。華嚴宗と真言宗との二宗は儼かに盗みて自宗の骨目とせ

あり、三世および十方の世界にましますすべての仏の真実の言葉である。

釈尊が、法華經以前の四十余年に説いた数多くの經典を指して「私はまだ真実をあらわしていない」と語り、最後八年間の法華經にこそ「必ず真実を説くであろう」と定められたところ、多宝如来が大地から現われて「この法華經はすべて真実である」と証明した。また、十方の世界から来集した分身の諸仏も、長く出した舌を梵天にまで届かせて、その真実の証明を助けた。

この釈迦・多宝・分身の三仏の言葉は、この上なく明るく光り輝いている。晴天にかかる太陽よりも明らかであり、まるで夜空に輝く満月のようだ。仰いで信じよ。伏して拝すべきである。

第二章 一念三千と仏法の盗用

① 一念三千の法門

ところで、この法華經には二乗作仏と久遠実成という二つの大切な法門がある。俱舍宗・成実宗・律宗・法相宗・三論宗などは、その名前すらも知らない。一方、華嚴宗と真言宗の二宗には元来その法門はないが、ひそかに盗み取って、

宗派。日本では唯識法相の学問に付随して行なわれ、法相宗の寓宗として兼学された。

成実宗 詞梨跋摩（かりばつま）の著した「成実論」に基づき、万物はすべて空であると悟ることによつて、煩惱を断ずるという教義を研究する学派。日本へは三論宗に付随して将来され、東大寺・西大寺・大安寺・法隆寺等で兼学された。

律宗 戒律を守り修行する宗派。中国の道宣が四分律を所依として広めた四分律宗の系統に立ち、日本へは奈良時代に鑑真が伝えた。唐招提寺を総本山とする。

法相宗 中国唐代の慈恩大師窺基が大成した学派で、「解深密經」等の六經と「成唯識論」「瑜伽論」等の十一論に基づいて、一切はただ識の所変であるという唯識説を主論とする。また、有・空・中の三時教判を主張し、五姓各別および三乘真実・一乘方便を説く。日本では興福寺・薬師寺・法隆寺等で盛んに研究された。

三論宗 竜樹の「中論」「十二門論」と提婆の「百論」の三論に拠る大乘の宗派。鳩摩羅什が三論を中国に翻訳紹介し、以来弟子に受け継がれて隋の吉藏によつて大成された。日本へは吉藏の弟子である高麗の惠灌が伝え、南都六宗の一つとして栄えたが、程なくして東大寺に伝わった大安寺流の一派だけを残し、その他は法相宗の寓宗と成り果てた。

華嚴宗 「華嚴經」を依經とする大乘の宗派で、隋・唐初の杜順が基礎を築き、智儼が継承し、次いで法蔵が「探玄記」「華嚴五經章」等を著して宗の大綱を整備し、以後澄観・宗密へと伝えられた。五教十

り。

一念三千の法門は、但法華經の本門
寿量品の文の底にしづめたり。竜樹・
天親、知りてしかもいまだひろいいだ
さず、但我が天台智者のみこれをいだ
けり。

一念三千は十界互具よりことはしま
れり。法相と三論とは八界を立てて十
界をしらず。況や互具をしるべしや。

俱舎・成実・律宗等は阿含經によ
れり。六界を明らかに四界をしらず。
十方唯一仏と云ひて、一方有仏だに
もあかさず。一切有情悉有仏性とこそ
とかざらめ。一人の仏性猶をゆるさず。

いつしかそれぞれの宗旨の重要な教義としてしまった。

天台大師が摩訶止観に示した「一念三千」の法門は、ただ法
華經本門の中心である如來寿量品の經文の奥底に沈められ
ている。竜樹や天親の菩薩たちは知ってはいたが、その教
えを取り出さなかった。ただ、わが天台大師だけが一念三
千の教えを経文の底から拾い出して、心の中におさめた。

一念三千の法門は、十界のそれぞれが他の九界を互いに
具え合うという「十界互具」の考えから展開する。法相宗と三
論宗は八界を立てるが、真実の仏・菩薩の二界を知らないの
で十界を立てることができない。ましてや、十界の互具な
どどうして知ることがあろうか。

俱舎宗・成実宗・律宗などは小乗の阿含經によつて教えを
立てる。だから、地獄界から天界までの迷いの六界は明か
すが、声聞界から仏界に至る悟りの四界は知らない。また、
十方世界の中に釈尊の一仏だけがましますと説いて、十方
それぞれの「一世界ごと」に仏がおわすことさえ認めない。ま
して、一切衆生にはみな「仏性がある」という教えなど説くわ
けがない。このように、小乗の教えでは一人の者が仏性を
具えることすら許さないのである。

宗の教判を立て、十玄門・六相円融を主説する。また、法界縁起・事事無碍の法門を説き、一成一切成・一証一切証の修行による信満成仏を主張する。

眞言宗 弘法大師空海が中国の密教思想を日本に伝えて大成した宗派。「大日經」「金剛頂經」「蘇悉地經」などに拠り胎藏・金剛の二部を立て、真言呪法の加持力で即身成仏を期することを主説する。空海は教判として顕密二教判・五藏教判・十住心教判を立て、釈迦は応身にして劣り、大日は法身にして勝れ、それゆえ応身の随他意語の顯教は劣り、法身の随自意語の密教は勝れていると主張する。

一念三千 天台智顗が「摩訶止観」巻五に説いたもので、凡夫が現實に起こす一念の心に、三千という法数で示される一切諸法が具足するという義。「華嚴經」所説の十界とその互具、「法華經」方便品に見える十如是、それに「大智度論」所説の三世間を相乗した三千諸法が、介爾陰妄の凡夫一念に具備するという法門で、宗祖はこの一念三千義に基づいて唱題による衆生の成仏義を構築した。

竜樹 西暦二〜三世紀頃に空の思想を究明して、大乘仏教の基盤を確立した論師で、中観派の祖。日本では南都六宗に天台・眞言の両宗を合わせた八宗の祖と仰がれる。「中観論」「大智度論」「十住毘婆沙論」「十二門論」等、多くの著作が伝えられている。

天親 西暦四〜五世紀頃のインド瑜伽行唯識派の論師で、世親ともいう。古来より「千部の論師」と称され、華嚴・法華・涅槃・無量寿等

而るを律宗・成実宗等の十方有仏・有仏性など申すは、仏滅後の人師等の大乗の義を自宗に盗み入れたるなるべし。

例せば、外典・外道等は仏前の外道は執見^{しゅうけん}あさし。仏後の外道は仏教をききみて自宗の非をしり、巧みの心出現して仏教を盗み取り、自宗に入れて邪見もつともふかし。附仏教・学仏法成等これなり。

外典も又々かくのごとし。漢土に仏法いまだわたらざりし時の儒家・道家^{どうけ}は、いういうとして嬰兒のごとくはかなかりしが、

後漢^{ごかん}已後に釈^{しゃく}教^{きやう}わたりて対論の

② 仏法の盗用と天台大師

ところが、今の律宗や成実宗などが、十方^{じつぽう}世界にそれぞれの仏がましますとか、一切の衆生に仏性があるなどと主張するが、それは仏滅後の学僧たちが大乗の教義を盗んで、それぞれの宗旨にとり入れた結果に他ならない。

たとえば、中国の外典やインドの外道などでも、釈尊が出現する以前の外道の間違いなどは取るに足りないものだった。ところが、釈尊が出世されてから後の外道は、仏教を見聞してみずからの教義の欠点を知り、巧妙に取りつこう心を起こし、仏教の教えを盗み入れて教義を立てたので、その間違いは救いがたいものとなった。仏法に付随してあやまりの度合いを高めた「附^ふ仏教成の外道」や、仏法を学びながら邪見に陥ってしまった「学^{がく}仏法成の外道」といわれる人たちである。

これは中国の外典についても同様である。漢土に仏法がまだ渡来しなかった頃の儒教や道教^{どうきやう}は素朴なもので、赤子のように弱々しいものであったが、

後漢^{めいてい}の明帝^{えい}の永平十年（西暦六七年）に仏教が渡来して、

の諸大乗経を注釈して、唯識・仏性等の諸論を造り、大乗教を宣揚した。

十界互具 地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天・声聞・縁覚・菩薩・仏の十界のそれぞれに他の十界が具わっているという義。これは「法華經」の開会思想に基づいて成立した義であるが、これにより地獄の衆生も仏となり得ることや、仏も性として煩惱をそなえることが明かされた。地獄界から仏界までのすべてが成仏できる平等思想である。

仏性 仏の本性・仏としての性質などの意で、如来蔵ともいう。「涅槃經」ではすべての有情に具わるという一切衆生悉有仏性の義が主張されるが、唯識仏教の法相宗等は五性各別を主張して仏性の具備を制限している。天台教学では正因・縁因・了因の三因仏性が説かれ、無情の草木にも仏性があるという無情有性も立てられる。

十方世界 東・西・南・北・東南・西南・東北・西北・上下の十方に存在する無数の三千大千世界のこと。

道教 中国の老子・莊子の思想を中心として神仙思想を加味し、さらに陰陽五行や卜筮（ぼくぜい）などの民間信仰や仏教・儒教などの影響を受けて集大成した宗教。老子を玄元皇帝と尊崇して始祖とし、不老長寿の真人（仙人）になることを願って呪咀祈禱などをおこなうなど、現世利己的な面が強い。

後漢末の張陵の五斗米道に始まり、張陵から孫の張魯に至って組織が整備されて天師道とも呼ばれ、後に正一教と称された。河西省竜虎山の正一教と金朝に革新運動として起こった王重陽の全真教

後、釈教やうやく流布する程に、釈教の僧侶破戒のゆへに、或るいは還俗して家にかへり、或るいは俗に心をあはせ、儒道の内に釈教を盗み入れたり。

止観の第五に云く「今世、多く悪魔の比丘有りて、戒を退き家に還り、駆策を懼畏して更に道士に越済す。復た名利を邀めて莊老を誇談し、仏法の義を以て偷みて邪典に安き、高を押して下に就け尊を摧きて卑に入れ、概して平等ならしむ」云云。

弘に云く「比丘の身と作りて仏法を破滅す。若しは戒を退き家に還るは衛の元嵩等が如し。即ち在家の身を以て仏法を破壊す。○此の人、正教を偷窃して邪典に助添す。○高を押して等とは、○道士の心を以て二教の概と爲し、邪正をして等しからしむ。義、是の理無し。

道教との論争などに勝利し、仏教が徐々に世間に弘まるにつれて、あるいは仏教の僧侶が戒律を破つて俗人に戻ったり、または俗人と心を合わせた者が、儒教の中に仏教を巧みに盗み入れたりした。

天台大師は摩訶止観第五に「今の世には多くの悪魔の僧がいて、彼らは戒律を守れずに俗人に還り、処罰されるのを恐れて道教家となる。また、名聞名利を求めて莊子や老子の道を誇らしげに語り、仏教の教えを巧みに儒教や道教などの典籍に取り入れ、高貴な教えと下卑た教えをごつちやにして、かきならして平等にしてしまふ」と述べている。

妙楽大師は止観弘決に、これを次のように解釈している。

「出家の身でありながら、仏法を破滅する者がいる。また『戒律を守れずに俗人に還り』とは、周の武帝に廃仏を上奏した衛の元嵩らという。彼は還俗した身で仏法を破壊した。これらの者は仏教の正しい教えを盗み取り、儒教や道教の邪典に付け加えた。『高を押して下に就け』とは、道教家の立場から仏教と道教をかきならし、邪と正の教えを一緒くたにすることをいう。しかし、そのような道理は本来

が二大流派をなすとされる。

摩訶止観 十巻。中国・隋代の天台智顗説、章安灌頂記。開皇十四年(584)智顗が五十七歳の時に荊州玉泉寺で講説し、聴講した灌頂が再三再四修治を繰り返して完成した。「法華玄義」および「法華文句」と共に天台三大部と総称される。「法華經」の根本真理を体得するための実践方法である一心三觀・一念三千の觀法を説示した書である。大意・釈名・起教・旨歸の十章の十広から成るが、正觀章に立つる十境の第八・増上慢境以下および果報・起教・旨歸の三章は説かれていない。

止観弘決 十巻。中国天台宗第六祖の妙楽大師湛然(たんねん)の撰。正式には「摩訶止観輔行伝弘決」といい、「摩訶止観輔行」「摩訶止観弘決」「止観輔行」「弘決」とも称される。天台大師智顗が撰した「摩訶止観」十巻を注釈したもの、同書の注釈書では最も重用される書である。「摩訶止観」との大きな相違は華嚴教學の影響が見られることで、智顗滅後に興起した華嚴教學の性起説を湛然が摂取し、天台教學の宣揚に資せんとした結果と考察されている。

衛の元嵩 生没年未詳。中国・北周武帝時代の道士。益州成都の人で、若くして出家したが、のち道教に転じて還俗した。天和二年(562)に僧寺は国益を損ずるものと主張して寺院の廃止と僧尼の還俗を上奏し、これが武帝の受け入れるところとなり、建徳三年(574)北周の廃仏(仏教弾圧)が行なわれた。

曾て仏法に入りて正を偷みて邪を助け、八万十二の高きを押して五千二篇の下きに就け、用ゐて彼の典の邪鄙の教を釈するを摧尊入卑と名づく」等云云。此の釈を見るべし。次上の心なり。

仏教又かくのごとし。後漢の永平に漢土に仏法わたりて、邪典やぶれて内典立つ。

内典に南三北七の異執をこりて蘭菊なりしかども、陳隋の智者大師にうちやぶられて、仏法二び群類をすくう。

其の後、法相宗・真言宗、天台よりわたり、華嚴宗又出来せり。此等

あり得ない。

むかし仏法の門にいた者が正しい教えを盗み取つて邪義を助け、八万法蔵・十二部経からなる仏教の高い教えを、わずか五千余言・上下二篇の道教の低い教えに押し込み、よこしまでいやしい道教を解釈するさまを、『尊を摧きて卑に入れ』とはいうのである」と。この解釈を見よ。先ほどの仏法盗用の意である。

これは仏教内部の場合も同じである。後漢の永平十年に中国に仏教が渡来し、対論の結果、邪典たる道教等が破れて仏教が流布した。

そして、揚子江をはさんで南の三師と北の七師が現われ、十師それぞれが仏教の解釈を異にして対立したが、陳隋の代に出現した天台大師が、それらの異なる見解を平定して法華教学を打ち立てたので、仏教は釈尊已来、再び一切衆生を救済するに至った。

第三章 諸宗の邪見と天台宗の衰退

①諸宗の邪見と伝教大師

その後、法相宗と真言宗がインドから伝わり、華嚴宗も中国で再興された。これらの諸宗の中で、五性各別を標榜

八万法蔵 釈尊がその一代において説いた教え、または經典の總称で、八万宝蔵とも表記する。八万は八万四千と同意で、多数を表わす語。法蔵は教えのこと。

十二部経 經典を叙述形式や内容から十二種に分類したもの。①修多羅(しゆたら)。契経と訳す。②祇夜(ぎや)。応頌・重頌と訳す。③伽陀(かだ)。諷頌・孤起頌と訳す。④尼陀那(にだな)。因縁と訳す。⑤伊帝目多伽(いたいもくたか)。本事・如是語と訳す。⑥闍多伽(じやたか)。本生と訳す。⑦阿浮達磨(あふだつま)。未曾有と訳す。⑧阿波陀那(あはだな)。譬喩と訳す。⑨優波提舍(うばだいしや)。論議と訳す。⑩優陀那(うだな)。自説・無問自説と訳す。⑪毘仏略(びぶつりやく)。方広・方等と訳す。⑫和伽羅(わがら)。授記と訳す。

南の三師と北の七師 中国の南北朝時代(五・六世紀)に盛行した仏教の分類や体系付け(教相判釈)の諸説を、天台智顗が「法華玄義」巻十上で整理した南地(江南)三師と北地(河北)七師のこと。南三北七と略称す。智顗はこれらの教判を批判して五時八教判を立てた。

五性各別 衆生が先天的に備えている素質を五種(定性声聞・定性緣覺・定性菩薩・三乘不定性・無性有情)に分類し、これらは阿頼耶識(あらやしき)の本有種子によって決定し、永久に区別されているとする法相宗所立の教義。先天的に成仏できる者ときかない者を截然(さいぜん)と分けたところに特徴があり、一切衆生の皆成仏道を主張する天台法華宗との論争の争点となった。

の宗々の中に法相宗は一向天台宗に敵を成す宗、法門水火なり。

しかれども玄奘三蔵・慈恩大師、委細に天台の御釈を見ける程に、自宗の邪見ひるがへるかのゆへに、自宗をばすてねども、其の心天台に帰伏すと見えたり。

華嚴宗と真言宗とは本は権経・権宗なり。善無畏三蔵・金剛智三蔵、天台の一念三千の義を盗みとて自宗の肝心とし、其の上に印と真言とを加へて超過の心ををこす。

其の子細をしらぬ学者等は、天竺より大日経に一念三千の法門ありけりとうちをもう。

華嚴宗は澄観が時、華嚴経の心如工画師の文に天台の一念三千の法門を偷み入れた。人、これをしらず。

する法相宗と、法華一仏乗をかかげる天台宗の対立は激しく、両宗の教義は全く交わるどころがなかった。

ところが、玄奘三蔵とその弟子の慈恩大師が天台大師の法華経の解釈を詳しく見て、自分たちの見解の間違いを認めたのであろうか、法相宗を捨てこそはしないが、その心は天台宗に帰伏したように見える。

華嚴宗と真言宗とは、もともとは真実の教えを説くための方便として仮りに説かれた権経に依つて立てられた権宗である。ところが、真言宗の祖師たる善無畏三蔵や金剛智三蔵が、天台宗の一念三千の教義を盗み入れて真言宗の肝要とし、その上に印と真言という事相を加えて、かえつて真言宗は天台宗より勝れていると主張した。

そうした事情を知らない学者たちは、インド以来もともと大日経の中に一念三千の法門があったものと思ひ込んでいる。

一方、華嚴宗は清涼大師澄観の時に、華嚴経の「心はすぐれた画家のように、森羅万象のすべてを造り出す」という経文の解釈に、天台宗の一念三千の法門を盗み入れた。

玄奘三蔵 600～690。中国唐初の訳経僧で、法相宗の開祖。姓は陳。俗名は已。仏教研究のために貞観三年(631)單身、長安を出発。西域諸国を経てインドに入り、那爛陀寺の戒賢などに学び、貞観十九年(645)に帰国。太宗の命により七六部一三四七卷の経論を訳出した。訳経史上、それ以前を旧訳、以後を新訳と称する。旅行記に「大唐西域記」がある。

慈恩大師 638～713。中国唐代の法相宗の初祖。長安の人で、もとは于闐(うてん)国の出身と伝えられる。字は洪道で、諱は窺基(きき)、また基と称した。大慈恩寺に住したので慈恩大師と呼ばれた。師の玄奘とともに唯識の学を確立し、特に「成唯識論」の漢訳に関わり、これを注釈して「成唯識論述記」など多くの著作をなし、法相宗を大成した。

善無畏三蔵 627～723。中国唐代の真言宗祖師の一人で、御書では無畏・畏と略称される。東インド烏杖那(うじょうな)国の太子で、出家して諸国に遊歴した後、摩揭提国那爛陀(ならんた)寺で達摩掬多(だつまくた)に就いて瑜伽三密を学び、密教を極めた。師の指示により開元四年(716)に数多くの経典を携えて唐の長安を訪れた。玄宗皇帝に国師として迎えられた。中国に密教を初伝し、開元十三年(725)の「大日経」七卷をはじめとする多くの密教経典を訳出した。

金剛智三蔵 671～741。真言宗付法の第五祖で、中国での初祖とされる。十才で出家して諸地に遊学し、三十一歳にして竜智に師事して「金剛頂経」など真言諸論を修

日本我が朝には華嚴等の六宗、天台・真言已前にわたりけり。華嚴・三論・法相、諍論水火なりけり。

伝教大師此の国にいでて、六宗の邪見をやぶるのみならず、真言宗が天台の法華經の理を盗み取りて、自宗の極とする事、あらはれをはんぬ。

伝教大師、宗々の人師の異執をすて、専ら經文を前として責めさせ給ひしかば、六宗の高徳八人・十二人・十四人・三百余人並びに弘法大師等せめをとされて、日本国一人もなく天台宗に帰伏し、南都・東寺・日本一州の山寺、皆叡山の末寺となりぬ。

又漢土の諸宗の元祖の、天台に帰伏して謗法の失をまぬかれたる事もあらはれぬ。

ただ、これについても事の子細を知る者は誰もいない。

わが日本国には、華嚴・法相・三論・俱舍・成実・律の南都六宗が天台宗や真言宗よりも早く伝えられた。六宗のうち、大乘の華嚴・三論・法相の三宗の主張は水火のようにあい反目し、一乗か三乗か、空か有かなどの論争を繰り広げた。そんな中、伝教大師が現われて、南都六宗のまちがった見解を破折したばかりか、真言宗が天台宗の法華經の極理を盗み取つて、自宗の肝要としたさまを天下に示した。

伝教大師は各宗の学僧のかたよった見解にとらわれず、ひとえに仏説の經文を押したてて批判を加えられたので、南都六宗の高僧以下の三百余人や弘法大師らもその正義に責め落とされ、日本国の人びとすべてが天台宗に帰依して、南都七大寺や真言宗の東寺をはじめとする日本全国の諸寺は、みな比叡山延暦寺の末寺となつてしまった。

また、伝教大師が著した依憑天台集によつて、中国の諸宗の元祖たちが内心では天台大師に帰伏し、正法を誹謗する罪過を免れたことも明らかになった。

学して密教を受得した。開元八年(720)に中国洛陽に入り、その後は洛陽と長安を往復・布教しながら「金剛頂瑜伽中略出念誦經」四卷などの密教經典二五部三二卷を訳出した。

清涼大師澄観 738 ~ 829。中国華嚴宗の第四祖。姓は夏侯氏で、越州会稽(浙江省紹興県)の人。字は大休。十一歳で出家し、曇一に南山律を、玄璧・恵量に三論を、法藏に華嚴をそれぞれ就学し、さらに湛然から天台を、道欽・惟忠等からは南宗禅を受学した。大暦十一年(766)に五台山に登り、大華嚴寺(清涼寺)に住して学徒のために「華嚴經」を講じて、「華嚴經疏」や「随疏演義抄」を述作した。

伝教大師 767 ~ 822。日本天台宗の開祖・最澄のこと。俗姓は三津首みつのおびと、幼名は広野(ひろの)。近江国(滋賀県)滋賀郡の人。十二歳で行表の許に出家し、宝龜二年(769)十二月に得度して、名を最澄と改めて主に華嚴を習学した。延暦四年(88)東大寺戒壇院で小乗戒を受けたが、静寂の地を求めて比叡山に入り、鑑真將來の天台三大部等の研究に励んだ。同七年(788)七月には一乗止観院(根本中堂)を建て、その学徳により桓武天皇の外護を得て、同二十三年に入唐した。九ヶ月在唐して道邃・行滿等に天台および戒・禅を学び、順曉から密教を受けて帰国し、翌年の同二十五年一月に止観業・遮那業設置の認可を得、勅許により日本天台宗を開いた。晩年は自宗内部の整備に努め、空海に師事しての密教の伝受、法相宗の徳一との仏性論争、さらには南都

又其の後やうやく世をとろへ、人の智あさくなるほどに、天台の深義は習ひうしないぬ。

他宗の執心は強盛になるほどに、やうやく六宗七宗に天台宗をとされて、よわりゆくかのゆへに、結句は六宗七宗等にもをよばず。

いうにかいなき禪宗・浄土宗にとされて、始めは檀那やうやくかの邪宗にうつる。

結句は天台宗の碩徳と仰がる人々、みなをちゆきて彼の邪宗をたすく。さるほどに六宗八宗の田畠所領みなたをされ、正法失せはてぬ。

天照太神・正八幡・山王等諸の守護の諸大善神も法味をなめざるか、国中を去り給ふかの故に、悪鬼便りを得て、国すでに破れなんとす。

②天台宗の衰退

ところが、その後、だんだんと時代が衰退して人の智慧が浅くなるにつれ、天台宗の深遠な教義は見失われていった。

また、他宗のそれぞれの宗義に対する執着心が強くなり、その分、天台宗は徐々に南都六宗や真言宗に落とされて弱体化して、結局はそれら諸宗の勢いにも及ばなくなった。

さらに、取るに足りないはずの禪宗や浄土宗にも追い越され、最初是在家の信徒がだんだんとかの邪悪な宗旨へと移っていき、

最後は天台宗の碩学・高僧と仰がれる人々もみな禪宗や浄土宗に落ち移って、邪悪な宗旨を助ける形になった。そのうちに、南都六宗と天台・真言の二宗の寺領はみな禪宗と浄土宗に奪われて、天台宗の正法は滅びてしまったのである。

そのため、日本国を守護するはずの天照太神・八幡大菩薩や比叡山を守護するはずの山王権現などの諸天善神も、法華経の妙味を嘗めずに威光が失われたからか、それとも謗法の国土を見捨てて去ってしまったからか、悪鬼がそ

僧綱との大乘戒別立論争などに尽力した。弘仁十三年(822)六月四日に入寂。その初七日に大乘戒が勅許されて、天長四年(831)に戒壇院が建立された。「顕戒論」等の多著がある。

弘法大師 774 - 835。日本真言宗の開祖・空海のこと。俗姓は佐伯氏。幼名は真魚(まお)。讃岐の人。延暦十二年(794)に得度し、同十四年四月に東大寺戒壇院において具足戒を受けて空海と名を改めた。延暦二十三年(804)に入唐し、長安青竜寺の恵果に真言密教を学ぶ。大同元年(806)に帰国し、弘仁七年(816)に高野山に金剛峯寺を建立。同一四年には東寺を与えられ、これを国家鎮護の祈禱道場とした。天長五年(828)に綜芸(しゅげい)種智院を設立して子弟の教育に努めた。承和二年三月二十一日に高野山に没した。書に「十住心論」等の多くの著作がある。

禪宗 坐禅によって悟りに至ろうとする宗派。所伝では、釈迦が霊山会上で無言で華を拈じて示した時、摩訶迦葉のみがその真意を悟って微笑したので仏が迦葉に正法を伝え、これを以心伝心と称して禪宗の起源とする。迦葉はこの法を阿難に伝え、代々相伝して第二十八祖の達磨に至り(西天の二十八祖)、中国へ伝えた菩提達磨を始祖とす。教外別伝・不立文字・直指人心・見性成佛を基本理念として、經典の文字や理論にとらわれずに無念無想の体験を通して直接に人生の真相に触れようとする。一般の七派のうち、日本へは臨済宗は栄西が仁安三年(1163)に伝え

此に予、愚見をもて前四十余年と後八年との相違をかんがへみるに、其の相違多しといえども、先づ世間の学者もゆるし、我が身にもさもやとうちをばうる事は、二乗作仏・久遠実成なるべし。

法華經の現文を拝見するに、舍利弗は華光如来、迦葉は光明如来、須菩提は名相如来、迦旃延は閻浮那提金光如来、目連は多摩羅跋耆檀香仏、富樓那法明如来、阿難は山海慧自在通王仏、

羅睺羅は蹈七宝華如来、五百・七百は普明如来、学無学二千人は宝相如来、摩訶波闍波提比丘尼・耶輸多羅比丘尼

の代わりに勢力を増して、この国はまさに滅びようとしている。

第四章 二乗作仏

そこで、私の見方で、釈尊一代五十年の説教のうち、法華經以前の四十数年間に説かれた諸經と最後の八年間に説かれた法華經との違いを考えてみると、相違は数多くあるものの、まず一般の学者も認め、私自身も確かにそうだと納得できるのは、法華經迹門の「二乗作仏」と本門の「久遠実成」の両説の有無だろう。

①法華經と二乗作仏

まず、二乗作仏について具体的に法華經の文を拝見すると、最初に舍利弗が釈尊から将来の世に華光如来として成仏する保証を与えられた。引き続き、迦葉が光明如来、須菩提が名相如来、迦旃延が閻浮那提金光如来、目連が多摩羅跋耆檀香如来、富樓那が法明如来、阿難が山海慧自在通王如来、

羅睺羅が蹈七宝華如来、五百・七百の比丘・阿羅漢が普明如来、学・無学二千人の声聞が宝相如来、摩訶波闍波提比丘尼と学・無学の比丘尼六千人らが一切衆生喜見如来、耶輸陀

て、曹洞宗は道元が貞応二年(1222)に伝え、黄檗宗は承応三年(1654)に明の隠元が伝えた。仏心宗・達磨宗ともいう。

淨土宗 阿彌陀仏の本願を信じ、その名号を称える一行により西方極樂淨土へ往生できる(専修念仏)と説く宗派。日本の法然・房山(1173-1212)によって開宗され、中国の曇鸞・道綽・善導・懷感・少康を相承の五師とする。源空は建久九年(1208)「選択集」を撰述し、ひとえに善導の義に基づいて専修念仏の義を主張して、それまで諸宗の寓宗的存在であった淨土教信仰を淨土宗として独立させた。また、仏教を聖道・淨土の二門に分け、娑婆世界で自力により悟りを得ようとする教えを聖道門、阿彌陀の本願に乗じて淨土往生を願う教えを淨土門とし、時機相應の教えは淨土門にあると宣言した。「無量壽經」「觀無量壽經」「阿彌陀經」と天親の「往生論(淨土論)」の三經一論を正依として立宗した。

二乗作仏 声聞・縁覺の二乗が成仏すること。「法華經」前半十四品の迹門にて初めて明かされた仏説。二乗が一仏乘に開会されて(人開會)その成仏の筋道および認可が説かれたので、ここに十界五具・二諦皆成の義が成立した。

久遠実成 釈尊が五百塵点劫の譬喩で示される久遠に成道を遂げた三身具足の仏であるという義で、通常のインドの仏陀伽耶の菩提樹下における釈尊の成道を表わす伽耶始成・始成正覺に対する語。「法華經」本門の如来壽量品第十六の「我れ実には成仏してより已來、無量無辺百千万億那由他劫なり」と

等は一切衆生喜見如来・具足千万光相如来等なり。

此等の人々は法華經を拝見したてまつるには尊きやうなれども、爾前の經々を披見の時はけを(興)さむる事どもをほし。

其の故は、仏世尊は実語の人なり。故に聖人・大人と号す。外典・外道の中の賢人・聖人・天仙など申すは、実語につけたる名なるべし。此等の人々に勝れて第一なる故に、世尊をば大人とは申すぞかし。

此の大人、「唯以一大事因縁故出現於世」となのらせ給ひて「未だ真実を顕はさず」、「世尊は法久しくして後、要(かなら)ず当に真実を説きたまふべし」、「正直に方便を捨て」等云云。

多宝仏証 明を加へ、分身舌を出だ

羅比丘尼が具足千万光相如来というように、それぞれの名のもとに将来世において成仏する保証を仏より授けられた。

これらの人々は、法華經を拝見申し上げる限りでは尊いように見えるが、法華經以前の諸經典をひらき見ると、彼らは成仏できない者と説かれており、驚きとまどいを禁じえない。

なぜかといえ、仏はまことの言葉を語る聖者である。

それゆえ、聖人とか大人とよばれる。中国の儒教やインドの外道でも、賢人・聖人・二天・三仙などは、まことの言葉を語るといふ意味で付けられた名前であろう。仏はこれらの人々とは比べようがないほど、最も真実の言葉を語るからこそ、大人と称し申し上げるのである。

その大人たる釈尊が、法華經の方便品で「仏はただ法華經を説くために、この世に出現する」と明かされ、無量義經の説法品には「私はこれまでの四十余年間には真実を説きあらわしていない」、方便品第二には「仏は長い間の権經の後、必ず真実を説かれるであろう」「正直に方便を捨てて、ただ無上道を説き明かす」などとそれぞれ述べられた。

それに対して、多宝如来は「みなこれ真実である」と証

の文で示される法門で、久成とも略称される。

舍利弗 釈尊十大弟子の一人で、智慧第一と称される。身子ともいふ。六師外道の一人・刪闍耶に師事したが、後に仏所説の因縁法を聞き、目連と共に二百五十人の弟子を連れて釈尊に帰依した。

迦葉 釈尊十大弟子の一人で、頭陀第一と称せられた。仏滅後は教団を統率し、第一回の經典結集を行なった。摩訶迦葉ともいふ。

須菩提 釈尊十大弟子の一人。瞋恚を懺悔して証得したところから無諍第一といわれ、空理に通じたところから解空第一と称された。善吉・善現ともいふ。

迦旃延 釈尊十大弟子の一人で、論議第一とたうたわれる。

目連 釈尊の十大弟子の一人で、神通第一と称された。孟蘭盆會は、彼が餓鬼道に落ちて苦しむ母を救う孝行伝承に基づいた法會である。目健連ともいふ。

富樓那 釈尊十大弟子の一人。説法第一と称されて弁才に長じ、後にインド西部に布教して同地で帰寂した。

阿難 釈尊の十大弟子の一人。教説の記憶に勝れていたため、多聞第一と称される。釈尊の従弟で提婆達多の弟にあたる。

羅睺羅 釈尊の太子で、母は耶輸陀羅女。仏の十大弟子の一人で、密行第一と称された。

摩訶波闍波提 淨飯王の夫人で、釈尊の養母。摩耶夫人の妹。

耶輸多羅 釈尊が悉達太子であった時の正妃で、羅睺羅の生母。

無量義經 一卷。中国・蕭齊代の曇摩伽陀耶舎(どんまかたやし)や

す等は、舍利弗が未来の華光如来、迦葉が光明如来等の説をば、誰の人か疑網をなすべき。

而れども爾前の諸経も又仏陀の実語なり。大方広仏華嚴經に云く「如来の智恵大薬王樹は、唯二処に於て生長の利益を為作すこと能はず。所謂二乗の無為広大の深坑に墮つると、及び善根を壊る非器の衆生の大邪見貪愛の水に溺るるとなり」等云云。

此の経文の心は、雪山に大樹あり、無尽根となづく。此れを大薬王樹と号す。閻浮提の諸木の中の大王なり。

此の木の高さは十六万八千由旬なり。一閻浮提の一切の草木は、此の木の根ざし枝葉華菓の次第に随ひて、華菓なる(成)なるべし。

言し、十方分身の諸仏は広長舌相を示して経文の真实性を助証した。これほどの經典であれば、舍利弗が華光如来になり、迦葉が光明如来になるという成仏の保証に、一体誰が疑問を起こすであろうか。

② 爾前經での二乗不作仏

ところが、法華經以前の諸經典もまた仏が語った真実の言葉である。華嚴經には次のように述べられている。「仏の智恵は大薬王樹に譬えられるが、この樹は二つの場所では生長することができない。それは、無余涅槃という広く深い穴に墮ちている二乗と、大きな邪見と貪愛の水に溺れている断善根の「闍提である」と。

この経文の意味は、ヒマラヤ山の頂きに大樹があつて無尽根という。また、大薬王樹と称して、この世界のあらゆる樹木の中の大王である。

高さは十六万八千由旬。世界のすべての草木は、この木の根の伸び具合や枝・葉・華・果実の生長度合いに応じて、それぞれが咲いて果実が実るのである。

(が) 建元三年(583)に訳出した。古來法華經の開經とされ、結經の「觀普賢菩薩行法經」と共に法華三部經と稱される。

広長舌相 仏や転輪王の三十二相の一つで、広く長く舌をのべ広げて顔をおおい、額の間にまで届く相。古代のインドでは言葉の真实性の証明のために舌を出す風習があり、舌が長いほど言説が真実であることが証明された。華嚴經 具名を「大方広仏華嚴經」とい、漢訳三種が現存する。①六十華嚴。六十卷三十四品あり、東晋の仏跋跋陀羅(ぶつたばだら)の訳。旧訳・晋訳ともいう。②八十華嚴。八十卷三十九品あり、唐の実叉難陀(じつしやなんだ)の訳。新訳・唐訳ともいう。③四十華嚴。四十卷で、唐の般若(はんにや)の訳。經典全体の訳出ではなく、經末の入法界品だけを別訳したもの。同経は、仏が成道後第二七日(十四日)に毘盧遮那法身として海印三昧の中にありながら、文殊や普賢等の大菩薩に対して自らの悟りの内容をそのまま説いた經典とされる。天台の五時教判では第一・華嚴部の主典とされ、菩薩の五十二位の階位や法界縁起・法界唯心の義が主説されている。無余涅槃 完全な真実の悟りの意。煩惱はもとより、肉体の煩悩からも完全に脱却した二乗の理想の境地。一切の煩惱を断じて未来の生死の原因を滅した者が、なお身体だけを残している状態を有余涅槃といい、その身体も無に帰した状態を無余涅槃という。灰身滅智とも称する。一闍提 仏法を信じないゆえに成

此の木をば仏の仏性に譬へたり。一切衆生をば一切の草木にたとへ。但し此の大樹は火坑と水輪の中に生長せず。

二乗の心中をば火坑にたとえ、一闍提人の心中をば水輪にたとえたり。此の二類は永く仏になるべからずと申す経文なり。

大集經に云く「二種の人有り、必ず死して活きず。畢竟して恩を知り、恩を報ずること能はず。一には声聞、二には縁覺なり。

譬へば人有りて深坑に墮墜し、是の人自ら利し、他を利すること能はざるが如く、声聞・縁覺も亦復た是の如し。解脱の坑に墮ちて、自ら利し、及以他を利すること能はず」等云云。

外典三千余卷の所詮に二つあり。所謂孝と忠となり。忠も又孝の家より

仏はこの大薬王樹を仏性に譬え、すべての人々を一切の草木に譬えている。ただ、この大樹は火の穴と水の輪の中では生長しない。

これは、声聞・縁覺の二乗の仏性のない心中を火の穴に譬え、一闍提の善根を断じた心中を水の輪に譬えたもので、この二類は永久に成仏できないと述べられた経文である。

大集經には「二種類の人がいて、一度三界の生死を離れて二度と戻つてこない。それゆえ、結局彼らは恩を知ることとも報ずることともできない。一類は声聞、もう一類は縁覺である。

たとえば、深い穴に墮ちてしまった人がいて、自力で穴から出ることもできず、当然他人を救うこともできない。声聞や縁覺もこれと同様に、無余涅槃の穴に墮ちて仏性を断じてしまうので、自分も他人も共に利益することができない」と説かれている。

儒教の典籍三千余卷に説かれる極理は二つある。すなわち、孝と忠である。そのうち、忠は孝の思想から出ている。

仏する因縁を欠いた者で、断善根・信不具足・極欲等ともいう。
由旬 インドの距離の単位であるが、その数量は時代状況により異なっており一定しない。一般には帝王一日の行軍距離を指し、約七マイル(二二キロ)または九マイル(二四キロ)とされる。

声聞 仏の教えを聞いて修行する人。もとは仏在世中の弟子を指したが、縁覺・菩薩と並べて二乗・三乗の一つに数える時には、仏の教説に従つて自己の解脱のみを目的として修行する出家の聖者をいう。四諦の法門により修行して四沙門果を悟り、灰身滅智して無余涅槃に入ることを目的とする。声聞のための教えを声聞乗、その教えを説く經典を声聞藏という。
縁覺 仏の教導によらずに自ら理を悟り、静寂な孤独を好むために、説法や教化をしないといわれる聖者。声聞と共に二乗、声聞・菩薩と共に三乗と呼ばれる。一般には十二因縁を悟り、飛花落葉などの外縁によつて開悟するとされる。
大集經 六十卷で、具名を「大方等大集經」という。隋の僧が開皇六年(586)に編集したもの。仏が成道後十六年に広く十方の仏土の仏・菩薩を集めて大乘の法を説いたとされる經典で、法相や法数に関する記述が多く、思想的には般若系の空思想と密教的な要素が色濃く認められる。卷二四には三災が示され、同卷五五には五箇の五百年について説かれて、末法の義が明かされている。
忠 主君や国家に対して臣下や国民として本分を尽くすこと。忠誠。忠義。

いでたり。

孝と申すは高なり、天高けれども孝よりも高からず。又孝とは厚なり、地あつけれども孝よりは厚からず。

聖賢の二類は孝の家よりいでたり。

何に況や仏法を学せん人、知恩・報恩なかるべしや。仏弟子は必ず四恩をすつて、知恩・報恩をいたすべし。

其上、舍利弗・迦葉等の二乗は、二百五十戒・三千の威儀持整して、味・淨・無漏の三静慮、阿含經をきわめ、三界の見思を尽くせり。知恩報恩の人の手本なるべし。

然るを不知恩の人なりと世尊定め給ひぬ。其の故は、父母の家を出でて出家の身となるは、必ず父母をすくはんがためなり。

二乗は自身は解脱とをもえども、利

孝は高に通じる。天が高いといつても孝の徳の高さには及ばない。また、孝は厚に通ずる。大地が厚いといつても孝の徳の厚さには叶わない。

儒教の聖人や賢人もこの孝の思想を實踐した人たちである。ましてや、仏法を学ぼうとする人は恩を知り、恩を報ずることを第一に心がけるべきである。仏の弟子たるべき者は、かならず父母の恩・一切衆生の恩・国王の恩・三宝の恩という四恩を知つて、知恩・報恩に精進しなければならない。

特に、舍利弗や迦葉などの二乗は、比丘の二百五十戒や三千の威儀を堅持し、味禪・淨禪・無漏禪の三種の禪定を修して、阿含經の教えを体得し、三界の見惑と思惑を断じ尽くした聖者である。そんな彼らは知恩・報恩を實踐する人の手本でなければならないはずである。

ところが、釈尊は大集經で彼らを「恩を知らない者」と決めつけられた。その理由は、父母の家を出て出家の身となる目的は、間違ひなくその父母を救うことにある。

二乗の者たちは、自分では悟りを開いたと思つてゐるが

恩 人から受ける情けや恵み、情愛やいつくしみ等をいう。仏教では、衆生がこの世で受けるものとして四恩が説かれ、「正法念處經」卷六十一には母・父・如來・説法法師の四恩、「心地觀經」卷二では父母・衆生・国王・三宝の四恩と、それに対する報恩がそれぞれ説かれている。

父母の恩 父および母から受ける恩恵。両親が子にける慈しみ。一切衆生の恩 一切衆生はこれまでの多生において互いに父母となり、それゆえ一切の女人は悲母であり、一切の男子は慈父であるという義からの恩恵。

国王の恩 みずからが所属する国の王から受ける恩恵。その国の山河や大地のすべてが国王に属し、衆生の衣食住がひとえに国王の恩によるものという認識に基づく。三宝の恩 仏・法・僧の三宝の恩恵。仏道に導いて、最終的な救済を与えるという認識に基づく。

二百五十戒 小乗教を修行する比丘が受持すべき具足戒のことで、四波羅夷・十三僧残・二不定・三十捨墮・九十單墮・四提舍尼・百衆學・七滅諍の二百五十戒からなる。

三千の威儀 比丘・比丘尼が行・住・座・臥の四威儀において、常に心懸けるべきとされる生活規律の總称。比丘戒の二百五十戒に四威儀を乗じた一千に、さらに三世を当てて三千の威儀としたもの。

味禪・淨禪・無漏禪 味禪は根本味禪のことで、貪愛に相應して起る禪定。淨禪は根本淨禪のことで、有漏の善心に相應して起る禪定。無漏禪は出世間禪のことで、無漏智を獲得するために修する禪定のこと。三静慮と總称する。

他の行かけぬ。設ひ分々の利他ありといえども、父母等を永不成仏の道に入るれば、かへりて不知恩の者となる。

維摩經に云く「維摩詰、又文殊師利に問ふ。何等をか如來の種と爲す。答へて曰く、一切塵勞の囂は如來の種と爲る。五無間を以て具すと雖も、猶能く此の大道意を發す」等云云。

又云く「譬へば族姓の子、高原陸土には青蓮芙蓉衡華を生ぜず、卑湿汚田乃ち此の華を生ずるが如し」等云云。又云く「已に阿羅漢を得て応真と爲る者は、終に復た道意を起こして仏法を具すること能はざるなり。根敗の士、其の五樂に於て復た利すること能はざるが如し」等云云。

文の心は、貪・瞋・痴等の三毒は仏

も知れないが、他人を利益する修行が基本的に欠けている。それゆえ、たとえ少しばかり他人を利益することがあつても、結局はみずからの父母等を永久に成仏できない道に導き入れてしまい、逆に恩知らずの者となつてしまふ。

維摩經には次のように述べられている。「維摩居士がまた文殊師利に質問した。『何を如來の種とするのか』と。答えていう。『心をわずらわすすべての煩惱こそ如來の種である。たとえ、殺父・殺母・殺阿羅漢・破和合僧・出仏身血という無間地獄に墮ちる五つの罪を犯した者でも、なお悟りを求める心をよく起こすことができる』と。

また「たとえば、良家の子よ、高原の乾いた土地には青蓮華や芙蓉の花は生育しない。湿った汚い田にこそ蓮華の花が咲くようなものである」とあり、

「小乗の阿羅漢果を得て煩惱を断じ尽くしてしまつた者は、さらに菩提心を起こして眞實の仏法を獲得することはできない。それは、眼・耳・鼻・舌・身という五根を欠損した人が、色・声・香・味・触の五欲の楽しみを受けることがないのと同様である」とも述べられている。

經文のこころは、貪り・瞋り・無痴などの三毒の煩惱は仏

維摩經 三卷。中国・姚秦代の鳩摩羅什が弘始八年(400)に訳出した。具名を「維摩詰所説經」といふ「浄名經」ともいふ。維摩詰という在家居士を主人公として、空思想に基づく大乘菩薩道の実践を説く經典である。

維摩居士「維摩經」の中心人物である在家居士。同經によると、中インド毘舍離城の長者で大乘仏教の奥義をきわめ、無量の諸仏を供養して仏教の流布に貢献した。また、非常に雄弁で、巧みな方便を用いて衆生を教導したといふ。文殊師利 諸仏の智慧をつかさどる菩薩。右脇の普賢菩薩と相對して、釈尊の左脇に侍し、智慧の威力を象徵するためにその像は獅子に乗ることが多い。諸經には文殊が諸仏菩薩の父母であると説かれるが、それは文殊が大乘仏教の悟りの智慧にして、成仏に不可欠な般若波羅蜜を體現する菩薩であることによる。

殺父・殺母・殺阿羅漢・破和合僧・出仏身血 小乗の五逆罪で、「俱舍論」卷十七に説かれる。父を殺し、母を殺し、阿羅漢を殺し、仏身より血を出し、和合僧を破るの五罪。これを犯すと必ず無間地獄に墮ちるとされ、五無間業と呼ばれる。和合僧を破るとは、仏の教団を分裂混乱させる行為を指す。阿羅漢果 小乗教によつて得る四果の最高位で、三界の見思惑を断尽して、涅槃の理を証得した位。五欲 五官の欲望の意で、眼・耳・鼻・舌・身の五官・五根が色・声・香・味・触の五境に対して起こす欲望のこと。第一・色欲は青・赤などの色彩や男女の姿形などに対する欲望。第二・声欲は樂器の音色や男

の種となるべし、殺父等の五逆罪は仏種となるべし、高原の陸土には青蓮華生ずべし、二乗は仏になるべからず。

いう心は、二乗の諸善と凡夫の惡と相對するに、凡夫の惡は仏になるとも二乗の善は仏にならじとなり。

諸の小乗經には惡をいましめ、善をほむ。此の經には二乗の善をそしり、凡夫の惡をほめたり。

かへて仏經ともをぼへず、外道の法門のやうなれども、詮するところは二乗の永不成仏をつよく定めさせ給ふにや。

方等陀羅尼經に云く「文殊、舍利弗に語らく、猶枯樹の如く更に華を生ずるや不や。亦山水の如く本処に還るや不や。折石還りて合ふや不や。焦種

の種となるだろう。また、父母を殺すなどの五逆罪も仏種となるにちがいない。しかし、たとえ高原の乾いた土地に青蓮華が生ずることがあつても、声聞・緣覺の二乗は仏の覺りを得ることはできない。

これは、二乗の多くの善と凡夫の惡とを比べて、凡夫の惡業や煩惱が仏の覺りとなることはあつても、煩惱の断尽を目指して修する二乗の善行は仏にならない、という意味である。

多くの小乗經典は、惡を誡めて善を讚めたたえる。一方、この維摩經は声聞・緣覺の二乗の善を非難し、凡夫の惡を稱讚している。

まるで仏教の經典でなく、外道の法門のようにも見えるが、結局、仏は二乗が決して成仏できないということを強く決め付けんとされたのであろうか。

方等陀羅尼經は次のように説いている。「文殊師利が舍利弗に尋ねた。『枯れてしまった木に再び花が咲くことがあるかどうか。また、山から流れ落ちた水が再び水源に帰るところがあるかどうか。一度割れてしまった石がもとに戻るか

女の歌詠などに対する欲望。第三・香欲は芳香に対する欲望。第四・味欲はすべての飲食美味に対する欲望。第五・触欲は男女の肌や衣服に触れたいという欲望。総じて世俗的な人間の欲望で、「大智度論」卷十七等に説かれる。

仏種 仏となるための種子で、仏種子ともいう。通常は衆生の仏性を指すが、御書の中では仏・菩薩によつて下される成仏の因子という意で多く使われる。「法華經」方便品には「法は常に無性なり。仏種は縁に従つて起ると知しめす」とあり、仏種が生滅変化する有為法と説かれている。

青蓮華 青色の蓮華で、睡蓮の一種。仏典に優鉢羅華（うばらけ）という名称で見える蓮華が青蓮華・紅蓮華などと訳され、その内の青色のものをいう。なお、蓮華は水草なので、基本的に陸地では生育しない。

惡業 苦果を招く原因となる身・口・意による悪い行為をいう。具体的には十惡・十四誹謗・五逆・正法誹謗などが挙げられ、最も根源的な惡業は謗法とされる。

方等陀羅尼經 四卷。具名は「大方等陀羅尼經」で、「大方等檀特陀羅尼經」「檀特陀羅尼經」ともいう。中国・北凉代の法家が永安年間（401～2）に訳出したもので、密教經典としては最古の訳出とされる。摩訶祖持（まかたんじ）と呼ばれる陀羅尼の因縁や功德・修行法などが説かれ、菩薩の二十四重戒や声聞の授記作仏が示されている。南岳慧思はこの經によつて方等三昧を行じたとされ、天台智顗が四種三昧の第三・半行半坐三昧

芽を生ずるや不や。

舍利弗の言く、不なり。文殊の言く、若し得べからずんば、云何ぞ我に菩提の記を得て歓喜を生ずるや不やと問ふや」等云云。

文の心は、枯れたる木、華さかず、山水、山にかへらず、破れたる石あはず、いれる種をいず。二乗またかくのごとし。仏種をいれり等となん。

大品般若経に云く「諸の天子、今未だ三菩提心を発さざる者、应当に発すべし。若し声聞の正位に入れば、是の人能く三菩提心を発さざるなり。何を以ての故に。生死の為に障隔を作す故」等云云。

文の心は、二乗は菩提心ををこさざれば我、随喜せじ、諸天は菩提心ををこせば我、随喜せん。

どうか。火で焼いた種から芽が出るかどうか」と。

舍利弗は『いずれもあり得ない』と答えた。文殊師利は『もしあり得ないというのならば、汝はどうして私に、成仏の保証を得て、心に喜びを得ることができるかどうかなどと問いたただすのか』といった」と。

これは、枯れた木に花は咲かないし、山から流れ落ちた水が水源に帰ることもない。割れた石がもとに戻ることもないし、火で焼いた種から芽が出ることもない。声聞・縁覚の二乗もまたこれと同じように、仏になるべき種を火で焼いてしまったのだ、という意味である。

大品般若経には「多くの天の子よ、これまでに覺りを求める心を起こしていない者は、今まさにその心を起こせ。もし声聞の位に入ってしまうと、その人は覺りを求める心を起こすことができない。どうしてか。六道の生死を一度離れてしまった声聞は、再び生まれて来ないからである」と見える。

これは、声聞乗および縁覚乗は菩提心を起こすことができないから、私（須菩提）は喜ばない。天の人たちは菩提心を起こすから、私は喜ぶ、という意味の経文である。

として説いた方等三昧もこの經に基づいている。

大品般若経 具名は「摩訶般若波羅蜜經」で、二七卷または三〇卷・四〇卷。後秦の鳩摩羅什が弘始六年（三二）に訳出した。大乘仏教初期の般若空觀を説いた經典で、般若部諸經典の中でも最も基本的なものである。全体は九十品からなり、最初の六品は仏が舍利弗などの上根の者に対して般若の理を説いたもので、三仮品第七以降は主に須菩提が仏に代わって菩薩や衆生に説法し、それを仏が承認する形態を採っている。注釈書にはインドに竜樹の「大智度論」百卷があり、中国では吉蔵の「大品經義疏」十卷等がある。同本異訳として、西晋・無叉羅訳の「放光般若波羅蜜經」二十卷と西晋・竺法護訳の「光讚般若波羅蜜經」十卷があり、玄奘訳の「大般若経」の第二会に相当する。

天の子 天界の人。天人。天界は十界および六道・六趣の一つで、すぐれた果報の者が生まれる所をいう。具体的には、欲界・六天と色界・無色界の総称である。

菩提心 詳しくは阿耨多羅三藐三菩提心（あのくたらさんみやくさんぼだいしん）といい、無上正真道意・無上菩提心・無上道心・無上道意・道心・道念ともいう。悟りを得たいと願う心。仏果を求めて修行しようとする心。この菩提心を起こすことを發菩提心・發心・發意といい、仏道修行の出発点である。一般に菩提心の本体は衆生が本来的に具えている清浄な心性であるとされ、内容としては四弘誓願とされる。

首楞嚴經に云く「五逆罪の人、是の首楞嚴三昧を聞いて阿耨菩提心を発せば、還りて仏と作るを得。世尊、漏尽の阿羅漢は猶破器の如く、永く是の三昧を受くるに堪忍せず」等云云。

浄名經に云く「其れ汝に施す者は福田と名づけず、汝を供養せん者は三惡道に墮す」等云云。

文の心は、迦葉・舍利弗等の聖僧を供養せん人天等は、必ず三惡道に墮つべしとなり。

此等の聖僧は、仏陀を除きたてまつりては人天の眼目、一切衆生の導師とこそをもひしに、幾許の人天大会の中に於て、かう度々仰せられしは本意なかりし事なり。只詮ずるところは、我が御弟子を責めころさんとにや。

首楞嚴經には次のように説かれる。「仏敎の重罪である

五逆罪を犯した人でも、この首楞嚴三昧經を聴聞して菩提心を起せば、仏に成ることが出来る。世尊よ、煩惱が尽きてしまった阿羅漢は、あたかも割れてしまった器のよう、永久にこの三昧經を聞き受ける能力がないので、菩提心を起すこともできない」と。

維摩經には「そもそも、汝に供物を施す者は功德を得ることはできない。汝に供養する者は地獄・餓鬼・畜生の三惡道に墮ちる」と述べられている。

これは、迦葉や舍利弗ら聖僧とあがめられる人々を供養する人や天衆は、確實に三惡道に墮ちるであろうという意味である。

これらの聖僧たちは、釈尊を除きたてまつれば、人間や天衆にとつては煩惱の闇を照らす智慧の眼であり、すべての人々を成道に導く師であると思つてきたのに、人天が大勢集まつた多くの満座の中で、このようにたびたび批判されたことは、彼らにとつては全く思いがけないことであつたろう。要するに、釈尊はご自分の弟子たちを責め殺そうとされたのだろうか。

首楞嚴經「首楞嚴三昧經」二卷。姚秦の鳩摩羅什の訳。仏が堅意菩薩の質問に対して、菩提をすみやかに得るための法として首楞嚴三昧を説いて妙用を示し、具体的な功德を明かしている。首楞嚴三昧とは、心を一つの対象に集中させて散り乱さない状態という意の三昧の一種で、首楞嚴・首楞嚴定ともいう。首楞嚴は梵語・シュラナガマの音写で、健相・健行・一切事究竟等と訳す。第十地に住する菩薩が得る三昧とされる。「大智度論」卷四十七によると、大將軍が諸兵を率いるように諸の三昧が首楞嚴に隨從し、轉輪聖王が強敵を平伏させるように、煩惱などの魔を調伏する勇猛で堅固な三昧と説かれる。

地獄・餓鬼・畜生の三惡道 三惡道は、衆生がみずからの惡業によつて赴く三種の苦處で、三善道に對する語。三惡趣・三塗（三途）ともいう。地獄道（界）は、地下にある牢獄の意。現世に惡業をなした者が、生前および死後にその苦しみの報いを受ける世界。無間・八熱（八火・八寒・孤獨などの地獄がある。餓鬼道（界）は、餓鬼の世界で、この世界の有情が常に飢餓に苦しむところからの呼称である。地下五百由旬の間魔王界を本拠とする。畜生道（界）は、互いに自己保存のために他の生物を食し、非常に苦しみが大い生存の境地をいう。また、三つは共に十界・六道・四惡趣の一つである。

聖僧 すぐれた僧、高德の僧の意。具体的には多義があるが、ここでは阿羅漢等の聖果を得た僧の意で用いられている。

このほかにも、菩薩は牛の乳で二乗は驢馬ろばの乳、菩薩は金属製の器で二乗は素焼きの器、菩薩は太陽の光で二乗は螢の火ほたるというように、さまざまな譬えを用いて声聞・縁覚

それも一言・二言や一日・二日、一箇月・二箇月や一年・二年に止まらず、經典も一つや二つだけに終らない。四十年余りの間に数限りなく説かれた經典のなかで、無量の説法座に集まつた人々に対して、一言の許す言葉もなく叱責しつせきされた。もちろん、釈尊は決して偽りの言葉を語られないとみずからも知り、人も知り、天の神も知り、地の神も知っている。

一人・二人だけでなく百千万人、欲・色・無色の三界にいる諸天・りゆうこん竜神・阿修羅、インド全体と東・西・南・北の四州、六欲天と色天と無色天、そして十方世界から雲のごとく集まつた人間・天衆・声聞・縁覺・大菩薩たち、これらの人々のすべてが、もうご釈尊に妄語なきことを知り、同時にその釈尊が声

彼らはそれぞれの国々へ帰つて、娑婆しやば世界での釈尊の説
法の様子をそれぞれの国々で詳細に語るの、十方世界の

このほかにも、菩薩は牛の乳で二乗は驢馬ろばの乳、菩薩は金属製の器で二乗は素焼きの器、菩薩は太陽の光で二乗は螢ほたるの火というように、さまざまな譬えを用いて声聞・縁覚を責めつけられた。

それも一言・二言や一日・二日、一箇月・二箇月や一年・二年に止まらず、經典も一つや二つだけに終らない。四十年余りの間に数限りなく説かれた經典のなかで、無量の説法座に集まつた人々に対して、一言の許す言葉もなく叱責しつせきされた。もちろん、釈尊は決して偽りの言葉を語られないとみずからも知り、人も知り、天の神も知り、地の神も知っている。

一人・二人だけでなく百千万人、欲・色・無色の三界にいる諸天・りゆうこん竜神・阿修羅、インド全体と東・西・南・北の四州、欲天と色天と無色天、そして十方世界から雲のごとく集まつた人間・天衆・声聞・縁覺・大菩薩たち、これらの人々のすべてが、釈尊に妄語もうごなきことを知り、同時にその釈尊が声聞・縁覺を強く叱責する言葉を聞いたのである。

彼らはそれぞれの国々へ帰つて、娑婆しやば世界での釈尊の説
法の様子をそれぞれの国々で詳細に語るの、十方世界の

菩薩 梵語のボーディ・サットウ
アの音略。菩提薩埵・菩提衆多・冒
地薩恒縛・扶薩と音写し、覺有情
道衆生・仏衆生などと訳す。無
上菩提・仏果を求め、未來に仏の
悟りを開こうとする者。もとは積
善の前行における呼称であつたが
、大乘仏教の解釈により、利他内
対比され、衆生利益といふ利他の

意義を付加されて大乘の修行者を指すようになつた。これを摩訶薩埵(マハー・サットヴァの音写)と菩薩摩訶薩などと名付けて二乗と區別した。三乗や四聖、十界の一つに数えられる。すべての菩薩は初發心の際に四弘誓願 衆生無辺誓願度、煩惱無数誓願断、法門無尽誓願知、仏道無上誓願成を起し、菩薩のあり方(菩薩道)や修行(菩薩行)の目的方向を自覚し、それに準じて菩薩戒を受持し、六波羅蜜(布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧)などの修行を積んで仏果を証得する。

六欲天。三界（欲界・色界・無色界）のうち、欲界に所属する六重の天で、六欲・欲天ともいう。①四天王天。持国・增長・広目・多聞の四天王およびその眷属の住処。須弥山の中腹にあり、四王天・四大王衆天ともいう。②忉利天。須弥山の頂上にあり（地居天、帝釈天を中央に四方にそれぞれ八天あり、總計三十三天あるところから三十三天ともいう）。③夜摩天。忉利天より八万由旬の上空にあり（空居天、天衆が随時快樂を得るところから善分天・時分天とも称す）。④都率天。内院で補処の菩薩たる弥勒が説法にたとされ、天衆は外院に住して満足するという。説史多天ともいう。⑤化乐天。天衆が

るに、十方無辺の世界の一切衆生一人もなく、迦葉・舍利弗等むじやう・しゃりふは永不成仏の者、供養してはあ(悪)しかりぬべしとしりぬ。

而るしかを後八年の法華經に忽たちまちに悔く
 ひ還して、二乗作仏すべしと仏陀ぶつだとか
 せ給はんに、人天大会、信仰をなすべ
 しや。

用ゐるべからざる上、先後の経々に
疑網をなし、五十余年の説教皆、虚妄
の説となりなん。されば「四十余年
未顕真実」等の経文はあらませしか。

天魔の仏陀と現じて後八年の経をば
とかせ給ふかと疑網するところに、げ
に(寒)げにしげに劫国名号と申して、
二乗成仏の国をさだめ、劫をしるし、

すべての人々がみな、迦葉や舍利弗らの二乗は永久に成仏できない者であり、彼らを供養することはかえつて悪いことなのだろうと認識するにいたつた。

③ 法華真実の証明

ところが、釈尊一代五十年のうち、最後の八年間の法華經において、それまでの所説をすべてくつがえして、声聞・縁覺の二乗は将来必ず仏となるであろうと釈尊が説かれたのだから、果たしてどれほどの人々がその言葉を信じるだろうか。

とても信じるどころか、法華經以外の諸經に対しても疑問を持つてしまい、釈尊一代の説教すべてがうそ偽りとなつてしまふだろう。それゆえ、無量義經の「法華經以前の四十余年に私はいまだ眞実を説き顕わしていない」という經文は、前々から予定されていたものなのか、

それとも、もしかして天魔が仏の姿となつて出現し、最後八年間の法華經を説かれているのではないか、と説法の座にいた人々が疑問を起こしているところに、まことしやかに劫国名号と申して、二乗が成仏する国や時代、そして

みずから變化して楽しむといひ、樂變化天とも稱す。⑥他化自在天。他の者が作り出した対象についても樂を受けるという。欲界の最高処にあり、魔王の官殿があるとされる。第六天・魔天とも稱す。

色天、三界の第二・色界に所屬する天で、四禪定を修して生まれる初禪天、二禪天・三禪天、四禪天の四天から成る。さらに、初禪天には梵衆天・梵輔天・大梵天の三天、第二禪天には少光天・無量光天・極光淨天の三天、第三禪天には少淨天・無量淨天・遍淨天の三天、第四禪天には無雲天・福生天・広果天・無熱天・無煩天・善現天・色究竟天の八天がある。

無色天。三界の第三無色界に所属する天で、空無辺処天・識無辺処天・無所有処天・非想非非想処天の四天から成る。空無辺処天は、形ある身を厭つて無辺としての空を悟り生ずる天。識無辺処天は、識を無辺であると観じ悟つて生ずる天。無所有処天は、何もそこには存在しない」と知り悟つて生ずる天。非想非非想処天は、極めてわずかな弱い心の想念があるだけで、ほとんど無想に近い禪定の境地の者が生ずる天。

娑婆世界　さまざまの煩惱から脱却できない衆生が、苦しみに耐えて生きる世界。釈迦如来が衆生を救い、教化する世界をいう。忍土・穢土とも称す。

天魔 四魔(煩惱魔・陰魔・死魔・天子魔)の一。天子魔のこと。欲界第六天(他化自在天)の天主と天民が仏道修行を妨げるのを魔と名づけたもの。第六天の魔王と同義。邪見によつて智慧を奪い、死の因縁

所化の弟子などを定めさせ給へば、教主釈尊の御語すでに二言になりぬ。

自語相違と申すはこれなり。外道が仏陀を大妄語の者と咲ひしこと、これなり。

人天大会を(興)さめてありし程に、爾の時に東方宝浄世界の多宝如来、高さ五百由旬、広さ二百五十由旬の大七宝塔に乗じて、教主釈尊の人天大会に自語相違をせめられて、

とのべ(左宣)かうのべ(右述)、さまざまに宣べさせ給ひしかども、不審猶をは(晴)るべしともみえず、もてあつかいてをはせし時、仏前に大地より涌现して虚空にのぼり給ふ。例せば暗夜に満月の東山より出づるがごとし。

七宝の塔、大虚にかからせ給ひて、大地にもつかず大虚にも付かせ給はず、天中に懸かりて、宝塔の中より梵

教化を受ける弟子などをお定めになったので、教主釈尊のお言葉は全く二つに分かれてしまった。

文字通りの自語相違である。外道が釈尊をひどい虚妄の説を吐く者だと笑ったのは、まさにこのことである。

こうして、会座の聴衆全体がすっかり気まずい雰囲気になつていたその時に、東方の宝浄世界から来た多宝如来が、高さ五百由旬、広さ二百五十由旬という七宝で飾られた大塔の中に坐して出現された。教主釈尊が人間や諸天らの聴衆に自語相違ではないかと責められて、

あれこれとさまざまにお述べになつたけれども、人々の疑問はなお晴れず、ほとほと釈尊がもてあましておられた、まさにその時に、大宝塔に坐した多宝如来が釈尊の前に大地から湧き出て、中空に昇られたのである。それはまるで暗闇の夜空に東の山からすつと出た満月のようであつた。

七宝で莊嚴された大塔は、大地の上に降りられるのでもなく、虚空に高く昇り上がられるのでもなく、中空に留まり、その宝塔の中から多宝如来がよく透る清らかな声を出

を作るといわれる。

七宝 七つの宝。ここでは、金・銀・琉璃・珊瑚・水晶・瑪瑙・珍珠・玫瑰(まいえ)の七つ。

法華經 古来、六訳三存と称して六度漢訳され、その内の次の三本が現存する。①西晋の竺法護が太康七年(286)に訳出した「正法華經」十卷。②後秦の鳩摩羅什が弘始八年(406)に訳出した「妙法蓮華經」八卷(あるいは七卷)二十八品。③隋の闍那崛多・笈多が仁寿元年(601)に共訳した「添品妙法蓮華經」七卷二十七品。その他に、部分訳として羅什訳の見宝塔品の一部および提婆達多品に相当する訳者不明の「薩曇分陀利經」一卷がある。これら諸本のうち、中国・日本では羅什訳が最も広く流布し、「法華經」といえば羅什訳「妙法蓮華經」を指すことが多い。御書の中では、法華經は一部八卷二十八品の「妙法蓮華經」を意味するが、「法華經」の要法たる妙法蓮華經の題目を指す場合も多い。釈尊の一代聖教における「法華經」の位置について、中国および日本を通して古来より種々の教判が主張され、その位置付けもまちまちである。そんな中、中国の天台智顗は「法華玄義」を撰じて五時八教判を立て、「法華經」が諸經中第一であるという明確な主張を示した。また、「法華文句」を作成して「法華經」の經文に因縁・約教・本迹・観心の四釈を施し、釈尊の出世の本懐が「法華經」にあることを明かした。さらに「法華經」の説相に基づいて「摩訶止観」を講説して一心三觀・一念三千の理を説き、実践原

音声を出だして証明して云く、

「爾その時に宝塔の中より大音声を出だして歎なげめて言いく、善よきかな善よきかな、
 釈迦牟尼世尊、能よく平等大恵・教菩薩きょうぼさつ
 法・仏ぶつ所護念ぶつしよこんの妙法華經を以て大衆の
 為に説きたまふ。是かくの如し是の如し。
 釈迦牟尼世尊の所説の如きは皆是れ真
 実なり」等云云。

又云く「爾その時に世尊、文殊師利等
 の無量百千万億の旧住娑婆世界の菩
 薩、乃至人非人等、一切の衆の前に於おい
 て大神力を現じたまふ。

広長舌を出だして上、梵世ぼんせに至ら
 しめ、一切の毛孔もうこうより、乃至、十方世
 界衆の宝樹の下の師子の座の上の諸仏
 も、亦また復た是かくの如く、広長舌を出だし、
 無量の光を放ちたまふ」等云云。

又云く「十方より来たりたまへる諸

して、法華經の眞実を次のように証明された。

「その時に宝塔の中から大きな声で歎めていわれた。『す
 ばらしい、すばらしい。釈迦牟尼しやかにん仏よ、よく平等にして大
 いなる智慧、菩薩を教える法、仏に護り念ぜられる妙法蓮
 華經を、多くの人々のために説きになられた。その通り、
 その通り。釈尊の説くところはすべて眞実である』と。

また、如来神力品にょらいじんりきほんには釈尊と分身諸仏の眞実の証明のさ
 まが、「その時に、釈尊は昔よりこの娑婆世界に長く住して
 いる文殊師利などの無量百千万億の菩薩たちや、その他の
 大衆の前で非常に不思議な力を現わされた。

それは、広く長く出した舌をはるか上方の梵天ぼんてんまで伸ば
 し、身体中の毛孔から無量無数の色の光を放って、十方の
 世界を照らし出された。すると、数多くの宝樹ほうじゆの下しの師子座
 の上にまします分身の諸仏も、また同様に広く長い舌を出
 し、無量の光を放たれた」と説かれている。この広く長い
 舌を出すのは、仏語ぶつごの眞実を証明することを意味する。

そして、以上の釈迦・多宝・分身諸仏の三仏の証明を受け

理としての円頓止観を勧めた。日本では、聖徳太子が「法華經」を「勝鬘經」「維摩經」と共に鎮護国家の經典と定めて広く信奉されるようになり、太子自身も「法華義疏」を作成してその政治理念の根底に法華思想を置いた。平安時代には最澄が比叡山に天台法華宗を建立して法華教學を宣揚し、特に大乗戒壇を建立して法華の一乗建立の理想を社会的に具現せんと務めた。鎌倉時代に出現した宗祖は以上のような智顗や最澄の法華教學を繼承しながらも、「法華經」本門に重点を置いた独自の教學大系を樹立し、末法救済の要法たる南無妙法蓮華經を一切衆生の口に入れんとして死身弘法に尽力した。

如来神力品 「法華經」卷七・如来神力品第二十一のこと。本品から經末の普賢勸發品までの八品は本門流通分の中の付屬流通であり、本品と次の屬累品の二品は屬累流通といわれ、流通分の最要たる一經の付屬が説かれている。後の屬累品には一切の菩薩への滅後の弘經という委嘱(總付屬)が説かれているのに対して、神力品では涌出品で末代弘經のために召し出された地涌の菩薩への付屬(別付屬)が示されている。品中に説かれる結要付屬の四句の要法を天台智顗は名・体・宗・用・教の五重玄義に配して解説し、宗祖はそれを五重玄義を具備した妙法蓮華經の五字と規定された。

梵天 色界四禪天の第一・初禪天中にある三天(梵輔天・梵衆天・大梵天)の最上で、大梵天王の住処。師子座 仏のすわる所。仏を百獸の王のライオンに譬えて、その座を師子座という。

の分身の仏をして各本土に還らしむ。乃至、多宝仏の塔も還りて故の如くしたまふべし」等云云。

大覺世尊、初成道の時、諸仏十方に現じて釈尊を慰諭し給ふ上、諸の大菩薩を遣はしき。

般若經の御時は釈尊、長舌を三千にほひ、千仏十方に現じ給ふ。金光明經には四方の四仏現ぜり。阿彌陀經には六方の諸仏、舌を三千にををう。大集經には十方の諸仏菩薩、大宝坊にあつまり。

此等を法華經に引き合はせてかんがうるに、黄石と黄金と、白雲と白山と、白水と銀鏡と、黒色と青色とをば、翳眼の者・眇目の者・一眼の者・邪

て、囑累品には次のように説かれている。「釈尊は、十方世界から来られた多くの分身仏に、それぞれの本土に帰ってもらうために、次のように仰せられた。『それぞれの仏たちよ。みな安んじるところに随つて下さい。多宝如来の七宝の大塔は、もとのように扉を閉じて下さい』と。

④ 法華經と諸經の相違

釈尊がブツダガヤの菩提樹下ではじめて成道を遂げられた時は、数多くの仏が十方に現われて釈尊をなぐさめられた上に、もろもろの大菩薩を遣わされた。

また、大品般若經を説かれた時には釈尊が長い舌で三千世界を覆い、千仏が十方に出現された。金光明經の説法の際は東西南北の四方に四仏が現われ、阿彌陀經の時には四方と上下の六方世界の諸仏が舌を出して三千世界を覆った。そして、大集經の説法の時には、十方の仏や菩薩たちがみな欲界と色界の中間の大宝坊に集まられた。

これら諸經の場合を法華經と対比して考えてみると、色だけが黄色い単なる石と黄金と、白い雲と白い山と、白く凍結した氷と銀で造った鏡と、黒色と青色とのそれぞれの違いがあるが、かすみ眼の人や斜視の人、片眼を失くした

囑累品 「妙法蓮華經」卷七・囑累品第二十二のこと。前の如来神力品が本化地涌の菩薩に対する別付属であるのに対して、本品は一切の菩薩に対して総じて付属する総付属を明かす。

ブツダガヤ 仏陀伽耶と表記する。インド東部のビハール州ガヤの南方で、ガンジス川の支流ナイルンジャナ川を臨むところにある地。釈尊が六年間の苦行の後、三十才の時にこの地の菩提樹の下で悟りを開いたとされる。

金光明經 具名は「金光明最勝王經」。漢訳に六種あり、主に北涼の曇無讖(どんむしん)訳の「金光明經」四卷と、唐の義浄訳「金光明最勝王經」十卷(最勝王經)とも略称される。を指す。仏の法身が不滅であること、三身の区別や菩薩十地の修行、金光明懺悔法の功德などを説き、国王が正法を護持すれば四天王が守護する旨が示され、密教的な色彩も見る事が出来る。古来より「法華經」「仁王經」と共に鎮護国家の三部經として崇拜された。

阿彌陀經 浄土三部經の一つ。姚秦・弘始四年(522)に鳩摩羅什が訳出した「仏説阿彌陀經」を指す。小阿彌陀經(小經)・四紙經とも呼ばれ、異訳が二本ある。西方十万億土の極樂浄土にあって説法している阿彌陀仏の功德を詳説し、阿彌陀の名号を唱えることによつてかの国に往生できることや、六方の諸仏が釈迦の教説の真実たることを証明して念仏の衆生を護念すること等を説いている。

欲界 三界(欲界・色界・無色界)の一つ。色欲や食欲等の種々の本能的な欲望に支配された世界で、現

眼の者はみたがへつべし。

華嚴經には先後の經なければ仏語相違なし。なにつけてか大疑いで来べき。

大集經・大品經・金光明經・阿弥陀經等は、諸小乘經の二乗を彈呵せんがために、十方に淨土をとき、凡夫・菩薩を欣慕せしめ、二乗をわづらはす。

小乘經と諸大乘經と一分の相違あるゆへに、或は十方に仏現じ給ひ、或は十方より大菩薩をつかはし、或は十方世界にも此の經をとくよしをしめし、或は十方より諸仏あつまり給ふ。或は釈尊舌を三千にをほひ、或は諸仏の舌をいだすよしをとかせ給ふ。

此れひと(偏)えに、諸小乘經の十方世界唯一仏ととかせ給ひしをもひを、やぶるなるべし。

人や物事を正しく見る眼を持たない人などが、それをはつきり見分けることは難しいだろう。

最初に説かれた華嚴經にはそれ以前の經典との比較がないから、仏の言葉としての自語相違もない。したがって、どこからも大きな疑いなど出て来るはずがない。

大集經・大品般若經・金光明經・阿弥陀經などは、声聞・縁覺の二乗が小乗の悟りに執着することを叱り責めるために、十方に多くの淨土があると説いて凡夫や菩薩に敬い慕わせ、声聞や縁覺をあれこれと悩ませた。

もろもろの大乘經には小乘經との間に多少の違いがあるから、あるいは十方に仏が出現され、あるいは十方の世界から大菩薩を使いとして差し向け、あるいは十方の世界でも大乘經を説く旨を示し、あるいは十方世界から数多くの仏が集まられた。また釈尊が舌を伸ばして三千世界を覆い、諸仏が広長舌を示して經典を讚歎・証明するさまが説かれている。

ただし、これらは小乘經の十方世界の中にはただ釈迦牟尼仏お一人だけがおられる、という考えをうち破るのが目的であった。

象的な肉体の世界。下は地下の八大地獄から中は人界の四大州、上は天界の六欲天までをいう。大宝坊「大集經」が説かれた会座の大宝庭のこと。欲界と色界の中間にあつて、種々の珍宝によって莊嚴されている。

淨土 仏・菩薩が居住する清淨な国土で、穢土に対する語。煩惱のけがれを離れた仏の世界で、清淨土・淨國・淨刹・仏土・寂光土とも称す。大乘仏教では十方世界に諸仏の淨土を説き、その淨土は菩薩が修行を終えて仏になる時に完成する国土と説明される。例えば、「阿弥陀經」に説かれる阿弥陀仏の西方極樂淨土や阿閼仏の東方妙喜世界、薬師仏の東方淨瑠璃世界などであるが、後世に西方往生の思想が盛んになると共に、多く阿弥陀仏の極樂淨土を指すようになった。一方、「維摩經」に「其の心淨きに随つて則ち仏土淨し」と説かれるように、衆生の心が清淨であればその国土も清淨となり、現実の娑婆世界が即ち淨土であるという娑婆即寂光の義が説かれ、「法華經」如來壽量品第十六に説かれる靈山淨土や「華嚴經」の蓮華藏世界、「大乘密嚴經」の密嚴淨土などが該当する。

凡夫 愚かで凡庸な人間のこと。聖者に対する語。異生ともいい、種々の見解や煩惱によつて種々の業を起し、種々の果を受けて種々の世界に生まれる者の意。仏教の教えを知らず、煩惱・業・苦に束縛されて迷いの世界で生死を繰り返す人をいう。

大乘經 大乘の教法を説く經典で、「法華經」や「華嚴經」「涅槃經」

法華經のごとくに先後の諸大乘經と相違出来して、舍利弗等の諸の聲聞・大菩薩・人天等に將非魔作仏とをものはれさせ給ふ大事にはあらず。

而るを華嚴・法相・三論・真言・念仏等の翳眼の輩、彼々の經々と法華經とは同じとうちをもへるは、つたなき眼なるべし。

但在世は四十余年をすてて法華經につき候ものもありけん。仏滅後に此の經文を開見して信受せんことかたかるべし。

先づ一つには爾前の經々は多言なり、法華經は一言なり。爾前の經々は多經なり、此の經は一經なり。彼々の經々は多年なり、此の經は八年なり。

それゆえ、とても法華經のように、前後のさまざまな大乘經典の教えと決定的に矛盾してしまい、舍利弗等の聲聞をはじめ、大菩薩や人天の衆らに、「この經は実は惡魔が釈尊の姿になり変わって説いているのではないか」と疑われるほどの重大事ではなかった。

ところが、華嚴宗・法相宗・三論宗・真言宗・念仏宗らの眼がかすんで物事がよく見えない者たちは、みずからが信奉するそれぞれの經典と法華經とは同等だと思い込んでいるのは、まったく愚かな認識というほかない。

⑤ 仏滅後と二乗作仏

このように信じがたい法華經であるが、ただ釈尊の在世にその説法を直接聞いた人の中には、四十数年間に説かれた經典を捨てて、法華經を信じる人もあつただろう。しかし、釈尊の滅後にこの法華經の文を見て信じることは、非常に難しいにちがいない。

まず、法華經以前の諸經は言葉自体の数が多いが、法華經はわずかに一言である。また、以前の諸經は經典の数が多いが、法華經はたった一經でしかない。さらに、かの諸經典は長い年月にわたる説法だが、この法華經は最後の八

などが代表的なものである。
小乘經 小乗教の經典で、漢訳の四阿含經(長阿含經・中阿含經・雜阿含經・增一阿含經)や、パーリ語經藏の五ニカヤなどという。
三千世界 三千大千世界のこと。
三教の世界 観における単位で、一大千世界・二大千大千世界・三千大千世界・大千世界ともいう。須弥山を中心として周圍に九山八海があり、上は六欲天などを含む欲界と色界の初禪をあわせて一小世界とし、千個の小小世界を一小千世界、一小千世界が千個集まつて一中千世界、また一中千世界が千個集まつて一大千世界という。小千・中千・大千の三種の千世界によつて構成されるところから三千大千世界・三千世界と称され、一仏の教化範圍であるところから一仏世界・一仏刹と呼ばれる。

人天 人間界と天上界。人間界の人々と天上界の神々のこと。
惡魔 仏道修行を妨げる惡神のこと。単に魔ともいわれる。
釈尊の滅後 釈尊が入滅した時以後の意で、釈尊の在世に対する語。
「法華取要抄」には「問うて云く、法華經は誰人の爲に之れを説くや。答へて曰く、方便品より人記品に至るまでの八品に二意有り。上より下に向かひて次第に之れを読めば第一は菩薩、第二は二乗、第三は凡夫なり。安樂行より勸持・提婆・宝塔・法師と逆次に之れを読めば滅後の衆生を以て本と爲す。在世の衆生は傍なり。滅後を以て之れを論ずれば正法一千年、像法一千年は傍なり。末法を以て正と爲す。末法の中には日蓮を以て正と爲すなり」とあり、「法華經」

仏は大妄語もうごの人、永く信しんずべからず。不信の上に信を立てば、爾前にぜんの経々は信ずる事もありなん。法華経は永く信ずべからず。

当世とうせいも法華経をば皆信じたるやうなれども、法華経にてはなきなり。

其の故は法華経と大日経と、法華経と華嚴経と、法華経と阿弥陀経と一なるやうをとく人をば悦びて帰依し、別々なるなど申す人をば用ゐず。たとい用ゐれども本意なき事とをもへり。日蓮云く「日本に仏法わたりてすでに七百余年、但伝教大師でんぎょうだいし一人計り法華経をよめり」と申すをば、諸人これを用ゐず。

但し法華経に云く「若し須弥しゆみを接りて他方の無数の仏土に擲なげ置かんも、亦未だ為なれ難かたしとせず。乃至ないし、若し仏

年間だけに説かれた。

仏には二言があり、決して信しんじることができないとして、も、そんな不信の上に強しいて信を論じらば、爾前にぜんの諸経はあるいは信しんじることができかも知れない。しかし、法華経は決して信用されない。

今の世も、多くの人が法華経を信じているように見えても、本当の意味で法華経を信じている訳ではない。

なぜかといえば、法華経と大日経、法華経と華嚴経、そして法華経と阿弥陀経との教えはみんな一つであると説く人に喜んで帰依し、別々で勝劣があるなどと主張をする人のことは信用しない。たとえ信用したとしても、それは本意からではないと思われる。

日蓮はいう。「日本に仏教が渡来して、すでに七百年余になるが、その間にただ一人、伝教大師だけが法華経を正しく読まれた」と。こう申したとて、人々は誰もこれを信しんじない。

ただし、法華経の見宝塔品けんほうとうほんには「もし世界最高の須弥山しゆみせんを手でとつて無数の他方世界に投げ置いたとしても、それはまだ困難とはいえない。もし釈尊の滅後、悪い世の中で

を逆次に読めば、釈尊の在世よりは滅後の衆生、滅後では正像よりも末法、末法の中でも日蓮を目指して同経が説かれている旨が記されている。

爾前の諸経「法華経」が説かれる以前に説かれた諸経典のことで、爾前経という。真実の「法華経」に対して方便教・権経と規定される。天台所立の五時教判（華嚴・阿含・方等・般若・法華涅槃）でいえば、第一の華嚴時から第四の般若時までに属する経典をいう。見宝塔品「法華経」巻四・見宝塔品第十一のことで、宝塔品とも略称される。見宝塔とは、多宝如来の宝塔が地から虚空に涌出して、それを大衆が見るとの意である。最初に多宝塔の因縁が説かれ、次に三变土田して十方分身の諸仏を集めた後に多宝塔を開いたところ、多宝如来が出現して半座を釈尊に分け与えたので、二仏は並び座した。その時、釈尊は仏滅後において娑婆世界で法華経を弘通することを三度にわたって大衆に勧めた。この中、第二は余の經典は持ちやすく「法華経」を受持することは難しいとの六難九易が説かれ、第三では「此経難持」の偈頌が説かれていて、本品の宝塔涌現には証前・起後の二意があり、方便品第二から次第に説かれた三周の説法が真実であることを証明する（証前）とともに、宝塔を開かんとして分身衆が付属のための本化菩薩の召出となり、それが如来寿量品第十六の久遠実成の義を説き起す（起後）遠序としての深旨を持つとされる。そこから、本品はまた「寿量の遠序」とも呼ば

の滅後に惡世の中に於て能く此の經を説かん、是れ則ち為れ難しとす」等云云。日蓮が強義、經文には普合せり。

法華經の流通たる涅槃經に、末代濁世に謗法の者は十方の地のごとし、正法の者は爪上の土のごとしと、とかれて候は、いかんがし候べき。

日本の諸人は爪上の土か、日蓮は十方の土か、よくよく思惟あるべし。

賢王の世には道理かつべし。愚主の世に非道、先をすべし。聖人の世に法華經の実義顯はるべし等と心うべし。

此の法門は迹門と爾前と相對して、爾前の強きやうにをぼゆ。もし爾前つよ(強)るならば、舍利弗等の諸の二乗

この法華經をよく説くことがあれば、それこそ困難なことである」と見える。法華經だけが真実であるという日蓮の強い主張と、その主張が世人に受け入れられないさまは、この法華經の文にびったり一致している。

法華經を流布するために説かれた涅槃經には、「時代が下った濁惡の世には、正法を誹謗する者は十方の大地の土のように多く、正法を信受する者は爪の上に載る土ほどに少ない」と説かれていますが、どのようにこれを理解したらよいのでしょうか。

日本の人々と日蓮とでは、どちらが爪上の土である正法信受の者で、どちらが十方大地の土である正法誹謗の者か、よくよく考える必要がある。

賢い国王が治める世では道理が勝ち、愚かな国王が治める世では道理にはずれたことが優先される。そして、智恵や徳望がすぐれた聖人が出現した時代にこそ、法華經の真実義が明らかに、と心得ねばならない。

この二乗が仏になるかならぬかという法門について、法華經の迹門と法華經以前の諸經とを比べると、爾前の諸經の方が優勢のように思われる。もしそうであれば、舍利弗

れる。
須弥山 古代インドの宇宙觀で世界の中心にあるとされる高山。妙高・安明ともいう。「俱舍論」等によると、一辺が八万由旬の周囲三

二万由旬の正方形の山で、高さ十六万由旬のうち、水面上に八万由旬そびえ、水面下に八万由旬が没している。頂上には帝釈天、中腹に四天王が住み、周囲を七つの香海と七つの金山が交互に取り巻き、その外側に塩水をたたえた外海とそれを囲む鉄輪圍山が存在する。外海の中には四方に四州(弗婆提・閻浮提・瞿耶尼・瞿曇越)が浮かび、南にある閻浮提州に人間が住んでいると説かれる。
他方世界 他土ともいい、釈尊の領有である娑婆世界以外の世界をいう。阿弥陀仏の西方極樂淨土や薬師仏の東方淨瑠璃世界など。

迹門 鳩摩羅什訳「法華經」二十八品の内、前半の十四品をいう。後半十四品の本門に対する語。天台智顗は「法華文句」において道生や法雲の因果二門説を整理再考し、「法華經」を本迹二門に分けて文々句々を詳釈した。また、迹門を三つに分け、序品第一を序分、方便品第二から授学無学人記品第九を正宗分、法師品第十から安樂行品第十四を流通分とした。迹門の肝要は開三顯一で、三乗を開會して真実の一仏乘(妙法)を顯すことにある。この一仏乘が説かれて初めて二乗(声聞・緣覺)に成仏の記別が与えられた(二乗作仏)。その二乗には上根・中根・下根の者があり、それに対応して正宗分では法説周・譬説周・因緣周が説かれている(三周説法)。

は永不成仏の者なるべし。いかながな
げかせ給ふらん。

二には、教主釈尊は住劫第九の滅、
人壽百歳の時、師子頰王には孫、淨飯
王には嫡子、童子悉達太子一切義成就
菩薩これなり。

御年十九の御出家、三十成道の世尊、
始め寂滅道場にして実報華王の儀式
を示現して、十玄六相・法界円融・
頓極微妙の大法を説き給ひ、十方の諸
仏も顕現し、一切の菩薩も雲集せり。

をはじめとする二乗たちは永久に成仏できないことになる
だろう。果たして、どれほど彼らは嘆かれるだろうか。

第五章 久遠実成

①諸経不説の久遠実成

二つめは久遠実成である。教主釈尊は、世界の生成から
消滅までを四分した四劫の第三で、この世が成立して、命
ある者が安住している住劫という時期のうち、第九の滅劫
という時代に出世された。滅劫とは人間の寿命が徐々に短
くなる時期であり、それが百歳になった時代に、師子頰王
の孫、淨飯王の嫡子として生を受け、童子の頃の名は悉達
太子、一切義成就菩薩という。

十九歳で出家され、修行を積んで三十歳で成道された釈
尊は、悟りを開いた伽耶城の南にある菩提樹の下で道場で
華嚴経を説き、別円二教の菩薩だけが住む実報土の蓮華藏
世界を現わされた。そして、その世界の教主である毘盧遮那
仏として「十玄門」と「六相円融」の教えを説き、すべて
の存在がそれぞれの立場にありながら、互いに融けあつて
さまたげのない世界のすがたや、極果を得ること速やかな
微妙を極めた偉大なる法を説き明かされた。その時、十方

久遠実成 釈尊が五百塵点劫の譬
喩で示された久遠において成道を
遂げた三身具足の仏であるという
義で、通常のインドの仏陀伽耶の
菩提樹下における釈尊の成道を表
わす伽耶始成・始成正覺に対する
語。「法華經」本門の如来寿量品第
十六の「我れ実には成仏してより已
来、無量無辺百千万億那由他劫な
り」との文で示される法門で、久
成とも略称される。宗祖は久遠実
成を迹門に説かれる二乗作仏と共に
「法華經」の根本義と捉え、同時に
二乗作仏に示される十界互具の
衆生成道も、本門の久遠実成の開
顯によつて長寿の基盤が与えられ
て真実義となるとされた。
四劫 成劫・住劫・壞劫・空劫のこと。
と。仏教の世界観において、世界
が成立し、変化・破滅を経て、空
の状態に帰するまでを四つの期間
に分けたもの。この四劫を絶えず
繰り返すという時間論が「長阿含
經」等に説かれる。
毘盧遮那仏 「華嚴經」の教主。本
来は太陽の意で、仏智の廣大無辺
なさまを象徴した仏。「華嚴經」に
よれば、無量劫海に功徳をおさめ
て正覺を成じた仏で、蓮華藏世界
に住して無量の經典を説いたとさ
れる。「梵網經」では蓮華台世界に
住して千葉百億の釈迦を化現して
菩提の心地法門を説くといひ、「觀
普賢經」では遍一切處の身をもつ
て常寂光土に住すると説かれる。
十玄門 華嚴宗の根本教義で、十
玄・十玄縁起・十玄縁起無碍法門と
もいう。十種類の奥深い不思議な
縁起の意で、事事無碍法界の相を
十方面から説明したもの。あらゆる
現象が時間的にも空間的にも相互
に入り交わり(相入)、少しも妨

土といひ、機といひ、諸仏といひ、始めといひ、何事につけてか大法を秘し給ふべき。されば經文には「顯現自在力演說円満經」等云云。

一部六十卷は一字一点もなく円満經なり。譬へば如意宝珠は一粒も無量珠も共に同じ。一粒も万宝を尽くして雨らし、万珠も万宝を尽くすがごとし。

華嚴經は一字も万字も但同事なるべし。「心仏及衆生」の文は華嚴宗の肝心なるのみならず、法相・三論・真言・天台の肝要とこそ申し候へ。

此等程いみじき御經に何事をか隠す

の諸仏もその場に出現し、すべての菩薩も雲が湧くようにあい集うたのである。

このように華嚴經の説法は、国土といい、聴聞者の機根といい、諸仏が立ち会ったことといい、成道後の最初の説法であることといい、そこにどんな理由があつて、偉大な法を隠しておかれる必要があるか。それゆえ、經文には「仏は自由で不可思議な力をあらわして、完全無欠な經典を演説される」と説かれている。

華嚴經六十卷は一字一点といえども完全な經典である。

たとえば、思いのままに珍宝を取り出すことができる如意宝珠は、一つの珠も無量の珠もその徳用は同じであつて、一つの宝珠も多くの宝物を出し尽くすし、無量の宝珠も同様に多くの宝物を出す。

それと同じく華嚴經も、たとえ一字でも万字でも同じく完全無欠な經典なのである。「心と仏と衆生との三者には差別がない」という經文は、ただ華嚴宗の教えの中心にとどまらず、法相宗・三論宗・真言宗・天台宗でも肝要な教えとされていきます。

これほどすばらしい御經に、一体何を隠す必要があるだ

げなく一体となつて密接に関係し合ひ(相即)、それが物事のありのままの本性にかなつてゐるという法界縁起の深い意味を示したものである。同時具足相応門・広狹自在無碍門・一多相容不同門・諸法相即自在門・隱密顯了俱成門・微細事顯法生解門・因陀羅網境界門・託事顯法生解門・十世隔法異成門・主伴円明具徳門。六相とは、一切の存在が具えてゐる六種のすがたで、総相・別相・同相・異相・成相・壊相の六つをいう。華嚴宗では重要教義として、この六相が一体となつて完全に融合するといふ六相円融の義を立て、諸法は六相を具足し互融無碍といふ無尽法界の縁起を成じると説明される。

機根 衆生の心に内在し、仏の教えを受け入れる能力をいう。如意宝珠 一切の願いが思いのままに叶うといふ不思議な宝の珠で、仏や經典の威徳の大きいことを象徴したもの。如意輪觀音や地藏菩薩などの持物として、衆生の心願を満足させるものとされる。心と仏と衆生 心法・仏法・衆生法の三法。天台智顗はこの「華嚴經」の「心仏及衆生・是三無差別」の文に基づいて、この三法が妙であるといふ三法妙を「法華玄義」卷二上に示した。衆生法は九界、仏法は仏界、心法は心自体あるいは心中の法を指す。心法妙とは衆生の己心を観ずれば一切万法が宛然と具わつてゐること。仏法妙とは十如実相義はただ仏と仏のみ能く覺知すること。衆生法妙とは衆生(九界)の中に仏界が具足してゐること、それぞれを不可思議とした。

べき。なれども二乗・闡提不成仏とと
かれしは珠のきずとみゆる上、三処ま
で始成しじようしやうかく正覺となのらせ給ひて、久遠
実成の寿命品を説きかくさせ給ひき。

珠の破れたると、月に雲のかかれる
と、日の蝕しよくしたるがごとし。不思議
なりしことなり。

阿含・方等・般若・大日経等は仏説
なればいみじき事なれども、華嚴経に
たい(対)すればいうにかいなし。彼の
経に秘せんこと、此等の経々にと(説)
かるべからず。

されば諸阿含経に云く「初め成道」
等云云。大集経に云く「如来成道始め
十六年」等云云。浄名経じやうみやうきやうに云く「始
め仏樹に坐して力めて魔を降す」等云
云。大日経に云く「我、昔道場に坐し

ろうか。けれども、二乗と一闡提いつせんたいは仏に成ることができな
いと説かれたのは、文字通りの「珠のきず」と思われる上
に、三箇所までも「仏ははじめて覺りを開いた」と宣言さ
れて、法華経寿命品に説かれる釈尊の久遠の成道も隠して
説かれなかった。

まるで宝珠が二つに割れ、満月に雲がかかり、太陽が日
蝕になったようで、全く思いがけないことであつた。

天台所立の五時教判で、華嚴経の後に説かれたとされる
阿含部・方等部・般若部の諸経、特に大日経なども、仏が説
かれたのだからすばらしいことは当然だが、華嚴経と比較
した場合は、取り上げていうほどの価値もない。それゆえ、
華嚴経に説かれなかった久遠の成道が、これらの劣つた経
典で明かされるはずもない。

実際、多くの阿含經典には「はじめに成道して」等とあ
り、方等部の大集経には「如来がはじめて成道してから十
六年を経て」等、同じく維摩経ゆいまきやうには「はじめ菩提樹の下に
坐つて、禪定の力で魔を退治した」等、また同じく大日経
には「私は昔、道場に坐して」等といい、般若部の仁王経

寿命品「法華経」卷六・如来寿量
品第十六のこと。「法華経」本門の
正宗分として、釈尊の寿命が久遠
無量である旨が説かれている。前
品の從地涌出品で末代弘経のため
に大地より涌出した地涌の諸菩薩
について、弥勒菩薩が仏は成道以
来四十年少時にいかにしてこの
ような無量の大菩薩衆を教化しえ
たのかと問ひ、それに対する答え
として本品の大事が説かれた。三
誠三請重請重誠の儀式をもつて説
法は始められ、みづからの四十余
年前に伽耶城の近辺で始めて成道
したという義を否定して、五百塵
点の譬喩をもつて成仏以来の久遠
無量たることを説き、その久遠以
来常に娑婆世界等にあつて衆生を
教化してきたことや、仏は實には
滅度せず久遠常住の存在である
ことを明かしている。その譬喩と
して医師の譬え(法華七喻の第七)
が見え、最後に「自我偈」を説いて
仏身の常住を重説し、その上に国
土の常住をも明かしている。
五時教判 天台智顗が釈尊一代の
説教を五つの時に分類したもので
で、「天台四教儀」などに見える。
華嚴・阿含・方等・般若・法華涅槃の
五時で、前四時の内容としてそれ
ぞれ二乗に対する擬宜・誘引・彈呵
・淘汰が示され、これらの調熟を
経て第五時の法華涅槃時で実義が
正説されたと説明される。
大日経 七卷。正称は「大毘盧遮
那成佛神變加持經」で、唐の善無
畏が開元十三年(725)に訳出した。
「金剛頂經」「蘇悉地經」と共に真言
三部經とされる。七世紀中葉に西
インドで成立したと言われ、胎藏
法を説き、これに基づいて胎藏界
曼荼羅が作成される。

て」等云云。仁王般若經に云く「二

十九年」等云云。此等は言ふにたらず。

只耳目ををどろかす事は、無量義經

に華嚴經の唯心法界、方等般若經の海印三昧・混同無二等の大法をかきあげて、或るいは未顕眞実、或るいは歴劫修行等下す程の御經に、

「我、先に道場菩提樹下に端坐すること六年にして、阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり」と初成道の華嚴經の始成の文に同ぜられし、不思議と打ち思ふところに、此れは法華經の序分なれば正宗の事をばいわずもあるべし。

法華經の正宗、略開三・広開三の御時、「唯仏与仏乃能究尽諸法実相等」、「世尊法久後」等、「正直捨方便」等、多宝仏、迹門八品を指して「皆是

には「二十九年、摩訶般若波羅蜜をお説きになった」などとあり、一ように始成正覺が説かれている。

ただ驚くことには、法華經の開經である無量義經は、華嚴經の唯心法界の法門や大方等大集經の海印三昧の法門、また般若經の混同無二の法門などの勝れた法門を列挙して、これらは「いまだ眞実を顕わにしていな」とか、「長い間の修行でようやく成仏する歴劫修行」に過ぎないとか述べて、みずからの正しさを誇るほどの經典であるのに、

「私はかつて伽耶城の菩提樹下の道場で六年間端坐して、この上なき覺りを成就した」と述べて、華嚴經の「仏ははじめて覺りを開いた」という經文と同じく始成正覺を説いていることが、何とも不思議でならない。所詮、無量義經は法華經の序論であるから、本論の内容には触れないということもあるのだろう。

その法華經の本論に入り、迹門の方便品には「ただ仏だけがよく諸法の実相をきわめ尽くされる」とか、「仏は長い間に方便の教えを説いた後に、必ず眞実の教えを説くであらう」とか、「正直に方便の權教を捨てて実教を説く」と説

始成正覺「始めて正覺を成ず」と読む。インドに應誕した釈尊が三十歳の時にはじめて菩提樹の下で正覺(悟り)を得たことをいう。

唯心法界 華嚴經の基本的な教理で、あらゆる存在がただ心によつてのみ存在するという義。

海印三昧 釈尊が「華嚴經」等を説いた時に入つたとされる三昧(定)の名。海印定とも称し、風波が静かな時の大海に一切の事物の像が海面に映るように、悟りを得た仏の心に三世の一切諸法が現ずることを表現したものの。

混同無二 一切の差別を空に混入し同化して一にすること。「般若經」の空思想を表現したもので、諸法は因縁生であるから、本来の自性は存在せずに無差別であるという義。

歴劫修行 きわめて長い時間をかけて仏道修行すること。爾前諸經に説かれる義で、「法華經」等の円教に説かれる即身成仏・速疾頓成に対する語である。

方便品 「法華經」方便品第二のこと。迹門正宗分の中核をなす章である。最初に仏智の内容として諸法の実相である十如是が示され、三止三請の儀式の後に五千人の増上慢が退席した。次で三乗の法は一乘眞実の法のための方便であると宣言され、諸仏が世に出現するのは一切衆生を仏の知見に開く・悟・入せしめる一大事因縁のためであり、衆生が修行すべきが、この一仏乘の教法であること、はじめに三乘方便の教えを説いて後に一乘眞実の法を説示することは三世十方諸仏の説法の儀式であると述べて、開權顯実・開三顯一の義が明かされている。

「真実」と証明せられしに、何事をか隠すべき。

なれども久遠寿命をば秘せさせ給ひて、「我、始め道場に坐し、樹を觀じて、亦經行す」等云云。最第一の大不思議なり。

されば弥勒菩薩、涌出品に四十余年の未見今見の大菩薩を仏、「爾して乃ち之れを教化して初めて道心を發さしむ」等ととかせ給ひしを、疑つて云く、

「如来、太子為りし時、釈の宮を出でて伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たまへり。是れより已來始めて四十余年を過ぎたり。世尊、云何ぞ此の少時に於て大いに仏事を作したま

き、多宝如来も迹門の方便品から授學無學人記品までの八品を指して、「釈尊の説くところは、みな真実である」と証明なさつたのだから、一体ここで何事を隠すことがあろう。それなのに、やはり久遠の寿命はお隠しになつて、「私ははじめ道場に坐して菩提樹を觀じ、またその周囲を歩き廻つた」等と語られたのは、最大の不思議であつた。

②久遠実成の明文

それゆえ、法華經以前の四十余年の間には見たこともない立派な大菩薩たちが、從地涌出品の説法の会座に突如として大地の下より現われ、釈尊が「私がこれらの菩薩たちを教化して、はじめて菩提心を起こさせた」などと説かれた時、不可解に思つた弥勒菩薩は次のように申し上げた。

「釈尊は、いまだ悉達太子であられた時に釈迦族の宮殿を出られ、伽耶城にほど近い菩提樹の下で道場に坐して無上の覺りを得られました。それからたつた四十余年が経過したに過ぎません。その短い時間の中で、釈尊はどうしてこれほどの大菩薩たちを教化されたのでしょうか」と。

授學無學人記品 「法華經」授學無學人記品第九。迹門・正宗分の最後で、三周説法（法説周・譬説周・因縁周）の内の因縁周の授記段にあたる。下根の聲聞である阿難や羅睺羅（羅云）をはじめとする學無學の聲聞一千人の授記が説かれている。「學無學」の「學」とは、いまだ煩惱を断ぜず真理を修學してゐる者の意で、四果（預流果・一來果・不還果・阿羅漢果）の内の前三果の人を指す。「無學」とは煩惱をすべて断じ尽くし、この上に學ぶものがない者で、阿羅漢果の聲聞をいう。

從地涌出品 「法華經」從地涌出品第十五で、本品から本門に入る。本品の前半が本門の序分となり、略開近顯遠を説く後半から次の壽量品・分別功德品前半に至る一品二半が本門の正宗分を構成する。最初に娑婆世界の滅後弘經を願ひ出した他方の菩薩を「止善男子」と制止した釈尊の言葉に応じて、上行等の四菩薩を上首とする六万恒河沙の菩薩たちが大地から涌出した。上首の四菩薩が仏を問訊したが、会座の菩薩たちは未見の大菩薩衆の出現に驚き、弥勒菩薩が一同を代表して地涌出現の因縁を尋ねた。以上が本門の序分である。次いで仏は弥勒に、地涌の菩薩たちには無數劫の昔から自分が教化してきたと明かしたが、弥勒は成道以來わずか四十余年の少時にいかにして無量の大菩薩を教化されたのかと再問した。これに對して仏が直接答えたのが、次品の如来壽量品の「開近顯遠である」。

弥勒菩薩 慈氏・阿逸多とも稱す。未來に釈尊の次の仏位を継ぐとされる菩薩で、大小乗の諸經典に数

へる」等云云。

教主釈尊、此等の疑ひを晴らさんか
ために、寿量品をとんとんとして、爾前
迹門しやくもんのきき（所聞）を挙げて云く「一
切世間の天人及び阿修羅は、皆今の釈
迦牟尼むには釈氏の宮を出でて伽耶城を
去ること遠からず、道場に坐して阿耨
多羅三藐三菩提を得たまへりと謂へ
り」等云云。

正しく此の疑ひに答へて云く「然る
に善男子、我、実に成仏してより已来、
無量無辺百千万億那由他劫なり」等云
云。

華嚴乃至般若・大日經等は二乗作仏
を隠すのみならず、久遠実成を説きか
くさせ給へり。

教主釈尊は、このような疑惑を晴らすために、如来の
寿量の本當のすがたを説き明かそうと決意された。そこで、
まずこれまでの爾前經および法華經迹門の聴衆の理解につ
いて、「すべての世間の人々はみな、今の釈尊は釈迦族の宮
殿を出て、四十余年前に伽耶城にほど近い菩提樹下の道場
に坐してはじめて覺りを開かれたと思つてゐる」と述べら
れた。

そして、右の疑惑にまさしく次のように答えられた。「と
ころが、良家の子息たちよ、私が実に仏道を成就してから
無量無辺百千万億那由他劫という無限の時間が経過してい
る」と。

③久遠実成と眞實の一念三千

天台所立の五時教判の第一・華嚴部から第四・般若部に至
るまでの大日經等の諸經では、釈尊は声聞・緣覺の二乗の成
仏を許さなかつたばかりか、みずから無限の過去に成道
を遂げ、それ已来絶え間なく衆生を教化しつづけていると
いう久遠実成の義も説き明かされなかつた。

多く登場する。「弥勒下生經」や「觀
弥勒菩薩上生兜率天經」等による
と、弥勒菩薩は現在に兜率天の内
院で天人のために説法・教化して
いるが、釈尊の入滅から五六億七
千万年の後に娑婆世界に下生して
童華樹の下で成仏し、三会にわた
つて法を説き、釈迦の說法にもれ
た衆生を済度する（「法華三昧」）とい
う。釈尊のあとを補う未來仏であ
るところから「一生補處の菩薩」と
も呼ばれ、弥勒仏とも称する。イ
ンドでは紀元前後からこの世の救
世主として弥勒菩薩の下生を願う
弥勒信仰や、兜率天に生まれて下
生の時まで弥勒菩薩のもとで修行
しようとする願う兜率願生などの信仰
が盛んになり、唯識學派の無着も
禪定に入つて兜率天の弥勒に会
い、唯識の奥義を授けられたと伝
えられる。

教主釈尊 教主は教化の主で、教
法を説示する仏を指し、仏教は基
本的にはすべて釈尊の説いたもの
であるから、釈尊をもつて教主と
する。特に、宗祖は主・師・親の三
徳を兼備する釈尊の意を含めて
「教主釈尊」の成語を多用するが、
最終的には「法華經」本門に説かれ
る久遠実成の釈尊を指す。

伽耶城 伽耶は梵語・ガヤーの音
写で、城は都城の意。中インドの
マカダ国の都城で、現在のインド
北東部ビハール州パトナ市の南約
百キロにあるガヤ県の果都ガヤに
あたる。隣接する釈尊成道の地・
ブッダガヤー（仏陀伽耶）に対して
ブラフマ・ガヤーと称される。

那由陀劫 那由陀はインドにおけ
る数量の単位を表す語。普通は一
千億とされるが、十万や一億など

此等の経々に二つの失あり。一には「行布ぎょうふを存する故に仍なお未だ権を開せず」、迹門の一念三千いちねんさんぜんをかくせり。二には「始成を言ふ故に曾かつて尚未だ迹を發せず」、本門の久遠をかくせり。

此等の二つの大法は、一代の綱骨、一切経の心髓しんずいなり。迹門方便品は一念三千・二乗作仏を説いて爾前二種の失一つを脱のがれたり。

しかりといえどもいまだ発迹顯本はつしやくけんほんせざれば、まことの一念三千もあらはれず、二乗作仏も定まらず。水中の月を見るがごとし、根なし草の波の上に浮かべるににたり。

これらの爾前諸経にある二つの過失について、妙樂大師は次のように述べている。一つは「差別や次第を重んじて平等や円融えんゆうを説かないために、權教と実教の差別を打ち破つて平等にすることができない」と。十界の互具・円融がなく、迹門の一念三千も成立しないので、二乗作仏も決して許されない。もう一つは「専ら積尊は菩提樹下ではじめて成道されたと説くので、始成の垂迹身すいじやくしんを開いて久遠の本地身ほんぢしんを明かすことができない」と。本門に説かれる積尊の久遠実成も隠れたままである。

この二つの偉大なる法門は、積尊一代の教えの大綱および骨子であり、すべての經典の中心である。法華経迹門の方便品では一念三千の法門の基礎が説かれ、それに基づき二乗作仏の義が許されたので、爾前経の二つの失点のうち、一つが解消された。

しかし、いまだ始成の垂迹身を開いて久遠の本地身が顕わされていないので、一念三千もその真実の意義は成就せず、それゆえやつと許された二乗作仏も、非常に不安定なままである。まるで水面に映った月の影を見るようであり、根無し草が波の上に漂う姿に似ている。

の諸説もある。劫はきわめて長い時間のことで、インドにおける時間の単位でもっとも長いもの。一般に、天人が方四十里の巨石を薄衣で百年に一度払い、石が摩滅しても終わらない長い時間といい、また方四十里の城に芥子を満たして、百年に一度一粒ずつ取り去り、芥子はなくなっても終わらない長い時間という。

迹門の一念三千「法華経」迹門に説かれる一念三千のことで、本門の一念三千に対する語。一念三千は、天台智顗が「法華経」方便品の十如実相等に基づいて「摩訶止観」卷五に説き示した義であるが、迹門ではあくまでも衆生心内具の理として説かれるところから理の一念三千と称される。また、迹門では本門の久遠実成が説かれず、それゆえ真実の仏界が定まらないゆえに未完成の一念三千であると断じられる。これに対して、本門の一念三千は本門の因・果・国の三妙合論の上に成立した一念三千なるゆえに、一切衆生成仏の仏種と規定される。「治病大小権実異目」には「彼れは迹門の一念三千、此れは本門の一念三千なり。天地はるかに殊なりことなり」とその違目が明示されている。

垂迹身 本体である本地の仏・菩薩が衆生を利益するために、仮りに姿をかえて現わした種々の身のこと。

本地身 衆生利益を目的とした垂迹身に対して、その根本の仏・菩薩の真実の身をいう。主に、「法華経」如来寿量品第十六で開顯された久遠実成の本地仏をいう。

本門にいたりて、始成正覺をやぶれば、四教の果をやぶる。四教の果をやぶれば、四教の因やぶれぬ。

爾前迹門の十界の因果を打ちやぶて、本門の十界の因果をとき顯はす。此れ即ち本因本果の法門なり。

九界も無始の仏界に具し、仏界も無始の九界に備はりて、眞の十界互具・百界千如・一念三千なるべし。

かうてかへりみれば、華嚴經の台上十方、阿含經の小釈迦、方等・般若の、金光明經の、阿弥陀經の、大日經等の權仏等は、此の寿量の仏の天月しばらく影を大小の器にして浮かべ給ふを、

それが、本門の寿量品に至つて久遠実成の本地身が明かされ、インドの菩提樹下で覺りを開いた釈尊は垂迹身と下されたので、それまでの藏教・通教・別教・円教の仏果は実体のない虚妄の果徳となった。仏果が虚妄であれば、その仏果に至る修行の道筋たる九界の因行も否定される。

このように、爾前の諸經および法華經迹門に説かれた十界の因果はことごとく否定されて、久遠の本地に基づいた本門の十界の因果が新たに説き明かされた。これが本因・本果の法門である。

地獄から菩薩に至る九界も永遠の仏界に包まれ、仏界もまた永遠の九界に備わつて、眞実の十界互具・百界千如・一念三千の法門がここに成就した。

④久遠実成の難信

さて、ふりかえつて見ると、蓮華台上で華嚴經を説く毘盧遮那仏や阿含經を説く一丈六尺の釈迦仏、方等部・般若部の金光明經や阿弥陀經や大日經などの仏は、いずれも寿量品の本地仏が仮りに姿を現した垂迹の仏であつて、天空の月が一時、大小の器の水面にその影を浮かべたさまと同じであるのに、

本因・本果の法門 本因・本果とは、久遠本仏の因行と果徳のこと。本抄の当該部分には、爾前迹門の釈尊はあくまでもインドに應誕して八十歳で入滅した仏であつたが、「法華經」寿量品に至つて実は久遠五百塵点劫の昔に成仏を遂げた古仏である旨が明かされて本来の仏果（本果）が示され、自動的に仏因である成仏の因行や仏界に対する九界も本来の無始のすがた（本因）を与えられて、ここに眞の十界互具および事の一念三千が成立したと説明されている。宗祖の「観心本尊抄」には、末法の衆生は事の一念三千の珠を包み込んだ妙法蓮華經の五字七字を受持することにより、仏因仏果を譲与されて成仏すると説かれるので、この本因本果の法門は凡夫成道の力ぎを握る重要な法門である。

十界互具 十界（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天・声聞・縁覺・菩薩・仏）のそれぞれに他の十界が具わつてゐるという義。これは「法華經」の開會思想に基づいて成立した義であるが、これにより地獄の衆生も仏となり得るし、仏も性として煩惱をそなえることが明かされた。

百界千如 「法華玄義」卷二等に諸法の具体相として説かれる義で、十界それぞれが互いに十界を具するとして百界を数え、その百界のそれぞれに十如是が具わつて千如となるもの。天台宗における觀心の対象として説示される義で、十界各別を説く爾前の諸經に対し、「法華經」に至つて十界互具・百界千如が初めて説かれた。百界千如と一念三千との關係は、「法華經」迹門ではいまだ国土世間が明かされず、それゆゑに百界千如に止ま

諸宗の学者等、近くは自宗に迷ひ、

遠くは法華經の寿量品をしらず、水中の月に実月の想ひをなし、或るいは入りて取らんとをもひ、或るいは繩をつけてつなぎとどめんとす。天台云く「天月を識らず、但池月を觀ず」等云云。

日蓮案じて云く、二乗作仏すら猶爾前づよにをぼゆ。久遠実成は又なるべくもなき爾前づりなり。

其の故は、爾前法華相對するに、猶爾前こわき上、爾前のみならず迹門十四品も一向に爾前に同ず。本門十四品も涌出・寿量の二品を除きては、皆始成を存せり。

双林最後の大般涅槃經四十卷、其の

諸宗の学者たちは、近くは自分の宗旨の成り立ちに暗く、

遠くは法華經の如来寿量品の説示を知らないために、水面に浮かんだ月影を本当の月だと思い込み、はては水に入つて月影を取り押さえようとしたり、繩でしばつてつなぎとめようとする。天台大師はそのさまを、「彼らは天に浮かぶ月を知らずに、ただ池に映つた月を本物の月と見ている」と述べている。

日蓮が心配することは、法華經の迹門に説かれる二乗作仏でさえ、それを否定する爾前經の方が優勢だと思われることだ。ましてや、法華經の本門に明かされる久遠実成の場合は、それ以上に爾前經の方に分があると思われるに違いない。

それは、法華經以前の爾前經と法華經とは爾前經の方が断然優勢な上に、法華經迹門の十四品も同じように久遠実成を説かない。さらに、本門の十四品でも、從地涌出品と如来寿量品の二品以外もみな、釈尊がインドの菩提樹下ではじめて覺りを得たという始成正覺を前提として説かれている。

釈尊が入滅直前に沙羅双樹の林で説かれた涅槃經四十卷

り有情界に限定されるが、本門に至つて国土世間が明かされて一念三千が整足し、それに基づく成仏義も無情界にも及ぶとされる。蓮華台上 千葉の大蓮華より成る蓮華藏世界では、千葉の「一々の葉」(二世界)に百億の須弥山・四天下・南閻浮提などがあり、毘盧遮那仏はその本源として蓮華台の上に安座して、「華嚴經」を説くといふ。また、同時にみづからの身を変化させて千体の釈迦となつて一々の葉上に居り、さらにその千釈迦は百億の菩薩釈迦となつて各南閻浮提の菩提樹下に坐して菩薩の心地法門を説くといふ。

一丈六尺 化身仏・応身仏の身長で、釈迦の在世の身長は八尺あつたといわれ、仏の特相を表すために、その二倍の身長としたもの。丈六とも略称される。

沙羅双樹 同一の根から生じた一雙(二株)の沙羅樹のこと。沙羅樹はインド北部原産のフタバガキ科の常緑高木で、幹は高さ三十げに達し、材質は固く、建築材などに用いられる。釈尊は中インドの拘尸那城近くの沙羅林において八十才で入滅した。その際、沙羅双樹の間に頭を北に向け、右脇を下にして足を重ねて臥したという。臥床の四辺にあつた八本の沙羅双樹はその入滅を悲しみ、一雙の各一本ずつが枯れたという。これを四枯四榮といふ。

法身 三身の一つで、法性の理体の意。無始無終・非因非果の真理としての仏ゆゑ、常住である。応身と報身 法身と合わせて三身と称す。応身とは境智冥合の後の

外の法華前後の諸大乘經に、一字一句もなく、法身の無始無終はとけども、応身・報身の顯本はとかれず。

いかにが広博の爾前・本迹・涅槃等の諸大乘經をばすて、但涌出・寿量の二品には付くべき。

されば法相宗と申す宗は、西天の仏滅後九百年に無著菩薩と申す大論師有しき。夜は都率の内院にのぼり、弥勒菩薩に對面して一代聖教の不審をひらき、昼は阿輸舍国にして法相の法門を弘め給ふ。

彼の御弟子は世親・護法・難陀・戒賢等の大論師なり。戒日大王、頭をかたづけ、五天、幢を倒して此れに帰依す。

尸那国の玄奘三藏、月氏にいたり

をはじめ、法華經の前後に説かれたすべての大乘經典には、法性の理体である法身の常住は説かれるが、事成の応身と報身の久遠の本地については一字一句も明かされていない。

このように考えたならば、爾前經と法華經の迹門と本門の大部分、そして涅槃經など多くの大乘經典の圧倒的に広い經説をなげうって、從地涌出品と如来寿量品というたった二章の説示にどうして従えようか。

⑤ 法相宗と二乗作仏

それゆえ、法相宗についていえば、インドで釈尊が入滅されて九百年後に無著菩薩という大論師が出られた。夜は弥勒菩薩の浄土である都率天の内院に昇り、弥勒より教示を受けて釈尊の教えに関する疑問を解決し、昼間は阿輸舍国で法相宗の教えを弘められた。

そのお弟子に世親(天親)・護法・難陀・戒賢らの大論師があったので、北インドの盟主であった戒日大王は深くその教えを信敬し、全インドの異教の者たちもみな振り上げた旗を降ろして帰依した。

中国の玄奘三藏はその頃インドに渡り、十七年間、イン

衆生に慈悲を施す力用を指し、また衆生救済のために応現した仏身をいう。基本的には有始有終の存在。報身とは真理を体得する仏の能証の智慧で、またその智慧を体得した仏身をいう。因果を具備し、基本的には有始無終の存在。

無著菩薩 四世紀および五世紀頃のインド大乘仏教における唯識学派(瑜伽行派)の大成者。三人兄弟の長兄で、次弟が世親(天親)である。はじめは小乗の説一切有部で出家したが、弥勒(マイトレーヤ)から大乘の空思想や瑜伽行唯識説を授けられて大乘仏教に転向し、その弥勒菩薩の教説を「瑜伽師地論」「中辺分別論」等の論書にまとめて世に流布したと伝えられる。

都率天 欲界六天の内の第四天。夜摩天と樂變化天の中間にして、須弥山の頂上二十四万由旬の高所にあるとされる。この天の内院は将来に仏となるべき菩薩の住処とされ、現在は弥勒菩薩が説法していと説かれる。

護法 インド唯識派の学僧で、唯識十大論師の一人。出家して若年にてナーランダー寺の学頭となり、三十二歳で逝去した。その学説は天親の「唯識三十頌」を注釈した「成唯識論」によつて知られる。難陀 六世紀頃の唯識十大論師の一人。安恵や淨月と同時代の人で、世親の「唯識三十頌」を釈したとされるが、現存しない。

戒賢 七世紀中頃のインド中期唯識派の学僧。六三六年にナーランダー寺に留学した玄奘に瑜伽唯識学を伝授した。

戒日大王 七世紀前半のインドのターネーサル王國ブシャブティ王家第六代の王・ハルシャヴァル

て十七年、印度百三十余の国々を見きて、諸宗をばふりすて、此の宗を漢土にわたして、太宗皇帝と申す賢王にさづけ給ひ、肪・尚・光・基を弟子として、大慈恩寺並びに三百六十余箇国に弘め給ふ。

日本国には人王三十七代孝徳天皇の御宇に、道慈・道昭等ならひわたし山階寺にあがめ給へり。三国第一の宗なるべし。

此の宗の云く、始め華嚴經より終り法華・涅槃經にいたるまで、無性有情と決定性の二乗は永く仏になるべからず。

仏語に二言なし。一度永不成仏と定め給ひぬる上は、日月は地に落ち給ふとも、大地は反覆すとも、永く変改有るべからず。

ドの百三十余りの国々を遍歴・見聞して、仏法を求めた。その結果、諸宗の中から法相宗を選び取つて中国の地に伝え、唐の太宗皇帝という賢明な国王にこの教えを授け、神肪・嘉尚・普光・窺基(慈恩大師)を弟子として養成し、大慈恩寺に住して広く三百六十余カ国に法相の教えを弘通された。

日本国へは、第三十七代の孝徳天皇の御代に、道慈や道昭らが法相宗を学び伝え、山階の地に創建された興福寺にて尊崇された。このように、インド・中国・日本の三国においては第一の宗であろう。

この法相宗では次のように主張する。「最初の華嚴經から最後の法華經および涅槃經に至るまでの一切の經典において、本より仏性を身にそなえない無性有情と、本より二乗の境界を得ることが決まっている決定性の二乗は、決して成仏できない。

仏の言葉に二言はない。一度、永久に成仏しないと決められたからには、たとえ日天や月天が大地に落ちられても、大地がひっくり返ろうとも、決して改められることはない。

ダナ(在位 606〜647年)のこと。喜増王と訳し、戒日はその称号。カニヤークブジャ(曲女城)を都として、デカン高原以北のインドのほぼ全域を支配し、グプタ王朝以後の分裂状態を統一した。詩人としても名高い。

太宗皇帝 598〜649。中国・唐の第二代皇帝。高祖・李淵の次子で、名は世民。生來資質にすぐれ、隋末の乱世を父王とよく戦い、唐朝の実質的な建国者となった。内治・外征によく努め、その善政は後世に「貞観の治」と呼ばれて、史上最大の国威を示した。

神肪 新羅の人で、玄奘の弟子。はじめ法海寺に住して大小乗の經論に通じたが、貞観十九年(645)に玄奘が弘福寺で經經を始めた時に証義を務め、以来玄奘門下の俊英として師の訳場に列した。

嘉尚 中国・唐代の法相宗の僧。慈恩寺に住して尚法師と通称された。玄奘の弟子として「大般若經」の翻訳等に從事した。

普光 玄奘の四上足の一人で、中国・唐代の俱舍学者。大乗光と称す。玄奘の經經の筆受を務め、永徽五年(655)玄奘が「俱舍論」を訳した時には、同論を注解して「俱舍論記」三十巻を撰述した。

大慈恩寺 中国・唐の都・長安(陝西・西安府)にあった大寺院で、貞観二十二年(650)に皇太子・治(後の高宗)が母の慈恩に報いるために建てたもの。

道慈 三論宗・大安寺流の祖。幼少に出家し、法隆寺の智蔵に三論を、竜門寺の義淵に法相を就学した。大宝元年(702)に入唐し、吉蔵の法孫・元康に三論を、

されば法華經・涅槃經の中にも、爾前の経々に嫌ひし無性有情・決定性を正しくついさして成仏すとはとかれず。

まづ眼を閉じて案ぜよ。法華經・涅槃經に決定性・無性有情、正しく仏になるならば、無著・世親ほどの大論師、玄奘・慈恩ほどの三藏人師、これをみざるべしや。此れをのせざるべしや。これを信じて伝へざるべしや。弥勒菩薩に問ひたてまつらざるべしや。

汝は法華經の文に依るやうなれども、天台・妙楽・伝教の僻見を信受して其の見をもつて経文をみるゆえに、爾前に法華經は水火なりと見るなり。

華嚴宗と真言宗は法相・三論にはに

だから、法華經や涅槃經の中でも、法華經以前の諸經で成仏しないと嫌われた無性有情と決定性の二乗を、直接名指した上で仏に成るとは説かれていない。

ともかく、眼を閉じて深く考えてみよ。もし法華經や涅槃經で、本より二乗の境界を得ることが決まっている者と、本より仏性を身にそなえない者が間違ひなく仏に成るならば、インドの世親(天親)や無著のような偉大な論師や、中国の玄奘三藏や慈恩大師という高僧が、これを見ないことがあるうか。見ながら、それを書きとめないことがあるうか。また、どうして信じて伝えないのだろうか。夜ごとに都率天に昇ったという無著が、弥勒菩薩にそれを尋ね申し上げないはずもないのである。

汝は法華經の経文に依っているように見えるが、実は天台や妙楽・伝教のあやまった見方を信じて、それに基づいて経文を見るから、法華經以前の諸經と法華經との所説の間には水と火のような違いがあると思うのだ」と。

⑥華嚴・真言両宗と久遠実成

華嚴宗と真言宗の者は、次のように主張する。「わが宗は、

善無畏から密教を教示された。帰朝後は、聖武天皇の要請で大安寺に住して三論宗を弘宣した。道昭(29-78)。日本法相宗の初伝。出家して元興寺に入り、白雉四年(653)に勅命により入唐した。大慈恩寺で玄奘に師事して、窺基と共に法相唯識を受学し、また禪学も伝えて、在唐八年後に帰国して元興寺に禪院を建立した。興福寺、奈良市にある法相宗の大本山で、南都七大寺の一つ。天智天皇八年(669)に藤原鎌足の夫人鏡女王が、山城国に山階寺を創建したのに始まる。後に天武天皇元年(672)に飛鳥の地に移して扁坂寺(うまやさかでら)と呼ばれた。和銅三年(710)の平城京遷都に伴い、鎌足の子・不比等が現在地に移して現名に改めた。以後、藤原氏の氏寺として栄えた。日天。日天子といい、三光天子の一。太陽を神格化した神で、日宮殿(太陽のこと)に住み、帝釈天の内臣といい、観音菩薩・大日如来の化身ともされる。月天。月天子といい、三光天子の一。月を神格化した天子で、名月天子とも呼ばれる。

無性有情 法相教学で立てる五性の一で、悟りを開く素質(仏性)を持たない者のこと。声聞・縁覚・菩薩の三乗になるべき種子をもたない有情で、無性種姓ともいう。決定性の二乗 定性声聞・定性縁覚のこと。法相教学で立てる五性説において、声聞と縁覚の二乗になることが決まっている種姓であり、それゆえ仏に成ることはできないとされる。

るべくもなき超過の宗なり。二乗作仏・久遠実成は法華經に限らず、華嚴經・大日經に分明なり。

華嚴宗の杜順・智儼・法藏・澄観、真言宗の善無畏・金剛智・不空等は、天台・伝教にはなるべくもなき高位の人、其の上、善無畏等は日如来より糸みだれざる相承あり。此等の権化の人、いかでか誤りあるべき。

随つて華嚴經には「或るいは釈迦仏道を成じ已りて不可思議劫を経るを見る」等云云。大日經には「我は一切の本初なり」等云云。

何ぞ但久遠実成、寿命品に限らん。譬へば井底の蝦が大海を見ず、山左が洛中をしらざるがごとし。汝、但寿命の一品を見て、華嚴・大日經等の諸經をしらざるか。

法相宗や三論宗とは比べようもなく、はるかに勝れた宗旨である。二乗作仏や久遠実成のという法門は法華經だけに限られた教えではなく、華嚴經や大日經にも明らかに説かれていた。

華嚴宗の杜順・智儼・法藏・澄観や、真言宗の善無畏・金剛智・不空らの祖師たちは、天台や伝教とは比較にならないほど位も高く、その上、善無畏三藏らは日如来から正統な相承を受け継いでいる。これらの祖師たちは、みな衆生教化のために仏が仮りに現われた権化なのだから、どうして誤りなどあろうか。

だから、華嚴經には『あるいは、釈尊が覺りを得てから計ることができないくらい長い時間が経過したのを見る』等とあり、大日經には『私・日如来はすべての根本であり、最初である』等と見える。

どうして、久遠実成の法門はただ法華經の如来寿命品だけに限られようか。たとえば、井戸の底にいる蛙が大きな海を見ず、山に住む木樵が都のにぎわいを知らないようなもので、汝はただ如来寿命品を見るだけで、華嚴經や大日經などの多くの經典を知らないのではないか。

杜順 527 ~ 600。中国華嚴宗の初祖で、法順・帝心尊者ともいう。十八歳で出家して因聖寺の僧珍に師事して禪を学び、後に終南山に住して華嚴を宣揚し、数々の奇瑞を現じて唐の太宗の帰依を受けた。「華嚴法界觀門」一巻の著作が伝えられるが、疑問視されている。智儼 602 ~ 666。中国華嚴宗の第二祖で、至相大師・雲華尊者という。十二歳で杜順に入弟子し、後に出家して撰大乗論や四分律・毘曇・成実・涅槃等を修学した。至相寺の智正に「華嚴經」を學んで別教一乘の教法を會得し、二十七歳で六相円融の旨を解して「華嚴經搜玄記」五巻を撰述した。以後は至相寺・雲華寺等で華嚴を弘め、總章元年に清浄寺に寂した。法藏 643 ~ 712。中国・唐代に活躍した華嚴宗第三祖で、華嚴教學の大成者。字は賢首。長安に生まれ、十七歳で太白山にて經論を學び、後に雲華寺の智儼に師事して「華嚴經」を受講した。咸亨元年(700)勅命により出家して太原寺に住し、同寺や雲華寺で「華嚴經」を講じた。玄奘・日照・実夷・難陀などの訳經にも参加し、則天武后に重用された。著書に「華嚴經探玄記」「華嚴五教章」などがある。澄観 738 ~ 839。中国華嚴宗の第四祖。字は大休で、清凉国師・華嚴菩薩と呼ばれる。十一歳で出家し、曇一に南山律を、玄璧・惠量に三論を、法藏に華嚴をそれぞれ就學し、又湛然から天台を、道欽・惟忠等からは南宗禪を受學した。大暦十一年(776)に五台山に登り、大華嚴寺(清凉寺)に住して「華嚴經」を講じて述作に努めた。「華嚴經疏」二十卷・「随疏演義抄」

其の上、月氏・戸那・新羅・百濟等にも一同に、二乗作仏・久遠実成は法華經に限るといふか。

されば八箇年の經は四十余年の經々には相違せりというとも、先判後判の中には後判につくべしというとも、猶爾前づりにこそをばうれ。

又但在世計りならばさもあるべきに、滅後に居せる論師人師、多くは爾前づりにこそ候へ。

かう法華經は信じがたき上、世もやうやく末になれば、聖賢はやうやくかくれ、迷者はやうやく多し。

世間の浅き事すら猶あやまりやすし。何に況や、出世の深法誤りなか

しかも、インドや中国、新羅国や百濟国などでもすべての者がみな、二乗作仏と久遠実成は法華經だけが説く法門だと本当に認めているのか」と。

⑦ 仏滅後の宗教的混乱

このような諸宗の異見がある限り、釈尊が晩年の八年間に説かれた法華經とそれ以前の四十数年間の諸經とでは、その内容に雲泥の相違があるといつても、また一般社会の法制に基づいて、前に発行した証文と後から訂正した証文とでは、後の証文を用いるのが当然だと主張しても、それでもまだ法華經以前の諸經の方が優勢のように思われる。

また、それが釈尊の在世中であれば、信じがたい中にも法華經を用いることもあろうが、仏滅後に出世したインドや中国の碩学の多くは、爾前經の所説こそを拠りどころとしている。

このように法華經が信じがたい經典である上に、時代が徐々に衰えてくると、聖人や賢人は世に出なくなり、正しい判断ができない人々が次第に多くなる。

その結果、一般世間のつまらない事ですら間違ひやすい。ましてや、仏法の深い義理を誤りなく理解することなどで

四十卷等の著作がある。

不空 750-810。真言宗付法の第六祖。開元八年(720)に唐の洛陽で金剛智の弟子となり、その没後セイロンに渡って童智に両部の秘法を学んだ。天宝五年(756)に密教經典を携えて海路で中国に帰り、玄宗皇帝の帰依と外護を受け、淨影寺・保壽寺・開元寺・大興善寺等に住して密教を弘通した。また、「金剛頂經」や「仏母大孔雀明王經」など百余部を訳し、四大翻訳家の一人に数えられる。

大日如来 真言密教の教主で、本尊として尊崇される仏。智恵の光が日光のようにあらゆる場所に行きわたるところからの名称で、密教經典には一切の諸仏菩薩の本地にして、さらに一切万有に遍在する法身仏と説かれる。これに本地法身と加持受用身とに分け、法身は理体、加持受用身は説法の教主とする。また金剛・胎藏の両界に分け、智を表す金剛界の大日を智法身、理を表す胎藏界の大日を理法身とする。

新羅国 古代の朝鮮半島の国名。

四世紀中頃に朝鮮南東部の辰韓十二国を斯盧(しよ)国が統一し、慶州に都して建国した。六世紀に任那を滅ぼし、百濟・高句麗と三国時代を形成した。七世紀に唐と結んで百濟・高句麗を滅ぼし、唐を宗主とする半島最初の統一国家をつくったが、九三五年に禪譲により高麗の太祖・王建に滅ぼされた。

百濟国 古代の朝鮮半島の国名。四世紀初の馬韓五十余国の中の一の伯濟国が中心となり、漢山に都して建国した。伝説では始祖・溫祚(おんそ)王は高句麗から移った扶余

るべしや。

犢子・方広が聡敏なりし、猶大小乗經にあやまてり。無垢・摩沓が利根なりし、権実二教を弁へず。正法一千年の内、在世も近く、月氏の内なりし、すでにかくのごとし。

況や尸那・日本等は国もへだて、音もかはれり、人の根も鈍なり、寿命も日あさし、貪・瞋・痴も倍增せり。仏、世を去りてとし久し、仏経みなあやまれり、誰の智解か直かるべき。

仏、涅槃經に記して云く「末法には正法の者は爪上の土、謗法の者は十方の土」とみえぬ。法滅尽經に云く「謗法の者は恒河沙、正法の者は一二

きようか。

犢子や方広という人たちは賢明ではあったが、それでも大乘と小乗の区別に迷い、結局は仏法を学びながらも外道の義を立ててしまった。小乗の論師の無垢や数論派の外道の摩沓婆という人たちも、生来の資質や能力は非常に勝れていたが、やはり権教と実教の違いを判断できなかった。これらは仏滅後一千年の正法時代の話であり、釈尊の生存中に比較的近いころのことで、また仏が活躍されたインドにおいてすら、もうこんな状態であった。

まして、中国や日本などは国も異なり、言葉も変わり、教えを聞く人の能力も愚かである。また、寿命も短く、貪・瞋・痴・無知の根本的な煩惱もますます盛んである。さらに、釈尊が入滅されてから長い時間が過ぎて、仏典の解釈もみな間違ふようになる。こんな状態で、果たして正しい理解などがありえようか。

釈尊は、涅槃經に「末法の時代には、正法を信受する者は爪の上の土ぐらゐに少ないが、正法を誹謗する者は十方世界の大地の土のように多いだろう」と言され、法滅尽經には「正法を誹謗する者はガンジス河の砂の数ほど

の系統という。大和朝廷が植民地的に経営した任那の滅亡後、新羅・高句麗と抗争したが、六六〇年に新羅・唐の連合軍に滅ぼされた。

犢子 小乗二十部の一つ・犢子部の祖。実の存在を認め、五蘊との非即非離を主張したとされる。方広 インドの外道である方広道人のこと。「大智度論」では、大乘の空説を誤解して因果を認めない虚無主義に陥つた一派とする。無垢 インドの小乗論師。カシミール国の人で、説一切有部について出家したが、小乗教に執着して大乘教を誹謗したために、無間地獄に堕ちたとされる。

摩沓婆 五・六世紀頃のインド・マカダ国の数論派の外道。「大唐西域記」巻八には、非常に勝れた学者であったが、ある時に無相唯識学派の徳恵に論破され、六日目に血を吐いて死去したという。

正法時代 正・像・末の三時の一つで、仏滅後において仏の教えが正しく行われる時代。釈尊の教法（教）がよく保たれ、正しい修行（行）によって、確かな悟り（慧）が得られる時をいう。仏滅後五百年、あるいは千年説などがある。

末法の時代 正・像・末の三時の一つで、仏滅後の最初の千年（五百年説もあり）を正法、次の千年を像法、その後の一万年を末法という。仏の教えだけがあつて修行および証果がない時代とされ、日本では永承七年（1056）に末法に入つたとされる。

法滅尽經 一卷。中国・劉宋代の訳出で、訳者は不明。仏が涅槃に臨んでも威光があらわれないので阿難がその事情を問うたのに対し

の小石」と記しをき給ふ。千年・五百年に一人なんども正法の者ありがたからん。

世間の罪に依りて惡道に墮つる者は爪上の土、仏法によて惡道に墮つる者は十方の土。俗よりも僧、女より尼多く惡道に墮つべし。

此に日蓮案じて云く、世すでに末代に入りて二百余年、辺土に生をうく。其の上下賤、其の上貧道の身なり。

輪廻六趣の間には人天の大王と生まれて、万民をなびかす事、大風の小木の枝を吹くがごとくせし時も仏にならず。

大小乗經の外凡・内凡の大菩薩と修しあがり、一劫・二劫・無量劫を経て菩薩の行を立て、すでに不退に入りぬべかりし時も、強盛の惡縁におとされ

多く、正法を受持する者は一つ二つの小石のようにごく稀である」と説きのこされた。正法を信受する人は千年に一人、五百年に一人ほどもいないのだろう。

その結果、世俗の罪が原因で惡道に墮ちる人は爪の土の土ほども少ないが、仏法に対する罪によつて惡道に墮ちる人は十方世界の土のように多くなり、また世俗の男女よりも出家の僧尼の方が多く惡道に墮ちることだろう。

第六章 自己認識と受難覚悟の発願

ここで日蓮は次のように考えた。時代はすでに末法に入つて二百余年が経つた今、私はインドからは辺境の地である日本に生を受けた。しかも、身分は賤しく、徳行は薄い。

過去世で六道の生死を輪廻していた間には、人間界や天上界の大王として生まれて、あたかも大風に吹かれる小さな木の枝のように万民を従わせる時もあつたが、その時も仏に成ることはなかつた。

また、仏道を得ようと志し、凡夫から次第に修行が進んで偉大な菩薩となり、一劫・二劫・無量劫という果てしなく永い時間をかけて菩薩行を實踐し、それまでに得た覺りや功德を失わない位に入るはずだった時にも、非常に強い

て、仏滅後に仏法が滅する時の相を仏が説いたもの。ただし、「般舟三昧經」や「首楞嚴經」の名目を挙げる等の理由により、ほぼ四世紀頃の成立が推測されている。

輪廻 車輪が回転してきわまりないように、衆生が三界六道の迷いの世界に生死を繰り返すこと。元はインド古来の考えで、生ある者が生死を繰り返すことで、輪廻転生・流転ともいう。

劫 きわめて長い時間で、インドの時間の単位で最長のもの。一般に、天人が方四千里の大石を薄衣で百年に一度払い、石がなくなつても終わらない長い時間といい、また、方四千里の城に芥子を満たして、百年に一度、一粒ずつ取り去つて、芥子はなくなつても終わらない長い時間とされる。

菩薩行 菩薩が仏果を得るために實踐する修行のこと。特に利他行をいう。布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六波羅蜜等が該当する。

化城喻品 「法華經」化城喻品第七。富樓那や阿難等の下根の弟子を導くために仏が過去世の因縁を説いた品で、三周説法の第三・因縁周の正説段である。すなわち、三千塵点劫の昔に大通智勝仏が出現し、四諦・十二因縁および「法華經」を説法して禪定に入つた。その仏の父の入定の間に弟子(子供)の十六王子が「法華經」を覆講して衆生を利益し、後に十六王子は十方の国土に分かれて成仏したが、その十六番目の王子が娑婆世界の釈迦牟尼仏である。このように大通仏以来の仏との深い因縁があるが、今の二乗は過去の「法華經」聞

て仏にもならず。

しらず、大通結縁の第三類の在世をもれたるか、久遠五百の退転して今に來たれるか。

法華經を行ぜし程に、世間の惡縁・王難・外道の難・小乗經の難などは忍びし程に、權大乘・実大乘經を極めたるやうなる道綽・善導・法然等がごとくなる惡魔の身に入りたる者、

法華經をつよくほめあげ、機をあながちに下し、理深解微と立て、未有一人得者・千中無一等とすかししものに、無量生が間、恒河沙の度すかされて權經に堕ちぬ。

惡縁に負けてしまい、やはり仏には成れなかった。

果たして私は、法華經の化城喻品によれば、三千塵点劫の昔に大通智勝仏の十六王子より法華經を聞いて結縁されながら、永く小乗教に執着したために釈尊の在世中も救われず、滅後によりやく得道すると説かれる第三類の者なのか。あるいは、如来壽量品によれば、五百塵点劫という久遠の昔に成仏の下種を受けながら、その後に仏道修行の志を見失い、ついぞ仏に成らずに末法の今に生まれきた者なのだろうか。

法華經を修行していた時には、世間の惡縁や国主からの迫害、外道や小乗經を信奉する者からの災難などはしのいでいたが、大乘の奥深い教えに通曉したかに見える淨土教の道綽・善導・法然らのように、その身が惡魔に取り憑かれた者で、

法華經を高く持ち上げ、人々の機根を低く抑えて、「法華經の教理は深すぎて、凡人の理解がとて及ばない」と主張し、「法華經によつて仏道を得た者は一人もない」「念仏以外の修行で極樂往生する者は千人に一人もない」などとうまく言いくるめる者に、幾度となく生まれ変わる間、

法を忘失して小乗の悟りに甘んじているので、化城の譬えを説いて、仏は常に一仏乘の法をもつて衆生を教化し、三乘はそれに至る方便教であることを明かした。

道綽 563-626。中国隋・唐代の淨土宗の僧。淨土五祖の第二祖、真宗七高僧の第四に列せられる。十四歳で出家し經論の研鑽に努め、特に涅槃經に精通したが、隋の大業五年(605)に石壁の玄中寺で曇鸞の碑文を見て感じ、その遺徳を慕つて淨土教に帰依し、同寺に止住して念仏の淨業に励んだ。「觀無量壽經」を講説すること二百回に及び、道俗に念仏を勧め、淨土宗を独立大成させた。「安樂集」二卷の著作がある。

善導 625-682。中国唐代の淨土教僧で、淨土五祖の第三祖、真宗七祖の第五祖。最初は明勝法師について出家して「法華經」や「維摩經」等を學んだが、「觀無量壽經」に遭遇して西方往生を願うようになり、その後道綽を尋ねて深く淨土念仏に帰依した。師の没後、終南山で淨土教を大成し、次いで長安の光明寺等で称名念仏の弘通に努めた。唐の永隆二年に六十九才で病没したと伝えるが、一説には光明寺で柳樹に上り西方に向かつて捨身往生したともいわれる。「觀無量壽經疏」等の著作がある。

法然 1133-1212。法然房源空。日本淨土宗の開祖。十三(あるいは十五)歳で比叡山に登つて源光および皇円に師事した。久安六年(1190)に隱遁を決し、黒谷に住して淨土教を修學した。承安五年(1195)に善導・觀經散善義により一向専修念仏義を確立し、東山吉水に移つて念仏義を宣揚して、貴

権經より小乗經に墮ちぬ。外道外典に墮ちぬ。結句は惡道に墮ちけりと、深く此れをしれり。

日本国に此れをしれる者、但日蓮一人なり。これを一言も申し出だすならば、父母・兄弟・師匠に国主の王難必ず來たるべし。いわずば慈悲なきにたりと思惟するに、

法華經・涅槃經等に此の二邊を合はせ見るに、いわずば今生は事なくとも、後生は必ず無間地獄に墮つべし。いふならば三障四魔、必ず競ひ起るべしとしりぬ。

二邊の中にはいふべし。王難等出來の時は退轉すべくは一度に思ひ止むべし、と且くやすらいし程に、宝塔品の六難九易これなり。

無數のたびごとにだまされて、権經に墮ちてしまった。

そして、権經に止まらず小乗經からインドの外道や中国の儒教に転落し、果ては惡道に墮ちてしまったと、そういう自分の過去の子細を深く知るに至った。

日本国でこのような子細を知っているのは、ただ日蓮一人だけである。これを一言でも口にすれば、父母や兄弟や師匠にも国主からの迫害が必ずやつて來るだろう。しかし、知りながらそれを言わなければ、仏や菩薩が衆生をあわれむ慈悲の心に背くことになるだろう、と思ひあぐね、

法華經や涅槃經などの所説に基づいて、言うべきか言わざるべきかを考えてみたところ、言わなければ現世は無事平穩であつても、來世では必ずや無間地獄に墮ちるだろう。一方、もし言い出せば、正道を妨げる三障や衆生を惡道にひき入れる四魔が、必ずつきつきと起り來るだろうと説かれていた。

そこで、どちらを取るかと迫られれば、言わないわけにはいかないと思う。と同時に、国主からの迫害などに値つて、途中で投げ出してしまふのであれば、はじめから言わないのにこしたことはないだろう、などとしばらくためら

族から庶民までの幅広い帰依を得た。文治二年(一一八六)には天台座主の顕真の請により大原・勝林院に淨土法門を講じ、法相や華嚴等の諸僧と法義を論じてこれを破した(大原談義)。建久九年(一一九三)に「選採本願念仏集」を撰述して、専修念仏の理論的根拠を整備した。建永元年(一二〇〇)歳末に勃発した門弟の住蓮・安樂の密通事件が引き金となり、翌二年二月に専修念仏は禁止され、法然は土佐に配流された。同年十二月に赦免されたが、入洛は禁止されたので摂津・勝尾寺に止住し、建暦元年(一二二二)十一月に帰洛し、翌年示寂した。

極樂往生 西方にある阿彌陀仏の淨土で、一切の苦患を離れた極樂世界に生まれること。

無間地獄 阿鼻地獄ともいう。八大地獄の第八で、最下低の地獄。間断なく苦しみを受けるところからの呼称である。五逆罪や誹謗正法の者が墮ちるとされる。

三障 煩惱障・業障・報障。煩惱障は貪欲や瞋恚・愚痴等の煩惱、業障は五逆や十惡等の行為、報障は三惡道や誹謗正法の苦報がそれぞれ仏道の障礙となることをいう。

四魔 煩惱魔・陰魔・死魔・天子魔。煩惱魔は、身心を悩ます食りなどの煩惱。陰魔は、種々の苦しみを生ずる五蘊。死魔は、死そのもの。天子魔は他化自在天子魔ともいい、死を克服しようとすることを妨げるもの。または、人の善行を妨げる欲界第六天の魔王のこと。

六難九易の法門 六難と九易の並稱で「法華經」見宝塔品第十一に見える義。仏滅後における「法華

われらほど
我等程のしゆみせんのせうりきの者、須弥山はなぐとも、我等程の無通むつうの者、乾草かれくさを負ひて劫火にはやけずとも、我等程の無智むちの者、恒沙ごうじやの経々をばよみをぼうとも、法華経は一句一偈も末代に持ちがたしと、とかるるはこれなるべし。今度強盛ごうじやの菩提心ぼだいしんををこして退転せじと願しぬ。

既に二十余年が間、此の法門を申すに、日々・月々・年々に難かさなる。少々しやうしやうの難はかずしらず、大事の難四度なり。

二度はしばらくをく、王難すでに二

つていた時に思い至ったのが、法華経の見宝塔品に説かれる六難ろくなん九易くういの法門であつた。

「私たちのような力のない者が、須弥山を投げとばすことがあつたとしても、私たちのように神通力じんつうりきを持たない者が、乾草を背負つて世界を最後に燃やし尽くすという劫火に入つて焼けないことがあつたとしても、私たちのような智慧のない者が、無数の經典を暗誦あんじゆしたとしても、これらはさほど難しいことではない。しかし、法華経のたとえ一句一偈であれ、末法の時代に受持し信奉することは困難である」と説かれており、その時の私の立場にぴったりと符合した。そこで、今度こそは強い仏道を求める心を起こして、断じて後には引くまい、と堅く誓つた。

第七章 法華経の予言の色説しきせつ

① 打ち続く法難

それから二十数年間、この法華経の教えを弘めてきたが、日ごと月ごと年ごとに法難が数多く襲つてきた。規模が小さい難は数え切れず、大きい法難は四度に及んだ。

そのうち、まつばがやつ松葉谷法難とまつばらけんなん松原剣難の二度はしばらくおく

經「受持の六つの困難を、通常は難事であるが、『法華経』の受持に比べた時に容易と判断される九つのことに対応させたもの。

松葉谷法難 文応元年(1260)八月二十七日に鎌倉の松葉谷にあつた草庵で、宗祖が念仏者等の暴徒に襲撃された事件。宗祖は、正嘉元年の大地震等の災害の原因である法然浄土教等の邪法を禁断する旨を記した「立正安国論」を同年七月十六日に北条時頼に上呈した。この進言は採用されず、返つて幕府上層部や念仏信仰者の怒りを買ひ、翌月二十七日、念仏信仰者の北条重時ら権力者の後ろ盾を得て、多勢の暴徒が深夜に松葉谷の草庵を襲撃して放火した。宗祖は危うく虎口を逃れ、一時は下総の富木常忍のもとに身を寄せたが、明くる年の五月十二日には捕縛されて伊豆流罪に処せられた。

松原剣難 文永元年(1264)十一月十一日の夕刻、宗祖および弟子・檀越等十余名が安房国東条郷松原大路(千葉県鴨川市広場付近)で東条景信らの襲撃を受けた法難。前年二月に伊豆流罪を赦免されて鎌倉へ帰つた宗祖は、翌文永元年に母親の病氣を見舞うために安房に帰郷し、十月に華房の蓮華寺に赴いて旧師・道善房に面謁し、さらに十一月十一日に天津の工藤吉隆の招請に応ずる途中、かねてより宗祖に恨みを懷いていた東条景信に松原大路にて襲われた。その際、弟子一人が即死し、二人が重傷で、宗祖自身も頭に傷を受け左手を打ち折られた。

伊豆流罪 宗祖が弘長元年(1261)五月十二日から同三年(1263)二月

度ををよぶ。今度はすでに我が身命に及ぶ。

其上、弟子といひ、檀那といひ、わづかの聴聞の俗人など来たりて重科に行はる。謀反なんどの者のごとし。法華經の第四に云く「而も此の經は如來の現在すら猶怨嫉多し、況や滅度の後をや」等云云。

第二に云く「經を讀誦し書持すること有らん者を見て、輕賤憎嫉して結恨を懷かん」等云云。

第五に云く「一切世間怨多くして信じ難し」等云云。又云く「諸の無智の人の惡口罵詈等する有らん」。

又云く「國王・大臣・婆羅門・居士に向かひて、誹謗し我が惡を説いて、是れ邪見の人なりと謂はん」。

として、国主による法難は伊豆流罪と竜口法難から佐渡流罪へという二度にわたった。特に、このたびの竜口から佐渡へという法難は、私自身の身命の危機に及んだ。

その上、私の弟子や信徒はもちろんのこと、果ては少しばかり私の教えを聞いただけの俗人までも重い罪科に問うありさまで、さながら謀反人などに等しい処遇である。

法華經の第四卷法師品には「しかもこの法華經を弘通すると、仏の在世中でさえ怨みや嫉みが多い。ましてや、仏滅後はいうまでもない」等と見え、

第二卷譬喻品には「法華經を讀誦し書写して、受持する者を見ては、輕しめ賤しみ、憎み嫉んで、固い恨みを持つだろう」などとあり、

第五卷安樂行品には、「この經にはすべての世間からの怨みが多く、信じることが難しい」と説かれている。また、勸持品第十三には、「多くの智恵なき者の惡口やののしりなどがあるだろう」とあり、

「國王や大臣、祭祀者や農工商者という社会的地位のある者に対して、法華弘通の行者をそしり、彼の者は誤った見解を持っていると惡口するだろう」と見え、

二十二日まで伊豆の伊東（静岡県伊東市）に流罪された法難。直接的な近因としては前年・文応元年（1260）七月の「立正安国論」の前執権・北条時頼への呈上が結果的に幕政批判と受け取られ、遠因としては「守護国家論」等に見える法然浄土教に対する批判があった。念仏者達は松葉谷の庵室を襲撃（松葉谷法難）し、宗祖は一旦は下総の富木常忍のもとに避難したが、後に幕府によつて捕らえられ、伊東八郎左衛門の預かりとして伊東に配流された。

竜口法難から佐渡流罪 文永八年（1211）六月に祈雨に失敗した極楽寺忍性（良観）は、その翌七月に鎌倉浄土教の首魁・然阿良忠等と共に日蓮法華衆の他宗排撃の主張やそれに基づく危険行動を幕府に訴えた。同年九月十二日、幕府の侍所司・平頼綱が武装した多勢の兵士を従えて松葉谷の草庵を急襲して宗祖を逮捕し、表向きは佐渡への流罪処分と決定した。同日の深夜に鎌倉から相模国依智へと向かう途中、かねての予定どおり、宗祖は刑場の竜口で斬首されかけたが、不思議な天変により処刑はとりやめとなり、それから一ヶ月後の十月十日に本来の処分どおり、宗祖は依智から佐渡へと向かった。佐渡流罪は同年十一月から文永十一年（1234）三月までの二年五ヶ月に及び、その間配流地も塚原から一谷へと移り、宗祖は塚原では「開目抄」、一谷では「観心本尊抄」および曼荼羅本尊を顕わして、本化仏教の新境地を開拓した。法師品 本品からの五品は迹門の流通分となる。次の宝塔品とともに、釈尊が弘經の功德深重を説い

又云く「数数擯出せられん」等云云。
又云く「杖木瓦石をもて之れを打擲せん」等云云。

涅槃經に云く「爾の時に多く無量の
外道有り。和合して共に摩訶陀の国王
阿闍世の所に往きぬ。○今は唯一の大
悪人有り、瞿曇沙門なり。○一切世
間の悪人、利養の爲の故に其の所に
往集して眷属と爲りて、能く善を修
ぜず。呪術の力の故に迦葉及び舍利弗
・目犍連を調伏す」等云云。

天台云く「何に況や未来をや、理、
化し難きに在るなり」等云云。妙樂
云く「障り未だ除かざる者を怨と爲し、
聞くことを喜ばざる者を嫉と名づく」
等云云。

南三北七の十師、漢土無量の学者、
天台を怨敵とす。得一云く「咄きか
な、智公、汝は是れ誰が弟子ぞ。三寸

「法華の行者はしばしばその弘通の場所から追放される
であろう」などと説かれる。さらに、常不輕菩薩品には、「杖
や棒、瓦や石で不輕菩薩を打ちすえた」等と見え、

涅槃經には、「その時に、大勢の外道を信奉する者たちが
結束し、マガダ国の阿闍世王のところに行つて次のように
訴えた。『目下、一人の大悪人がおります。それはほかでも
ない、釈迦牟尼仏です。世の中のすべての悪人は、私利私
欲のために釈迦の下に集まり、その弟子となつて悪行にふ
けています。釈迦は呪術の力を用いて、迦葉や舍利弗・
目連という修行者たちを信服させております』と」等と述
べられている。

天台大師は「法華經には釈尊在世の時ですら怨嫉する者
がいた。まして、入滅後の未来にはより多くの怨嫉があつ
て、教化することが難しい」と釈し、妙樂大師は「怨嫉」
の二字を、「煩惱が断じられていないことを怨といひ、法華
經を聞くのを喜ばないことを嫉という」と説明している。

中国では、南北朝時代を代表する揚子江以南の三師や、
黄河以北の七師をはじめとする多くの学者たちが天台大師
の怨敵となつた。日本でも、法相宗の徳一は、「やあ、天台

て流通を勧め、末法の弘經の入法
と方軌が示されている。五種法師
・十種供養・高原穿鑿・衣座室の
三軌等が説かれている。

安樂行品 迹門の最後品で、「法
華經」四要品の一つ。文殊が惡世
に「法華經」を安樂に修行する方法
を問うたのに対して、釈尊は身・
口・意・誓願の四安樂行を説き、初
心の人の修行法を示している。
勸持品 宝塔品の三箇の鳳詔に
応じる形で、薬王菩薩等を上首とす
る二万の菩薩は此土での弘經を誓
い等したが、これに釈尊は默然と
して答えず、座中の八十萬億那由
佉の菩薩を見て此土の弘經を勧め
たので、これらの菩薩たちは、三
種の強敵に負けることなく「法華
經」を弘通するという誓願を二十
行の偈に結んで言上した。

常不輕菩薩品 本門流通分の功德
流通のうち、分別功德品以下の二
品半に滅後の「法華經」護持の功德
を説いて流通を勧めたが、本品で
は釈尊の本生としての常不輕菩薩
の菩薩行を示して、法華經の行者
を誘ふ者の罪報と護持する者の功
徳が説かれている。

不輕菩薩 法華經に「常不輕菩薩品
第二十に釈尊の本生として説かれ
る菩薩。昔、威音王仏の滅後像法
に出現し、經典説誦を専らにせず、
増上慢の四衆に「我れ深く汝等を
敬う」等と讃歎して礼拝を行じた。
四衆は怒って惡口罵詈し、さらに
杖木瓦石で打撃したが、菩薩は礼
拝を行じ続け、命終の時に空中よ
り「法華經」の偈を聞き、信受して
六根清淨の功德を得た。同時に延
びた寿命の間に「法華經」を説き、
これを聞いた増上慢の四衆も信順

に足らざる舌根を以て覆面舌の所説を謗する」等云云。

東春に云く「問ふ、在世の時、許多の怨嫉あり。仏滅度の後、此の経を説く時、何が故ぞ亦留難多きや。答へて云く、俗に言ふが如きは、良薬口に苦しと。

此の経は五乗の異執を廃して一極の玄宗を立つるが故に、凡を斥け聖を呵し、大を排ひ小を破り、天魔を銘じて毒虫と為し、外道を説いて悪鬼と為し、執小を貶して貧賤と為し、菩薩を挫きて新學と為す。

故に天魔は聞くを惡み、外道は耳に逆らひ、二乗は驚怪し、菩薩は怯行す。此の如きの徒、悉く留難を為す。多怨嫉の言、豈に唐しからんや」等云

師よ、君はいったい誰の弟子なのか。わずか十センチほどにも足りない舌で、釈尊が真実を説かれた解深密經の教えを誹謗するとは」などと惡口を吐いた。

東春の智度法師は次のような問答を設けている。「問う。釈尊は生前に多くの怨嫉を受けられた。また、仏が入滅された後に、この法華經を弘めようとすると、どうしてまた災難が多いのか。答えていう。俗に『良薬は口に苦し』というではないか。

この法華經は、人乗・天乗・声聞乗・緣覺乗・菩薩乗の五つの教えを、それぞれが真実であると執着する立場を方便として退け、誰もが平等に一仏乗のさとりに到達することができるといふ深遠な教えを立てる。そのため、凡夫の怠慢を非難して聖者の停滯を叱り、大乘を払って小乗を破り、天魔を毒虫となし、外道を惡鬼といい、小乗に執着する二乗を貧賤とおとしめ、菩薩を初心の行者と卑しめる。

それゆえ、天魔は法華經の教えを聞くことをきらい、外道は耳をそらし、声聞・緣覺の二乗は驚きあやしみ、菩薩は行ずることをおびえてしまふ。しかも、これらの人々がみな法華の行者に迫害を加える。『怨嫉が多い』という經文に

帰伏したが、それまでの謗法の罪により十劫の間、無間地獄に墮ちて苦悩を受けた。その罪を終えて、四衆たちは不輕菩薩との逆縁により再び菩薩の教化を受け、成仏することが決定した。

徳一 奈良時代から平安初期にかけての法相宗の學僧で、徳澄とも表記する。伝教大師最澄と三一權実論争を長期にわたって展開した。藤原仲麻呂の子と伝えられる。出家して東大寺に住し、興福寺の修円から法相を學んだ。後に關東に移住し、延暦元年(803)常陸国筑波山に中禪寺を創建し、奥州会津に恵日寺を開創して、同地で没したとされる。

解深密經 五卷。唐の玄奘が貞觀二十一年(627)に訳出た。法相唯識の理論や行法・果徳等を説いたもので、唯識の經典の中では最も重要視される。紀元三百年頃の成立が推定されている。八品から成り、途中に三性(遍行所執性・依他起性・円成実性)・三無性(相無性・生無性・勝義無性)・三時教判(有・空・中)等が説示されている。

智度 生没年など未詳。中国・唐代の天台宗の學僧で、妙樂湛然の弟子といわれる。東春に住んだところから東春沙門といい、またその著書を東春と呼ぶ。著書には「法華經疏義讃」六卷が現存する。

一仏乘 仏の説く真実の教えはただ一つである、一切の衆生を成仏に導くものであるという義。声聞・緣覺・菩薩にそれぞれ固有の悟りの道があるという三乗の教えなどに対する語で、一乘または仏乘と同義である。「法華經」方便品等の經文に見える。

云。

顯戒論に云く「僧統、奏して曰く、西夏に鬼弁婆羅門有り、東土に巧言を吐く禿頭沙門あり。此れ乃ち物類冥召して世間を誑惑す」等云云。

「論じて曰く、○昔は齊朝の光統を聞き、今は本朝の六統を見る。実なるかな、法華に何況するをや」等云云。

秀句に云く「代を語れば則ち像の終り末の初め、地を尋ねれば則ち唐の東、羯の西、人を原ぬれば則ち五濁の生、闍諍の時なり。経に云く、猶多怨嫉況滅度後と。此の言、良に以有るなり」等云云。

は、このような事情があるのだ」と。

伝教大師は顯戒論にいう。「僧尼の監督等を務める南都六宗の僧綱たちが、最澄を批判して朝廷に捧げた上奏文には、『昔、西方のインドにはあやしい行体を示す鬼弁婆羅門がおり、今、東方の日本国には言葉たくみな似非法師がいる。これは悪魔の同類が密かに集まって、世間をたぶらかしているのである』などと述べている。

それに私は反論する。『昔、中国の齊の時代には国統の地位にいた慧光が、達磨大師を毒殺しようとしたと聞くし、今は、わが日本国の南都六宗の僧綱が、最澄を迫害しようとする姿を見る。法華経法師品の、仏の在世中は迫害が多かった、ましてや仏滅後の法華の行者が数々の怨嫉を受けるのは当然であるという言葉は、まさに真実である』と。

また、法華秀句には「時代をいえば、正法が形骸化した像法時代の終わりにして、正法が滅尽する末法時代のはじめ。国土を問えば、中国の東にして靺鞨国の西にある辺国の日本。人々はどうかといえ、五濁が充滿する悪世の中に生をうけ、お互いに鬭争を繰り返している。法華経法師品に『しかもこの法華経を弘通すると、仏の在世中でさえ

顯戒論 三卷。伝教大師最澄撰。

弘仁十年(819)に最澄は「天台法華宗年分度者回小向大式(四条式)」を制定して、戒壇建立を請う表を朝廷に奉じたが、これに僧綱が反論した。「顯戒論」はそれに逐一反駁して、明くる弘仁十一年二月に上表された。開雲顯月篇・開顯三寺所有国篇・開顯文殊上座篇・開顯大乗大僧戒篇・開顯授大乗戒為大僧篇の五篇から成る。

僧綱 本来は僧尼を統率し、法務を処理するために任命された僧官で、僧正・僧都・律師の三つ。

鬼弁婆羅門 古代インド・マカダ国の鶏園寺の鐘塔の北にいたバラモン。一種の逆説的理論を弄んで鬼を祀り、常に帷を垂れて難問者に答えて、世間からは尊敬を受けていた。これを怪しんだ馬鳴菩薩は赴いて論破し、その帷をあげて妖態を見破ったという。

国統 僧尼の監督や寺院の取り締まりにあたる僧官で、僧綱と同じ。

慧光 486-534。仏陀扇多に師事して戒律を習学・弘通し、中国四分律宗の祖とされる。後に鄴に入り国統となり、世人からは「光統(こうず)律師」と称された。また地論宗の基を築いて、阿黎耶識を真識と見る南道派を立てた。

達磨禪師 中国禪宗の初祖・菩提達磨のこと。所伝によると、南インドの香至国王の第三子で、大乗や禪定を学んだが、劉宋末に中国に渡り、北魏の洛陽で「楞伽經」による大乗の禪法を弟子の恵可や道育に伝えた。後世禪宗では、達磨はインドで仏の心印を伝えた「西天の二十八祖」の最後の師で、梁の普通元年(526)に広州に着き、金陵におもむいて武帝と問答し、

夫れ小児に灸治を加ふれば必ず母を
あだむ。重病の者に良薬をあたうれば
定めて口に苦しうれう。

在世猶しかり、乃至像末辺土をや。

山に山をかさね、波に波をたたみ、難
に難を加へ、非に非をますべし。

像法の中には天台一人、法華經・一
切經をよめり。南北これをあだみしか
ども、陳隋二代の聖主、眼前に是非を
明らめしかば、敵ついに尽きぬ。

像の末に伝教一人、法華經・一切經
を仏説のごとく読み給へり。南都七大
寺蜂起せしかども、桓武乃至嵯峨等の
賢主、我と明らめ給ひしかば又事なし。

怨みや嫉みが多い。ましてや、仏滅後はいうまでもない』
と説かれた仏語は、本当に深く重い』等と語っている。

およそ、母親が子どもにお灸を据えれば、必ずその子は
かえって母を憎む。重い病気の者に良い薬を飲ませると、
決まって苦くて飲めないと嘆く。

このように、釈尊の在世ですら怨嫉が多い。だから、時
代が下り衰え、国も遠く隔たれば、迫害が一層多くなるこ
とはいうまでもない。山に山が重なり、波に波が続くよう
に、法難に法難が加わって、悪いことはいよいよ増えてい
くのである。

像法時代の中頃では、天台大師一人が法華經の教えに基
づいてすべての仏典を読み解いた。当時の諸宗の学僧はこ
ぞって天台大師に怨嫉を加えたけれども、陳の後主叔宝や
隋の文帝・煬帝らの賢明な君主が、みずから両者の是非を判
定したので、諸宗の敵人はみな降参してしまった。

像法時代の末には、伝教大師だけが法華經をはじめとす
るすべての經典を、仏の真意の通りにお読みになられた。
その時、奈良七大寺の諸僧がいつせいに立ち上って反対し
たが、桓武天皇や嵯峨天皇などの賢王が手ずから正邪を明

ために禪要を説くも用いられず、
北魏の嵩山少林寺で九年間壁に向
かって坐禅し(面壁九年)、受法を
請うた恵可に付法したという。

法華秀句 五卷あるいは三卷。伝
教大師最澄が弘仁十二年(821)に
著わした書で、「法華輔照」ともい
う。法相宗の徳一が天台宗の義は
すでに華嚴・三論の両宗に存在す
るので新宗別立の必要なしと主張
したので対して、法華十勝を挙げ
て天台法華宗独立の重要性を論証
したもの。

靺鞨国 六世紀半ばから約百年
間、中国東北部の松花江流域に居
住したツングースの一種族を、中
国の隋・唐時代に靺鞨と呼んだ。
各々根拠地をもつ大部族からな
り、後に多く渤海国に統合された。

陳の後主叔宝 陳は中国南北朝時
代の南朝最後の王朝(557-589)。
梁の跡を受けた陳霸先(武帝)が建
康を都として建国し、五代三三年
で隋の文帝により滅ぼされた。後
主叔宝は至徳三年(583)に天台智
顗を太極殿に屈請して「大智度論」
を講ぜしめ、更に同年九月には同
じ太極殿で「仁王般若經」を講ぜし
めて七夜千灯を点じ、自ら光宅寺
に行幸して捨身供養を行った。
隋の文帝・煬帝 隋は中国の南北
朝を統一した王朝(581-618)で、
北朝の北周の権臣・楊堅(高祖文
帝)が静帝の禅譲を受けて大興(長
安)に都を置いて建てた。文帝は
諸制度を整備して中央集権化に努
め、北周武帝の廢仏毀釈に反して
仏教思想を宣揚し、寺院建立・訳
經事業も活発に行なった。二世・
煬帝は生産流通の安定をはかり、
大規模な外征を行なったが、各地

今、末法の始め二百余年なり。況滅度後のしるしに、鬭諍の序となるべきゆへに非理を前として、濁世のしるしに召し合はせられずして、流罪乃至寿にもをよばんとするなり。

されば日蓮が、法華經の智解は天台・伝教には千万が一分も及ぶ事なけれども、難を忍び慈悲のすぐれたる事はそれをもいだきぬべし。

定めて天の御計らひにもあづかるべしと存ずれども、一分のしるしもなし。いよいよ重科に沈む。

還りて此の事を計りみれば、我が身の法華經の行者にあらざるか。又諸天善神等の此の国をすてて去り給へるか。かたがた疑はし。

らかにされたので、それ以上のことはなかった。

今、末法時代に入つて二百余年になる。法華經法師品の「まして、仏滅後はいうまでもない」および大集經の「仏滅後の第五の五百年間は争いのみに明けくれる時代となるだろう」の經文のとおり、もつぱら道理にはずれたことが横行している。法華經方便品の「五濁の惡世」の仏説が現実のものとなつて、私は公けの場での諸宗との対論もなく一方的に流罪され、果ては生命の危機にさらされている。

それゆえ、日蓮の法華經に対する学問や理解は天台・伝教の兩大師の千万分の一にも及ばないが、法華經のために法難を忍受し、一切衆生を救わんとする慈悲においては、兩大師も恐れを懷かれるだろう。

これまで、いつかは必ず諸天のご加護をこうむるだろうと思つてきたが、いまだ何のきざしもなく、私はますます重い刑罰に処せられている。

このような事実から逆に推察すると、日蓮は法華經の行者でないのであらうか。または、行者を守護すべき諸天善神らがこの謗法の国を見捨てて、天上に去つてしまわれたのであろうか。あれこれ悩ましい気持ちである。

方豪族の反乱を招いて衰退し、統一後三十余年で滅亡した。煬帝も仏教の復興に尽力し、特にまだ晋王であつた開皇十一年(581)に天台智顗より菩薩戒を受けて、深く帰依を示した。

隋文帝 581 - 605。第五十代天皇で、在位は天徳元年(581)大同元年(606)。即位後に平城京から長岡京に、ついで延暦十三年(694)平安京に遷都。坂上田村麻呂による東北の蝦夷征伐や地方行政の整備などを行ない、律令政治の再建に尽力した。仏教の外護者としても有名で、特に延暦四年(785)に最澄が比叡山を開創するとこれを天子本命の道場と号して尊重した。また同二年(802)には高雄寺に南都六宗の碩学を召して最澄の法華講經を聴聞させ、法の正邪を決した。

嵯峨天皇 766 - 823。第五十二代天皇で、在位は大和四年(806)から弘仁十四年(823)。桓武天皇の第二皇子で、即位の翌年に前帝・平城天皇が寵姫・藤原薬子とその兄・仲成にそののかされて復位を企てた「薬子の乱」が起こつたが、それを平定した後は平穩な治世が続いた。能筆家として有名。

五濁 末世や滅劫(人の寿命が次第に短くなる時代)に發生する避けがたい社会的・精神的・生理的な五種の汚れで、五滓(ごし)ともいう。第一・劫濁は時代の汚れで、飢饉・疫病などの天災や戦争などの社会惡。第二・煩惱濁は貪・瞋・痴などの様々な精神的な惡徳が横行すること。第三・衆生濁は人間そのものの汚れで、身心共に資質が低下すること。第四・見濁は思

② 二十行偈の色説

而るに法華經の第五の卷勸持品の二十行の偈は、日蓮だにも此の国に生まれずば、ほととをど世尊は大妄語の人、八十萬億那由他の菩薩は提婆が虚誑罪にも落ちぬべし。

經に云く「諸の無智の人の惡口罵詈等し、及び刀杖を加ふる者有らん」等云。

今の世を見るに、日蓮より外の諸僧、たれの人か法華經につけて諸人に惡口罵詈せられ、刀杖等を加へらるる者ある。日蓮なくば此の一偈の未來記は妄語となりぬ。

「惡世の中の比丘は邪智にして、心詭曲なり」。又云く「白衣の与に法を説いて世に恭敬せらるること、六通の羅漢の如し」。

ところが、法華經第五卷の勸持品に見える二十行の偈頌げじゆに関していえば、もし日蓮がこの国に生まれてこなければ、あやうく釈尊は大變な嘘つきとなり、二十行の偈頌を述べて法華經の弘通を誓った八十萬億那由他の大勢の菩薩たちも、提婆達多が犯したのと同じく、故意に人をあざむく罪におちいつてしまったことだろう。

その二十行の偈には、「数多くの智慧のない者が法華の行者をそしり、また刀や杖で迫害する者があるだろう」と説かれていた。

現在の世を見る限り、日蓮以外の僧たちの中で、いったい誰が法華經ゆえに人々に惡口され、ののしられ、刀杖などによる危害を加えられているだろうか。日蓮がいなければ、勸持品のこの一偈の予言はそらごととなり果てる。

偈文にはまた次のように見える。「仏滅後の惡世に出現する僧は、わる賢く、心がねじ曲がついている」、「在家の人々に法を説いて、世間から六つの不思議な力を得た阿羅漢のように尊敬される」と。

想の汚れで、身見・辺見・邪見・見取見・戒禁取見の五利使を指す。第五・命濁は生命の汚れで、寿命が短くなること。人間の寿命が次第に減少して、八万歳から二万歳になるに及んで五濁の現象が現れはじめ、徐々に五濁の量が増していくと説かれる。

偈頌 仏典の中で韻文形式を用いて仏徳や教理を讃嘆して述べたもの。漢訳の仏典では別偈と通偈があり、通偈は首盧迦（しゅろか）とも呼ばれ、散文・韻文にかかわらず三十二字を一節とするもので、四句からなるものが多い。別偈は長行（散文）でない偈頌を指し、一句の字数を三字・四字などに定めて四句となしたものをいう。提婆達多 釈尊在世時に仏弟子となりながらも退転し、逆罪を犯して仏に種々迫害を加えた惡比丘の代表。阿難の兄（または弟）で、釈尊の従弟。幼い頃から釈尊と対抗し、釈尊が成道した後には一旦はその弟子となるが、みずから仏に代わって教法の王とならんと野心を抱き、五百余人の比丘を率いて教団の分裂を計った（破和合僧）。一方、阿闍世王をそそのかして父王・頻婆娑羅王を殺して新王につかせ、阿闍世が改心して仏に帰依すると、今度は仏を殺害せんとした種々の迫害を加えたが失敗し、その罪報により生きながら無間地獄に落ちたとされる。「法華經」提婆達多品には、釈尊が過去世の修行中にその善知識となつて成仏に導いた阿私仙人が提婆達多であるとされ、天王如来として未來成仏の記別を与えられて、惡人成仏の代表例とされている。

此等の経文は、今の世の念仏者・禅宗・律宗等の法師なくば、世尊は又大妄語の人。

「常在大衆中乃至向国王大臣婆羅門居士」等、今の世の僧等、日蓮を譏奏して流罪せずば、此の経文むなし。

又云く「数数見擯出」等云云、日蓮法華経のゆへに度々ながされずば、数の二字いかんがせん。

此の二字は天台・伝教もいまだよみ給はず。況や余人をや。末法の始めのしるし、恐怖悪世中の金言のあふゆへに、但日蓮一人これをよめり。

これらの経文も、現在の日本国にもし念仏・禅・律など諸宗の法師がいなければ、釈尊はまた大変な嘘をついたことになる。

また、次に説かれる「悪世の僧たちは常に一般大衆の中にいて、法華の行者を非難しようとし、国王や大臣、祭祀者や農工商者という社会的地位のある者に向かつて、行者をそしめるだろう」という経文も、今の諸宗の法師たちが事実をまげて悪しざまに日蓮を訴え、流罪にしなかったならば、真実でなくなってしまう。

そして「法華の行者はしばしばその所を追ひ出される」とも述べられているが、日蓮が法華経を弘めて、一度ならず遠流に処せられなければ、「しばしば」という言葉はどのようなにあつかったらよいのだろう。

この「しばしば」という勸持品の文字は、天台大師も伝教大師もついで体現されなかった。ましてや、それ以外の人々はいかに及ばない。末法のはじめの証拠である「おそるべき悪い世の中に」という仏のお言葉が現実化し、その中で日蓮一人がこの「しばしば」の文字を身をもって読むことができたのである。

阿羅漢 羅漢と略称され、尊敬を受けるに値する人の意から応供ともいう。煩惱の賊を殺害した者の意で殺賊ともいわれ、永久に涅槃の悟りに入つて再び三界に生じない者の意から不生・無生とも訳される。応供・殺賊・不生を阿羅漢の三義という。本来は最高の悟りを得た者をいつたが、大乗仏教が興隆して小乗の聖者を指して使われるようになった。また、小乗の四果の最高位・阿羅漢果をいう。

遠流 律令制に定める流罪の内の最も重いもので、中流（ちゅうりゅう）や近流（こんりゅう）にくらべて都からの距離が遠い。基本的には、伊豆・安房・常陸・佐渡・隠岐・土佐等がその流刑地であつた。

付法蔵経 「付法蔵因縁伝」六巻のことで、「付法蔵伝」ともいう。中国・北魏代の吉伽夜・曇曜が和平三年（486）に共訳した。釈尊滅後にインドで仏法が相承された次第を説いたもの。迦葉・阿難から第二十三祖の師子に至る諸師の行実を伝え、最後に師子が罽賓国の彌羅掘王の破仏により斬首されたために付法が絶えたことを記す。

阿育大王 インドのマウリア朝第三代の王で、在位は前272〜前232年頃。祖父のチャンドラ Gupta の事業を承継してインドにおける最初の統一王朝を樹立し、その勢力はシリヤやエジプトにまで及んだ。王は優波鞠多（一説には目犍連子帝須）を師として仏教に帰依し、以来法による勝利こそが真の勝利であるとして、仏教精神に基づいた政治を布いた。また、統治の理念（法）や在世中の事業を法

例せば、世尊が付法藏經に記して云く「我が滅後一百年に阿育大王という王あるべし」。

摩耶經に云く「我が滅後六百年に竜樹菩薩という人、南天竺に出づべし」。

大悲經に云く「我が滅後六十年に末田地という者、地を竜宮につく（築）べし」。

此等、皆仏記のごとくなりき。しかしらずば誰か仏教を信受すべき。

而るに仏、「恐怖惡世」、「然後未來世」、「末世法滅時」、「後五百歲」など、正妙の二本に正しく時を定め給ふ。

当世、法華の三類の強敵なくば、誰か仏説を信受せん。日蓮なくば、誰をか法華經の行者として仏語をたすけん。

たとえば、釈尊が付法藏經に「私が入滅した百年の後に阿育大王（アシヨールカ王）という国王が出現するであろう」といい、

摩訶摩耶經には「私の入滅後六百年の時代に、竜樹菩薩という人が南インドに出世するであろう」といい、

大悲經には「私が入滅した六十年後に、末田地という人が大地を竜宮に築くであろう」と述べられた。

このような釈尊の言葉はみな現実のものとなった。もし、これらが実現しなかったならば、いったい誰が仏の教えを信じただろうか。

その釈尊が、正法華經や妙法蓮華經に「恐るべき惡世」ところが後の未來世において「末法の世のまさに仏法が破滅しようとする時」「後の五百歲」などと述べて、法華經が流布する時を定められた。

今の世に、勸持品二十行の偈に言された俗衆増上慢・道門増上慢・僭聖増上慢の三類の強敵が現れなければ、どうして仏の説法を信じることができよう。また今、日蓮がいなければ、いったい誰が法華經の行者として、仏の予言

勅として岩壁や石柱に銘刻せしめ、仏跡を巡礼して寺塔を建立供養し、辺地やギリシヤ諸國へ伝道師を派遣して教団の分裂を誠めたという。

摩訶摩耶經 二卷。「摩耶經」と略

稱される。中国・六朝齊代の釈曇

景の訳。上下二卷で内容が大きく

分かれ、それぞれ「仏母切利天為

母説法經」「仏臨般涅槃母子相見

經」の異名がある。上巻には、仏

が切利天に昇って生母・摩耶夫人

のために説法して因果の益を得さ

せたこと等が説かれてゐる。下巻

には、仏が諸國を巡遊した後に涅槃

に入つた時、切利天より下りた

摩耶夫人が沙羅林に至つて悲しん

でゐると、仏棺が開いて光明を放

ち、母子が再び相見した後に、仏

が母のために法を説いて別れを告

げたこと等が説かれてゐる。

大悲經 五卷。「大悲華經」ともい

い、中国北齊の那連提耶舎が天保

九年（558）に訳出した。仏が涅槃

に臨んで梵天・帝釈・迦葉・阿難な

どに付法し、滅後弘法の者を予言

してゐる。また舍利供養の功德の

大きさを示し、阿難に対して迦葉

と共に遺法を結集して四百年後に

伝持すべきことを遺命してゐる。

末田地 付法藏の第三祖。第二祖

の阿難の弟子で、商那和修と同時に

付法した。阿育王の伝道師としてカシミールおよびガンダーラ地方に派遣され、後世の説一切有部の基礎をなしたと伝えられる。

正法華經 十卷。「法華經」漢訳の

現存三經中の最古で、中国西晋の

太康七年（286）に竺法護により訳

出された。内容的には後代の羅什訳等の「法華經」にない經文を含んでおり、原本としてはむしろ新し

南三北七・七大寺等、猶像法の法華
經の敵の内、何に況や、当世の禪・律
・念仏者等は脱るべしや。

經文に我が身普合せり。御勘氣をか
ほればいよいよ悦びをますべし。

例せば小乗の菩薩の未断惑なるが願
兼於業と申して、つくりたくなき罪な
れども、父母等の地獄に堕ちて大苦を
うくるを見て、かたのごとく其の業を
造りて、願ひて地獄に堕ちて苦に同じ、
苦に代れるを悦びとするがごとし。

此れも又かくのごとし。当時の責め
はたうべくもなけれども、未来の惡道
を脱すらんとをえば、悦ぶなり。

を証明しようというのか。

中国の天台大師に敵対した南三北七の学者たちや、日本
の伝教大師を迫害した南都七大寺の高僧らは、像法時代の
法華經の敵対者であり、現在の禪・律・念仏などの諸宗の信
奉者こそが、末法時代の法華經の敵対者であつて、彼らは
決してその立場から脱れることができない。

法華經勸持品の經文と私のこれまでの振る舞いは全く一
致している。それゆえ、幕府から罪科を受ければ受けるほ
ど、私の喜びは深くなつていくのである。

たとえば、まだ煩惱を断じていない小乗の菩薩が、「願を
業に兼ねる」といつて、本より造りたくない罪ではあるが、
みずからの父母などが地獄に堕ちて大変な苦しみを受ける
姿を見て、それを捨て置くことができず、わざと罪業を犯
して願つて地獄に堕ち、父母などの苦しみを代わつて受け
ることを自分の悦びとするようなものである。

私もまたこれと同じで、現在の迫害は堪えられようもな
いが、未来世での惡道に落ちる罪苦から脱れることができ
ることを思えば、大いに悦ばしい。

いものか、あるいは特異な形態か
と推測されている。二十七品から
なる。

妙法蓮華經 八卷、あるいは七卷。
「法華經」漢訳の現存三經中の第二
で、後秦の鳩摩羅什が弘始八年
(400)に訳出した。古来、「法華經」
は右の三存を含めて六度の翻訳が
伝えられているが、その中でも内
容的確さや文章の流麗さ等によ
り名訳として、「法華經」といえ
ば羅什訳というように、最も広く流
布した。二十八品からなる。

三類の強敵 釈尊滅後の惡世にお
いて法華經を弘める行者を種々
の形で迫害する三種の敵人のこ
と。「法華經」勸持品第十三に見え
る八十万億那由陀の諸菩薩の誓言
に基づいて、妙樂湛然が「文句記」
の中に示したものの①俗衆増上慢。
自らのうぬぼれや無智から正法の
行者を惡口罵詈し、刀杖による迫
害を加える在俗の人々をいう。②
道門増上慢。仏道修行をこころざ
す出家の身でありながら、うぬぼ
れが強く邪智に富んでいるため
に、俗衆を扇動して正法の行者を
迫害する人々をいう。③僧聖増上慢。
聖者のように装つて社会的に尊敬
を受けながら、内面では名聞名利
に執して惡心を懷き、正法の行者
を怨嫉するあまり、権力者を利用
して迫害を加える人々をいう。

南都七大寺 南都(南京)である奈
良の都にある七大寺の意。通常は
東大寺・興福寺・元興寺・大安寺・藥
師寺・西大寺・法隆寺をいうが、他
説もある。奈良および平安時代に
は国家鎮護の大本寺として栄えた
が、律令制度の廢絶や度々の火災
等により、中世以降は衰退した。